

静岡大学

地域課題解決支援プロジェクト成果報告書

第4号

目 次

成果報告書第4号の刊行にあたって

地域課題解決支援プロジェクトの概要	3
地域課題一覧	

公開シンポジウム「地域課題が拓く教育と研究の可能性」	9
伊豆賀茂地域における地域づくりの課題と可能性	
フューチャーセンター×地域 松崎町・菊川市・島田市における取組み事例から	
菊川地域でのプロジェクト ～茶夢来の取組み事例から～	
パネルディスカッション	

地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況	39
------------------------	----

研究フォーラム「伊豆半島をフィールドにした学習・交流・協働を考える」	49
フューチャーセンター×地域 ～対話と協働の取組み事例から～	
地域創造学環フィールドワークの取組み	
域学連携による地域づくり ～「ここは伊豆プロジェクト」の取組み～	
東伊豆空き家再生プロジェクトの取組み	
パネルディスカッション	

地域連携を通じた人材育成

静岡大学地域創造教育センター

2018

成果報告書第4号の刊行にあたって

静岡大学学長
石井 潔



今年、創立70周年を迎える本学にとって地域連携・社会貢献活動は、これまでもまたこれからもきわめて重要な課題となっています。地域に根差した大学という本学の方向性をあらためて確認するため、一昨年「地域志向大学」宣言を行いました、その基本方針は以下の通りです。

- ・「自由啓発・未来創成」の理念に基づき、社会の中の一員として、社会に開かれた教育研究を推進するとともに、社会が直面する課題に協働して取り組み、成果の発信と共有及び知の価値の共創を通して社会に貢献すること。
- ・知（地）の拠点として、地域社会と学生・教職員が相互に啓発しあう関係を構築するとともに、地域との協働による課題解決を通して、地域社会の価値の創造と持続的な発展に貢献すること。
- ・このため、地域志向教育の充実や、地域課題の解決に向けた取組の推進等の方針を、本学の学生・教職員、地域の皆様と共有し、地域を志向した大学改革を推進すること。

こうした方針は、本学のこれまでの歩み・精神を継承し発展させるものであり、地域に根差した大学という本学の方向性をあらためて確認するものです。

平成23年度に学生・教職員が地域社会と協働で取り組む地域活性化活動を支援する「地域連携応援プロジェクト」を開始し、今年度までのべ146件の応募に対し、これまで104件を採択して支援を行ってきました。

平成25年度からは、これまで大学との接点がない地域からも広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げ、第1期・第2期の公募で県内各地から計44件の応募をいただき、地域に赴きヒアリングを行って、地域課題データベースを作成・公開しています。興味関心を持った教職員・学生とのマッチングをはかりながら、年度をまたいで諸課題に取り組んでいます、その後の成果も積み上がり、このほど成果報告書第4号を刊行する運びとなりました。

本学は、静岡の地に根を張って成長してきました。「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」にも採択され、他大学、自治体、企業と連携して県内就職率の向上、新たな産業の創出、地域活性化に取り組んでいます。全学部の学問領域を横断する教育プログラム「地域創造学環」は、本学の地域志向宣言の核となる取組で、地域の抱える課題を解決支援する人材を育てようとしています。この地域課題解決支援プロジェクトも地域創造学環のフィールドワーク等とリンクしながら展開しています。

これまで刊行した成果報告書でもふれていますが、大学の構成員が恒常的に社会連携・地域貢献活動に携わることで、教育・研究のあり方が深化・拡充する、それがまた次なる社会連携につながるといった、教育・研究・社会連携のサイクルをつくることが本学の目指す方向性であると考えます。今回の報告書で取り上げた取組もまだまだ発展途上で、ようやく地域に根付こうとしているところですが、ご一読いただき、幅広くご助言、ご示唆をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

地域課題解決支援プロジェクトの概要

「地域課題解決支援プロジェクト」は、地域社会が抱える課題を大学が再発見し、大学のもつ様々な資源を活かしながら地域と大学が連携し、対応策をともに考え、協働することによって課題解決を支援する事業です。大学と地域との新たな連携を立ち上げるべく、これまで大学と接点がなかった地域や団体も含め、広く学外から地域課題を公募し、県内全域から27件（準備不足のため辞退された1件を除く）の応募があり、重点的に取り組む課題群をモデル事業として取り組みました。

モデル事業以外の課題についても、提案地域に赴いてヒアリングを行い、地域課題データベースとして学内外に広報し、興味関心をもつ教職員・学生とのマッチングをはかってきました。

第1期の地域課題に取り組む中で、継続的に地域とかわった学生たちの成長がみられました。そこで、これまでの地域課題に引き続き取り組みながら、平成28年度には第2期公募として、継続的に学生を受け入れていただける地域課題の募集を行い、全15件の課題が寄せられました。

寄せられた42件の提案課題については、ウェブサイトにて一般公開中であり、学内では各研究室・学生とのマッチングを進めています。学内外を問わず、各課題にご協力いただける研究室・教職員・学生・その他関係機関の皆様は、当センターまでご連絡ください。担当者がコーディネートをいたします。

- ・ウェブサイト URL： http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_index.html
- ・連絡先： TEL 054-238-4817、E-mail： kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

地域課題一覧

《第1期》

No	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	夢の里みつかわあぐりい（袋井市）	三川地区の課題は、『三川が誇る3つの財産（農業・環境・人）をより合わせ、欲しい、行きたい、住みたい地区を創る』こと。人との絆を大切に、心通い温もりのあるまちづくりに取り組みたい。	①出会いの場の提供をし、結婚する人を増やす方策 ②袋井市地域の活性化方策 ③地産地消の推進のための方策
2	御前崎市役所	御前崎市では過去の人口増加を背景に、原子力関連交付金等により公共施設の整備を進めたが、少子高齢化や人口減少により公共施設のあり方が変化した。公共施設マネジメントへの取組が必要である。	①今後の当市の財政状況分析 ②公共施設マネジメントの可能性及び取組手法 ③公共施設の費用便益分析
3	ユークロニア株式会社（静岡市）	県内の小中学校では睡眠不足からくる問題が顕在化している。「睡眠授業」の依頼が増えているが、研修にはマンパワーが不足。地域の課題として睡眠を整えることができる仕組み作りが必要である。	①睡眠教育の標準化や効果検証 ②教育者の育成 ③静岡独自の睡眠問題の調査により、地域にあった生活スタイルを探る。
4	NPO複合力（静岡市）	両河内地域の高齢化は進み、休講農地が増えている。森林公園「やすらぎの森」は、老朽化にもかかわらず年間30万人が訪れる。脱・限界集落の手がかりを得て、地域を活性化する手立てを考えたい。	①農産物の品質を高め、商品化する栽培知識技術。竹林等を伐採し、循環型資源とする知識技術。 ②グリーンツーリズムを活性化するための知識技術 ③大学生など若いマンパワーが恒常的に来園する方策
5	静岡市北部生涯学習センター美和分館	潜在的な利用者ニーズの把握が十分ではない。広く地域住民の生涯学習に対するニーズ把握のため調査を企画した。それにより、一層充実した学びの機会を地域に提供し、地域コミュニティ活動の推進につなげたい。	地域住民に対するアンケート調査への助言及び分析

6	静岡市立登呂博物館	リニューアルオープン後、年々来館者数が減少している。イメージ・キャラクターを使った誘客活動を行ってきたが、マンネリ状態になっている。また、多様化する来館者に対応するため、多言語仕様の資料が必要となる。	①イメージキャラクターを活用した教育普及事業の開催への支援。 ②登呂遺跡および登呂博物館の概要を紹介した多言語対応パンフレットの作成とHPの構築
7	NPO法人富士川っ子の会(富士市)	子育て支援中心の活動を、今後は生涯学習の観点から事業を広めていく必要がある。当NPO、行政、企業が協働できるようなテーマで解決を図る活動を展開する。活動拠点の確保、会員の若返り施策と後継者の育成が課題。	①当団体、行政、企業との協働により、団体の若返りと活動の幅を広げ、定款に示す事業展開の具体化。 ②活動拠点の確保。
8	油山川のマコモを根絶する会(袋井市)	油山川では700mにわたってマコモが繁殖し、流下能力を著しく低下させ、景観上からも問題になっている。河川管理者が年に1回刈り取りを行っているが、マコモは繁殖力が旺盛で、2カ月もすると元の状態に戻ってしまう。	活動の中で、マコモは根が残っていると再生するが、完全に取り出せば再生しないこと、天地返しにより根が腐り取り出せることが分かった。マコモの生態研究、根絶手法の検証で研究支援を期待する。
9	袋井市三川自治会連合会	高齢者が地域社会に飛び出せない、“生き甲斐や社会貢献”の機会が確保できない。	①高齢者の意識調査 ②高齢者のライフスタイルの解析 ③高齢者の社会進出の仕掛けづくり ④全国での成功(失敗)事例の紹介 ⑤街づくりワークショップ等への共同参加
10	南伊豆新生機構(南伊豆町)	①未利用の土地の有効活用がされていない。 ②地場産業が稼働していないため人口が流出している。 ③人材が育っていないため、外部の人材との交流がうまくできていない。 ④行政の協力体制がない。	①知的アドバイスの支援 ②人材の支援 ③資金の支援
11	焼津市役所総務部政策企画課	焼津市では、高度成長期の急激な人口増を背景に公共施設の整備を進めてきたが、老朽化が進んでいる。効果的に公共施設をマネジメントしていく取組が求められている。	地域の人口推移の検証や施設の利用状況を詳細に分析し、老朽化を迎えている集会施設の複合化案について提案頂き、市民への説明、話し合いを経て、建設計画を実現可能レベルに調整
12	浮橋地域のスローフードを考える会(伊豆の国市)	中山間地の活性化	①大学生の視点から、中山間地を幅広い世代にアピールするための意見がほしい。 ②ワークショップを取り入れながら、地元の自然を最大限に利用し、農業・観光へと循環させるプランを検討してほしい。
13	株式会社アイ・クリエイティブ/ジョブトレーニング事業(静岡市)	①ニート(若年無業者)増加問題。 ②静岡県耕作放棄地増加問題。	①大学に望むこと…ニート・ひきこもりや発達障害などの教育心理の知恵を貸してほしい。 ②ジョブトレーニングが提供するもの…ゼミ等の一環として参加してもらうことで、実態現場+学びの場を提供する。
14	松崎町	町内にはなまこ壁を配した歴史的建造物が残されている。所有者の高齢化、維持のコスト高等で取り壊すことが多い。町の財産ではあるが個人の所有物である歴史的建造物を、いかに後世に残していくべきか悩んでいる。	最小の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、古民家を利用したまちづくり手法と収益事業のアドバイスや、学生による町おこしや収益事業の模索など。
15	松崎町	町民の森「牛原山」を活用したいが、中途半端に行政主導で整備してきたため町民の利用が少ない。眺望はよく晴れていれば展望台からは富士山も望める素晴らしい山だが、利用されない。	人が集まる仕掛けや、町民が自ら維持や修繕に携われる方法を一緒に考え、里山の素晴らしさを内外に発信し、愛され利用される森にしたい。アドバイスや学生の知力、体力、気力を町おこしに活かしたい。
16	松崎町	松崎町では、ソフト、ハード両面からの防災施策が急務である。津波対策として水門の建設や防潮堤の嵩上げなど必要な事業だが、景観などの問題で全体の理解が得られない。	防災機能だけの無機質な防潮堤や水門を、どうしたら景観に配慮したデザインや機能を持たせることができるか、一緒に考えてほしい。
17	松崎町	過疎化・少子高齢化により、当町も多分に漏れず耕作放棄地が急増してきている。このままでは町内の農地が荒地だらけになり、今年度加盟を認められた「日本で最も美しい村」連合に恥ずかしい姿をさらしかねない。	耕作放棄地の解消だけでなく、永続的に利活用し続けることができる仕掛けづくりを期待する。当町での有効な作物の選別や耕作方法の指導、学生による農業体験事業化などでの協力がほしい。
18	松崎町商工会	松崎町の中心市街地である商店街が、過疎化・少子高齢化によりどんどん寂れている。このままではゴースタウン化してしまう。現在でも転居し、空き地になるところが後を絶たない。空き店舗も多く、シャッター商店街になりつつある。	商店街の魅力発掘と、買い物弱者である高齢者への商店街への買い物支援法。商店街のアート誘致、コミュニティ公園化について助言がほしい。全体的なデザインについても関わってほしい。

19	浜松都市環境フォーラム (浜松市)	浜松市はマイカーに依存した都市となっている。深刻な渋滞問題が予測され、抜本的な交通対策が急務である。工業都市として発展してきた浜松が、今後も持続的に発展していくには観光・文化都市としてのまちづくりが必要になる。	持続可能な都市づくりは、行政・民間が扱いにくい空白の分野で、大学の持つ知的・人的資源を活用して研究する価値が高く、実現を前提に「特区」の認定を受けられるような研究を期待したい。
20	伊豆半島ジオパーク推進協議会	伊豆半島ジオパークの進捗を判断する評価指標や調査方法の不足。貴重な資源の保全、教育、防災、地域振興等、様々な分野での取組があるが、活動の検証とフィードバックが難しい。	伊豆半島ジオパークの活動の進捗状況を把握し、フィードバックするのにどのような調査や指標が適当なのか、大学の知的、人的資源を活かしたモデル調査の実施、各種資料の収集と分析等。
21	三保の松原フューチャーセンター (静岡市)	①三保の松原の保全。 ②三保の魅力を知り、次世代へ伝えていく仕組みづくり。 ③三保住民の安全な生活環境の確保。三保で活動している団体は数多く存在するが、横の連携が取れておらず、協働できるきっかけがほしい。	①耕作放棄地を活用し、三保自生の松から植樹用の松を育て、商品化するための支援。 ②子供や住民が気軽に参加できるイベントを開催し、地域の関わりを強化するための支援。
22	焼津市市民活動交流センター運営協議会	焼津市内には市民団体が数多くあるが、団体相互の交流が少なく、協働もできていない。焼津市の抱える様々な問題に行政、企業、市民が協働して解決策を模索するようになれば、もっと良いまちになると思われる。	市民活動の実態を知り、その活動を直接・間接に支援できる人材育成を依頼したい。センターへの支援として、情報発信能力の強化、交流会の企画立案、市民が参加しやすい方法論の検討などがある。
23	静岡市葵生涯学習センター	①「生涯学習」の学習格差の解消 ②「生涯学習」に興味・関心がない地域住民に「生涯学習」に取り組んでいただけるよう支援していく	①地域の現状調査の一連の事業の中で、調査方法や課題解消への取組方法、評価方法へのアドバイスがほしい。 ②大学生等の若年層の認知を高める手法を開発、事業実施をする。
24	伊豆を愛する会 (南伊豆町)	ジオサイト候補地の里山を所有しているが、安全面の不安を理由に、南伊豆町観光協会と行政は消極的である。これまで500名以上の方が問題なく見学しており、地域の不安を取り除くために力を貸してほしい。	①岩石構造専門家の派遣をお願いしたい。 ②石切り場には、昔の人が文字を掘った跡が何か所もあり、解明されていないことも多く、歴史文化の専門家の派遣をお願いしたい。
25	静岡県／松崎町	①棚田保全・活用－石部地区の棚田を保全するとともに活用を検討。 ②特産品を活用して加工品づくりと販路拡大までを検討。 ③伝統芸能保存。 ④大学と地域のネットワーク化。	①既存のつながりでは生み出されていない部分の開拓に期待。 ②新しい視点で工夫を加えた加工品を開発してほしい。 ③継続的課題解決活動に取り組み、地元との連携を築いてほしい。
26	静岡県／東伊豆町	①エコタウンとしての売り出しに向けたガイドシステムの研究。 ②地域づくりインターンとしての学生の参加。 ③オリーブの里づくりへの大学の参画。	①エコ資源の活用方法の提案。 ②従来より長期的な関わりが可能な大学生の派遣と、長期的な関わりを求める。 ③オリーブの栽培の可能性について、植樹の段階からの研究を希望。
27	静岡県／南伊豆町	①竹の子振興方策の検討－産地化に取り組んでいるが、竹林の利活用についての研究が必要。 ②過疎地域における公共交通サービスの在り方の検討が課題。	①従来と異なる新たな竹の子の活用策の提案に期待。 ②集落が分散し、主要道路周辺のみを運行するのではカバーしきれない公共交通網維持の問題の検討に期待。

《第2期》

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	東伊豆町観光協会 (東伊豆町)	東伊豆のジオスポット・細野高原の「すき祭り」は、町民による活動が実を結び集客が伸び始めた現在、さらなる活動の展開が課題となる。町内へ観光客を誘導するための食品開発・土産物の展開などを通して、細野高原・東伊豆町の価値を高めていきたい。	学生たちには細野高原イベント委員会へ参画という形での支援を期待する。参画することによって、実行委員会や地域住民と交流を図るとともに、地域の実態を学生たちの目線で捉え、問題提起・解決方法の提案・提案の実行を実行委員会や当団体とともに作り上げていきたい。
2	静岡市葵生涯学習センター 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団	静岡市生涯学習センターは地域住民が豊かな人生を送るための場として活用されているが、学生・勤労者層は利用率が低い。すべての地域住民の生涯学習活動を充実し、地域と密着した活動とするため、事業の企画立案・運営に地域住民自身、特に若年層が参画することが重要である。	①市民協働・若者参画による生涯学習の活性化のため継続的な意識調査において、企画・実施・分析作業を支援してほしい。 ②若年層に対して、施設や生涯学習の認知を高めるための手法を開発・事業実施をしているが、そのプロセスに参画してほしい。 ③実習生制度への学生参加を推進してほしい。

3	富士のさとの森づくり実行委員会 (御殿場市)	国立中央青少年交流の家には様々な樹木が存在するが、一定の考え方をもちて植栽するべきであるとの意見が寄せられている。すでにランドデザインが一応存在しているが、これをひとつのたたき台にしてコンセプトを固めていく必要がある。	①学生の意見を反映した森づくりのランドデザインの再構築作業 ②ランドデザイン再構築に必要な森林の伐採等の作業 ③既存の草花の生育等に配慮した環境の専門家の指導、助言(整備時期、整備内容の決定)
4	松崎町	旧依田邸は築300年以上の歴史をもつ建造物で、伊豆半島の発展の原点であり、歴史的・文化的な価値が高いが、修繕・保存という課題に直面している。また町の地域資源として活用し、まちおこしの拠点とする方策を立案・実行することも課題である。	最少の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、歴史ある建造物を利用したまちづくり手法を提案してほしい。教職員・学生を送り出してフィールドワークとして支援していただきたい。
5	松崎町	当町では近隣に大学がなく、せっかく素晴らしい公開講座などがあっても、移動時間を考えると参加をあきらめるしかない。また、大学生との交流に時間とコストがかかるため、いつ何時でも交流が持てる状態にない。	今夏オープンした、シェアオフィス「ふれあいとーふや。」において、静大の公開講座を受講できるように配信を検討していただきたい。大学生との交流にも使っていただきたい。
6	松崎町	松崎町が抱える課題として、人口集中地域から遠いこと、交通手段が整っていないことがあげられる。そうしたハンディキャップを克服して交流を進める方法としてのICTの活用が考えられる。光ファイバー網の整備をしたが、利活用の具体的な方法が見つからずにいる。	防災や観光、福祉をICT技術で地方の不利、不便さを解消できる技術や提案の提供。
7	松崎町	全国で活発に行われているふるさと納税だが、当町では返礼品競争ではないふるさと納税本来の趣旨を踏まえた活性化を検討しているが、思ったように納税額が伸びない。	外部から見た松崎町の魅力を探り、そのうえでどのような返礼品やどうしたら納税満足度が上がるかを一緒に研究してほしい。
8	松崎町	町内に大学の施設や研究室などがいないため、産官学の連携した取り組みができない。また、仕事が少ないため若い人が出ていく。	新しい働き方や隙間産業などを学生と一緒に考案していただきたい。 例:耕作放棄地や放棄果樹園を集約し、都市部の週末農業体験のニーズへ繋げるなど。
9	茶夢来(菊川市)	環境整備や農業を核とした新たなライフスタイルを実現する地域づくりが必要となっており、食と農の拠点創造、食育の場づくりを目指している。地域住民の意識調査やニーズ調査をベースに、地域住民が一体となった取り組みを行っていききたい。	農業を核とした食育、地域食材を活用した商品開発、レシピ開発、ノルディックウォーキングを活用した地域健康づくりと観光開発など地域が一体となったまちづくりを目指したい。菊川ブランドのストーリー性の創造に大学の支援をいただきたい。
10	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	地域全体に「かわっこカフェ」の存在を周知し、自由に集える居場所であることを認知させる手立てを見出すことが課題である。参加者には「かわっこカフェ」の存在意義が理解されつつあるが、地域住民に「一度は行ってみようと思わせる仕組みの工夫」が必要である。	遊び塾と「かわっこカフェ」の活動を通して、次の点を明確にしたアドバイス。 1.地域に求められている居場所とはどんなものか 2.それはどのように形作られるべきか 3.地域での連携で欠かせないものは何か
11	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	富士市の高齢化率は全国平均程度だが、要介護者数が多く深刻な問題となっている。解決法として、高齢者が後期高齢者の介護を担当するようにして、循環型の介護要員を確保するという構想のもとで活動を進めている。	課題に対応する団体設立の可能性と実現のために必要なことのアドバイスをいただきたい。 1.介護者と要介護者の区分方法 2.適正報酬額の算出 3.団体の設立及びあるべき介護支援形態
12	自立快活プログラム実施 自立援助ルーム 訪問レストランf (浜松市北区)	障害者に対する理解と認知が低すぎ、まだ障害者であることをカミングアウトできない社会性が問題である。自立して一人暮らしする障害者も増えてきたが、結果的に介助者の手を借りるため、介助者本位のサービスを受けている。本来的な意味での自立援助が必要である。	①事業自体が本格始動していないので、まずグレーゾーンにどれくらいの障害者が存在しているのか示してほしい。 ②障害者のための恋愛対策に共に踏み込んでほしい。 ③理解促進を深めるための方策を検討してほしい。
13	認定NPO法人 クリエイティブサポ ートレッツ (浜松市西区)	障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」では、毎日30名以上の障害を抱えた方々が通ってきている。「多様で寛容な社会」の実現のため、できるだけ多くの人にこの場を体感してもらいたいが、一般の方々に足を運んでもらうことが難しい。	①学生たち自身が障害福祉施設を体験・体感してほしい。 ②その体験をもとに、どうしても自分の知り合いが障害福祉施設に関心をもつのか考え、実際に身近な人を誘ってきてもらいたい。 ③広く一般の人に関心をもってもらうための方法を共に考え実行していきたい。

14	空き家再生プロジェクト (静岡市駿河区)	空き家の利活用を促進し、地域社会の活性化に貢献することを課題として、次のような活動をしている。 ①空き家に関する研究活動(発生と利活用方法、意識調査) ②空き家の利活用にむけた啓発活動(イベント・セミナー) ③空き家再生活動(マッチングサポート・リノベーション)	積極的にまちづくりに関わることを目指して、空き家を再生したサテライト研究室を設けて、地域を活性化するためのリサーチ・研究を進めているが、この活動に継続的に関わってもらいたい。
15	南伊豆町	伊豆半島最南端に位置し、人口減少と地方経済の縮減が続く、その克服が基本的課題である。一方、豊かな自然環境をはじめとした地域資源も有し、大都市圏との連携を取りながら健康創造のまちづくりを進めているが、大学と連携することによってそうした取り組みを加速できる。	宿泊型のフィールドワークや長期休暇を利用したインターンシップ等を企画し、南伊豆ならではの地域資源を活かしたまちづくりに関わってほしい。

地域課題をきっかけに、それぞれの地域に入り、住民の方と交流し、課題解決と一緒に考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。

これまでに取り組んできた各課題の進捗状況は、こちらからご確認ください。

http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_history_list.php

公開シンポジウム

地域課題が拓く教育と研究の可能性

日 時：2017年12月27日（水）13:30～17:00

会 場：静岡大学静岡キャンパス 共通教育A棟301講義室

プログラム：

（1）地域連携・課題解決支援の事例報告

報告1「伊豆賀茂地区における地域づくりの課題と可能性」

報告者：深澤準弥（松崎町企画観光課）

山口一実（南伊豆町地方創生室）

荒武優希（NPO法人ローカルデザインネットワーク）

増田彩香（地域創造学環学生）

報告2「フューチャーセンター×地域 松崎町・菊川市・島田市における取組み事例から」

報告者：宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター）

増田彩香（静大フューチャーセンター運営学生）

報告3「菊川地域でのプロジェクト～茶夢来の取組み事例から～」

報告者：前島國治（プロジェクト・コーディネーター）

（2）パネル・ディスカッション

パネリスト：報告者、課題提案者

コーディネーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター）

（阿部）

去年（2016年）も「地域連携論」の授業の中で、学生の皆さんや市民の方においでいただき、ちょうど同じ日にこの会場でシンポジウムを開きました。そのときの主催はイノベーション社会連携推進機構でしたが、組織改編があり、2017年10月1日付で地域創造教育センターの一部門となりましたので、今回はセンターの主催となります。

大学に対し、地域から様々な課題が提案されていて、プロジェクトとして42件の課題がリストに載っています。今日は伊豆半島の南部、賀茂地域から3人のシンポジストにお越しいただき、ご報告いただきます。また、伊豆をはじめ菊川や島田においていろいろな取組みをしている静大フューチャーセンターから、宇賀田先生と学生ディレクターの増田さんに報告いただきます。それから、地域側として、菊川地域でのいろいろなプロジェクトに関して、コーディネーターの前島さんにお話を伺いたいと思います。

このシンポジウムの狙いは、教職員や学生の皆さんに地域の声を届けて、取組みをぜひ知っていただくことです。また、こちらの方から伊豆半島をはじめ地域に出掛け、大学、学生の取組みを紹介したいこともあり、最初に松崎町、その後、東伊豆町に行きました。今年（2017年）8月10、11日には、南伊豆町に伺いました。そのときは静岡大学だけでなく、金沢大学の地域連携推進センターの宇野先生の報告も入れて、複数の大学が地域に対してどんな支援ができるか、地域からどんな学びを得られるかというテーマでフォーラムを開催しました。大学のシーズにはどんなものがあるのか、地域のニーズにはどんなものがあるのかという形でキャッチボールをしながら、シンポジウムやフォーラムを続けてきました。今回は、学内で開催する、地域課題解決支援プロジェクトの第2回公開シンポジウムになります。

報告 1

伊豆賀茂地区における地域づくりの課題と可能性

松崎町における課題と可能性

深澤準弥（松崎町企画観光課）

1. 日本で最も美しい村連合

松崎町は伊豆半島南部の西海岸に面し、海沿いから富士山が見えます（図1）。人口は2017年10月現在6840人で、過疎化が進む町です。高齢化率も44.14%と、県内で5番目に高いところです。松崎町は2013年に「日本で最も美しい村」連合に加盟しました。この連合は、素晴らしい地域資源を持つ美しい町や村や地区が、「日本で最も美しい村」を宣言することで自らの地域に誇りを持ち、将来にわたって美しい地域づくりを行うことを目的としており、松崎町のまちづくりの方向性として

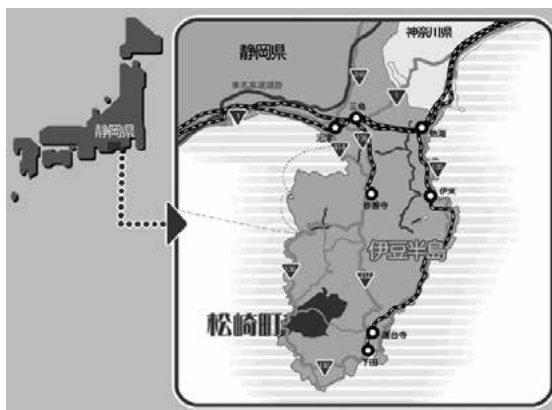


図1 松崎町の位置

としては一番合うのではないかとということで加盟を申請し、見事認定を受けました。

この連合は、同規模の地域や町がそれぞれ日本全国でいろいろな施策によって町を守ろう、もしくは町の資源を将来につなぐと活動している連合です。松崎町としてもいろいろな地域の知恵をいただこうと、連合と連携を取ったり、まちづくりについていろいろ取り組んだりしています。

2. 松崎町の構成資産と課題

松崎町には、連合に加盟する上で三つの構成資産があります。なまこ壁の建造物、石部の棚田、塩漬けのさくら葉です。

塩漬けのさくら葉は、さくら餅に付いている甘い香りのする桜の葉です。国産のさくら葉漬けの全国シェアは7割以上を占め、日本一となっています。ただ、中国産がだいたいぶ入ってきていて、中国産も含めるとシェアは40%ぐらいに下がってしまいます。しかし、虎屋などの高級和菓子店には松崎町産を使っています。桜の葉は、昔は大木から採っていたのですが、効率が悪いので、畑に桜を植えて、時期が終わると伐採します。そうすると、次の年に枝分かれして、



図2 さくら葉の塩漬け作業

低い高さでたくさん葉っぱが採れます。葉を摘み取ると、大きさごとに50枚ずつ選別します（図2）。これが「まるけ」と呼ばれる作業ですが、なり手がなかなかなくて、オートメーションにするか、こうした作業抜きでできないか、検討しているところです。

なまこ壁については、近年は古い建造物が、個人の所有物であったり、残していくには維持

が大変だったりして、だんだん無くなっているのが現状です。松崎町らしいシンボルとして、なまこ壁建造物をどう次世代に残していくか、一生懸命考えています。

石部の棚田の風景は、人が関わることによって守られるので、オーナー制度を用いたり、一社一村運動を展開したりしています。稲刈り前の風景はまさに日本の原風景だということで残しています（図3）。また、ウインターイルミネーションと銘打って、棚田のあぜに沿ってLEDをつけています。



図3 石部の棚田

松崎町の課題は豊富で、伊豆半島や全国の地方もみな同じですが、人口流出による過疎化、少子高齢化、地域産業の担い手不足や経済の衰退があります。つまり、人、金、知恵がまったく足りないのです。「地方消滅」といった暗い話ばかりが出ていますが、そのままではいけないということでいろいろ取り組んでいます。

3. 大学との連携

われわれは、静岡大学地域創造学環のフィールドワークにすべて丸投げするのではなく、地域と学生（大学）の連携を図ろうと考えています。伊豆半島南部には大学がないので、学生が地域の人と接点を持つ機会がなかなかありませんでした。東伊豆町の荒武君もそうでしたが、地域に関わることがとても大事なことで感じています。ただ旅行に来るのではなく、地域に関わって、人と会って、いろいろなものを得られたらいいのではないかな。

逆に、こちらとしても与えるだけでなく、リフレッシュできたり、いろいろな意味で考え方が勉強になったりするので、大学等のフィールドワークの受け入れはとても深くて広い意味があると感じています。学生の皆さんにとっては遠い田舎に来ることになりますが、いろいろな人といろいろな話題を共有し、課題に対する考え方を磨くことで、生き方としてお互いにすごくプラスになると思っています。

松崎町の可能性としては、まず大学との連携、自治体間の連携があります。南伊豆町や東伊豆町など同じ課題を抱えた地域もそうですし、姉妹都市や美しい村連合の関係で多くの自治体と連携が取れますので、そういったところで協力していけばいいと思っています。その他、金融機関との連携協定や企業の研修誘致、クアオルト（療養のための滞在）のまちづくり、景観まちづくりなど、取り組むべきことがたくさんあります。

4. 松崎町のあるべき姿

松崎町のあるべき姿は、まず「生涯活躍の町」ということで、健康で生き生きと生活できる町を目指します。高齢者が多いだけで限界集落といわれますが、実は無気力・無関心な若者が多くいても限界集落になり得ます。ですから、いくつになっても活躍できる町、笑顔が絶えず、生きがいややりがいを持って暮らせる町を目指します。それから、新しい働き方を見つけられる町です。今までは一つの職業だけでいろいろなことを賄ってきましたが、最近は兼業を認める会社も増えています。「半農半X」「半介護半X」など、兼業することによって新しい生き方や働き方、考え方ができることが推奨されています。

そして、「交流人口の多い町」を目指します。交流人口が多いということは、ただ観光客数を増やすだけでなく、一期一会を実践することで町との関わりを持ってもらうということです。

遊びに来ることも大事ですが、そこでいろいろな地域の人と会って、いろいろな話をすることによって、いろいろな考え方ができると思います。これから皆さんが大人になると、社会のいろいろな課題が立ちはだかると思います。その壁に当たったときに、そうした柔軟な考え方ができる人間力はとても大切だと思います。

5. 松崎町の可能性

具体的な活動としては、フィールドワークの学生に池を清掃していただき、足湯に作り変えたりしました。それから、学環の生徒に祭りのみこしを担いでもらいました。相当疲れていたようですが、こういった地域の活動に参加すると、地域の人たちがどんな生活をしているか、どんな考えで生きているのかを体験できると思います。

新しいアクティビティーとしては、冬でも山中をマウンテンバイクで駆け回ることができるので、新潟や長野で体験している人たちが冬場に松崎に来ています(図4)。

どこの地域もそうですが、地域に誇りを持ち、その地で幸せに暮らすことが可能なまちづくりを実践していくため、ぜひフィールドワークの皆さんとも一緒にいろいろなことを考えていけたらと思っています。多くの方が一生懸命、地域に立ち向かっています。松崎に来て、ぜひ実際に感じていただけたらと思います。



図4 新しいアクティビティー(マウンテンバイク)

南伊豆町における課題と可能性

山口一実(南伊豆町地方創生室)

1. 南伊豆町の位置

南伊豆町は、伊豆半島の先端にあります。石廊崎灯台は伊豆半島の最南端にあり、そこが南伊豆町の南端でもあります。東京で移住の説明会などをするとときに南伊豆の話をする、伊豆の南側全体が南伊豆だというイメージを抱かれることが多く、「南伊豆の下田ですか」などといわれます。そうではなくて、南伊豆町という場所があるという説明から入って、南伊豆の場所を分かってもらうことにしています。下田までは電車が通っていますが、松崎町にも南伊豆町にも電気がないというデメリットがあります。だから、人がだんだん離れていきます。

今年(2017年)、南伊豆町でフォーラムを開いていただいたのですが、その根底としては伊豆半島に高等教育機関がなく、皆さんのような年代の方たちがまったくいません。特に、天城山から伊豆半島南側で最も人材のいない層が皆さんの年代です。中でも特に、学生がまったくいません。ですから、皆さんのような学生が伊豆地域に来て学んでいただくことが、伊豆半島にとっては非常に重要になります。さらに、そこで学んだことを生かして伊豆で活躍してくれる意志を持っていただける方がいれば、伊豆地域はもっと豊かになっていくのではないかと思います。

2. 南伊豆の人口

南伊豆町の人口は、8500人を切ったと思います。今日(12月27日)の静岡新聞に、「静岡県は今年(2017年)社会増だ」という記事が出ていましたが、詳しく見ると伊豆地域は軒並み減っ

ていました。南伊豆町はこれまでずっと転入超過だったのですが、今年は十数人の転出超過になりました。人口は、2016年10月から2017年10月までで約150人のマイナスになっています。西伊豆町は、約250人のマイナスでした。人口7700人のところで、1年に250人いなくなっているのです。松崎町も約200人のマイナスでした。一番大きい下田市は約2万2000人の人口で、400人のマイナスになっていました。

つまり、南伊豆では、人口が年間約1000人ずつ減っているということです。下田市を合わせても3万数千人の人口ですが、その中から約1000人ずつ減っていくということは、あと20年ぐらいうると地域として成り立たない可能性があります。特に電車が通っていない地域では、公共交通機関が非常に脆弱です。そうすると、生産年齢層の中で公共交通機関を維持していく人口も当然減っていき、さらに暮らしにくくなり、人口減少に拍車がかかっていきます。ちなみに、南伊豆町の高齢化率は45%ぐらいですが、今日の速報値では49%を超えていました。7700人の人口のうち半分が65歳以上です。伊豆地域全体を見渡してみても、40%超えの地域がほとんどです。

20年後には伊豆地域全体で2万人を切るという推定で、その半分が65歳以上で、残り1万人のうち生産年齢層が7割程度ということは、約7000人です。松崎町の人口ぐらいの生産年齢層で、賀茂地域全体を支えていかなければならない状況になるわけです。こうなってくると、高齢者の生活は今でも不便ですが、さらに不便になるので、今のうちに賀茂地域全体で何らかの手を打っていく必要があるということが、フォーラムを南伊豆町で開いていただいた理由です。

実際にいろいろ見ていくと、県内の都市部（静岡、浜松など）への転出が多いです。あとは首都圏です。伊豆から見ると、静岡へ行くのと東京方面に行くのは距離的にそれほど変わりません。特に電車のない南伊豆などでは車で出掛けるので、静岡までは約3時間です。南伊豆町は現在、東京都杉並区といろいろな事業連携をしており、杉並区へも車でよく行くのですが、車で4時間ほどなので、首都圏とほとんど同じくらいの距離になっています。賀茂地域から出ていく方は、静岡近辺と首都圏が多い状況です。

年齢別に見ると、高校を卒業するあたりから20代前半に離れる人が非常に多いです。高等教育機関がない所なので、よそに出ていくのは非常に好ましいことで応援しているのですが、その後戻ってこられる状況にないことが伊豆地域の弱みだと考えています。さらには、皆さんのような年齢層が外に出ていくので、地域に存在しなくなってしまいます。だから、皆さんのような方がフィールドワークとして伊豆地域に入ってきて、ゼロだった人材層が伊豆地域で活動してくれることが、南伊豆地域にとって非常に有効な資源ではないかと考えています。

3. 南伊豆町の取り組み

南伊豆町は、地方創生の中で人口ビジョンをつくっています。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、2060年に現在のおよそ半分の約4000人になるといわれているのですが、その4000人を7000人規模で維持しようというかなり壮大な計画を立てています（図1）。今は年約150人ずつ減っていますが、これを50人程度の減少で抑えていこうと考えています。減ることは減るのですが、全国的な減少率と賀茂地域の減少率に大きな乖離があるのです。その乖離を埋めて、なるべく全国的な減少率程度に抑えていくため、7000人程度の人口規模の維持を目標として掲げています。

そのためにはスタートダッシュが必要です。人口の規模を維持するためには、毎年少しずつ積み重ねていくよりも、最初に一気に人を増やすことで、その後に影響が大きく出てきます。特に若い世代を呼び込むと、子どもを産んで、またその子どもが育っていく。最初の段階で若

い世代が入ってくることが、後々の人口規模の維持に大きく影響があるということで、そのような取り組みもしています。

そのための施策は、地域でずっと暮らしている人にはなかなか思い浮かばないので、皆さんと課題を共有して検討していくことで、どういうところ

であれば若者が暮らしやすいか、どういうところに魅力を感じるかを聞いていけば、今後の施策に反映できるのではないかと考えています。

南伊豆町では、衰退している民宿業などの活性化を図るため、夏に杉並区の子どもの対象に2泊3日の漁村交流ツアーを開催しました(図2)。今年は静岡大学の学生もボランティアで参加し、子どもたちと関わっていただきました。また、総務省から事業委託を受けて、地方に会社を誘致するサテライトオフィス事業に取り組みました。静岡大学にもサテライトオフィスの体験をしていただきました。これも若い世代の流入を進めていくための事業です。

今回、サテライトオフィスの事業の中で、南伊豆にきた広告代理店が漁師を題材にしたフリーペーパーを作りました。南伊豆の漁師を取り上げて、漁師の生活や魚を捕るための道具、魚を直送できるようなB to Cの販売システムの構築などを紹介しています。今年は3人を取材して3冊発行する計画が進んでいます。伊豆地域で約1万部、首都圏で約1万部を配布しています。



図1 現状のまま推移した場合の人口と将来目標人口の推移の比較(国立社会保障・人口問題研究所の推計を基に作成)



図2 子ども漁村交流ツアーパンフレット

4. 賀茂地域の連携事業

南伊豆町の人口維持のために、例えば下田市からの流入を多くしても、賀茂地域としてはあまり意味がありません。賀茂地域全体で人口の底上げを図っていかないと、賀茂地域の経済は良くなりません。ですから、いろいろな意味で広域での連携事業を行っています。

例えば、子どもたちの教育や若者を呼び込む施策などについて検討している中で、ふるさと納税に賀茂地域の広域で取り組んでみようということになりました。伊豆地域は三方を海に囲まれていて、東伊豆は相模湾、西伊豆は駿河湾に面しています。西風が強いとき、西伊豆では海のスポーツができません。ただ、東伊豆に行くと、できる可能性もあります。そういうところで海の事業者が連携すれば、西伊豆で駄目だったときに東伊豆にお客さんを連れていって遊ぶことができたり、東伊豆の海で遊んでいた人が松崎でマウンテンバイクで遊ぶことができたり、あるいは南伊豆でダイビングをした後に下田でおいしいものを食べることができるというふうに、いろいろな組み合わせの可能性がります。

今回、ふるさと納税をしてくれた方は、伊豆地域のアクティビティーをどの地域でも楽しみ

るという事業をモデル的に始めています。今後、これを賀茂地域全体に広げていくことで、賀茂地域の観光事業者の連携につながり、さらには賀茂地域のアクティビティー事業者と自治体がつながる可能性も出てきます。

今までは行政と事業者のつながりがなかったのですが、ふるさと納税の制度を使うと、行政からお客さんを送るので、業者は行政をお客さんを連れてきてくれる人という目で見えてくれます。そうすると、行政とのつながりも出てきて、行政にこういうことをやってほしいと言ったときに、ちゃんと言うことを聞いてくれます。そういうことで、賀茂地域のつながりをつくっていかうと取り組んでいます。

さらには、南伊豆町も「生涯活躍の町」事業に取り組みながら、人口減少に歯止めをかける施策を幾つか行っています。実は2018年度、南伊豆町では観光業を基本とした産業振興計画を作ろうと思っています。その前段として今年は商工会で、大手企業の中小企業診断士の資格を持った方に、2〜3泊で南伊豆町の現状を知ってもらい、計画づくりの基礎となるデータを集めてもらい、提案してもらおうという企画があります。もしこの提案が今後の計画に結び付くようなものであれば、中小企業診断士と学生にタッグを組んでもらい、南伊豆町に対して産業振興計画の基となる提案をしていただけるとありがたいと思っています。これは阿部先生を通してお願いしていこうと思っていますので、そういうお話があったらぜひ参加していただきたいと思います。

南伊豆は、河津町と同じで早咲きの桜が2月に咲きます。来年（2018年）も2月初旬から桜祭りを開催します。20周年なので、何かするかもしれません。パンフレットがあるので、興味のある方はお越しいただければと思います。

大学生×地域の可能性について

荒武優希（NPO法人ローカルデザインネットワーク）

1. 自己紹介

私は、東伊豆町から来ました。NPOの他に、東伊豆町の地域おこし協力隊としても活動しています。私も皆さんと同じように、大学生のときに東伊豆町に入って、地域で活動した身なので、私の経験を含めて皆さんに考えてもらえる機会になればと思います。

私は東京の芝浦工業大学で建築を勉強した関係で、地域の空き家を改修する「空き家改修プロジェクト」という学生団体を立ち上げました。地域に入って空き家を改修している中で、愛着が湧いたり、もっとできることがあるのではないかと思います。卒業後、東伊豆町に地域おこし協力隊として入りました。

東伊豆町は観光や宿泊産業が主産業の町ですが、私と同じような形で都市部から東伊豆町の旅館に就職する方がいます。地域にゆかりのない人たちが飛び込んでくるとなると、やはり都会とは少し違う不便さなどがあり、地域の魅力に触れることもなく、ただ働くだけになってしまいう状況を知ったので、私は地域と旅館などの若手従業員との接点をつくっています。

それから、静岡の人たちは子どものことを「子どもっち」と言うので、「CODOMOCCI(コドモッチ)」という、地元のお父さん、お母さんたちを集めて、町の子どもたちに地元のことを好きになってもらおうという活動をしています。また、今年（2017年）11月から、静岡大学の地域創造学環のフィールドワークも始めています。

拠点は、学生時代に改修した東伊豆町消防団第六分団の器具置き場（ダイロクキッチン）で

す（図1）。こちらでは若い人たちの交流拠点になるような企画をしたり、CODOMOCCI関係でダイロクキッチンを子どもたちの遊び場にしたりしています。静岡大学のフィールドワークではダイロクキッチンを拠点とし、宿泊施設としても使っています。キッチンも付いているので、商品開発などしながら、町を知ってもらっています。



図1 活動拠点ダイロクキッチン

2. 活動のきっかけ・経緯

私が東伊豆町で地域おこし協力隊として活動するようになったのは、友人が地域づくりインターンというフィールドワークのような授業の一環で東伊豆町に入ったことがきっかけです。大学院進学とともに、友人が東伊豆町の担当職員と密に連絡を取っていて、その職員の方が空き家担当になったことから、「町の空き家を改修してみないか」という話をいただきました。私はその友人から話を聞いて、ぜひとも伊豆で活動してみたいと思い学生団体「空き家改修プロジェクト」を設立しました。

まちづくりをテーマに空き家を改修していこうと考えて、修士1年のときに東伊豆町で活動を始めました。なぜ東伊豆で空き家改修をしたかったかというと、私の大学が机上で建物の図面を描いたり、模型を作ったりしていく教育方針だったこともあり、現場に出て建物を建てるようなことができず、何かもやもやしたものが大学生時代にあったからです。修士になったら現場に出て、実際に建物に触れてみたい、地域に入って活動したりしてみたいと思ったので、モチベーションはかなり高かったです。

実際に学生時代のノウハウを生かして、町に紹介してもらった9畳ぐらいの小さな物件を改修し、私たちは理想の提案が実現できたことに感動していました。しかし、それは町の人たちにまったく使われませんでした。地域に入って活動させてもらったけれども、その提案が実際にその土地に住んでいる人たちのためになっていないと感じ、とても悔しい思いをしました。

この失敗をきっかけに、知らない土地の出来事と心の中で捉えていたものが、自分たちが関わった責任を感じることで当事者意識が芽生え、ここから少しずつ地域に関わることにに対する意識が変わっていきました。役場からは、学生が地域に入って空き家を改修する活動を認めていただき、ダイロクキッチンの改修活動が修士2年のときに始まりました。使われなかった反省を生かし、町の人たちとの協議の場を役場の方たちに設けていただく中で、その場所をどのように活用していくかという話を進め、協議会で決まった提案を基に改修を進めました。

改修が終わり、町の人たちに使ってもらうため、「キッチン」という言葉を入れた「ダイロクキッチン」という名称にしました。「自分たちの手でこの場所を愛される場所へ」を目指したのですが、実際には協議会の中で、誰が運営していくのかという問題がありました。地方は担い手不足とよくいわれますが、東伊豆町もそのとおりで、誰が運営していくのかとなったときに手を挙げてくれる人は誰もおらず、どうしていくのかという話になったのです。そこで私たちは前年度の活動の反省もあったので、自分たちでやりたいという話をして、個人としては東伊豆町に移住して、地域おこし協力隊として活動しながら、学生仲間の卒業生を中心に「LOCAL DESIGN NETWORK」というNPOを立ち上げました。

3. 事業紹介

最初に、町に引っ越してきて働いている若い人向けの交流企画事業を例に、自分なりに目指

している状態、課題、事業内容、町中の意識、意識に対しての疑問、問題提起としての事業の狙いについて、考えていることを話します。

町中の皆さんの意識としては、旅館の仕事は大変だからみんなすぐに辞めてしまうんだという感じで、どこか他人事です。自分たちの町で起こっていることですが、旅館が頑張ればそんなことはなくなるのではないかという話をされていて、自分としてはそれってどうなのかなと思っていました。企業が努力するだけで、自分たちの町に若い人たちが住み着いてくれるのだろうかと思い、事業として取り組むことにしました。

そこで、この事業の中で問題提起をしていきたいと思い、若い人たちが地域で楽しく暮らしている姿などを、新聞やテレビなどメディアを通して地域の人たちに見てもらおうと考えました。そして、実際に困っている若い人たちの生の声を、他人事になっている地元の人たちに伝えていける機会をこの事業でつくっていかれたらと考え、若者交流事業を行っています。

若い人たちには仕事をするだけでなく、地域との接点をつくってもらいたいという思いがあるので、地元を楽しんでもらうということでダイビングセンターでダイビング体験をしたり、高原でパラグライダーの体験会などをしたりしています。

CODOMOCCIは、子どもたちに地元への愛着を持ってもらい、大学進学などで転出しても、地域に郷土愛を感じて何かしら地域と関わり続けられるような大人が増えたらいいと思って活動しているのですが、本当の狙いは別のところにあります。将来、この地域を出て都会で成功してほしいという親心のようなものを感じる機会が多いので、そういう親御さんの意識に対して問題提起できたらと考えているのです。私は東伊豆町に引っ越してから、子どもたちの将来のためにまちづくりを考えていこうという声を一度も聞いたことがありません。そこで、こういう声を上げてくれる大人たちをたくさんつくっていくことを、CODOMOCCIの大きな目的としました。大人たちが地元を楽しんでいる背中を子どもたちに見せていけば、子どもたちから変わっていき、親御さんも少しずつ意識を変えてくれるのではないかと考えて、大人の実行委員会をつくって活動しています。私の後輩たちがまだ空き家改修活動を続けていて、その拠点に小学生を集めて遊ぼうという企画をしています。

私の東伊豆町での立ち回りは、間接的問題提起戦法です（図2）。実際にアクションは起こすのですが、建前と本音は別です。建前の話はしますが、メディアなどで本音の部分を出していき、地域の人たちにも少しずつ感じてもらえたらと思っています。

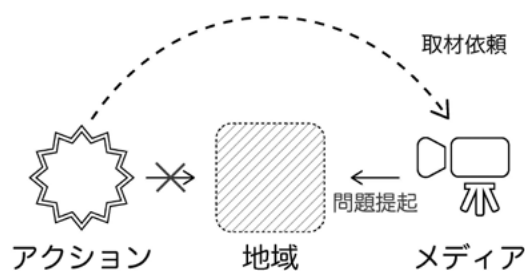


図2 間接的問題提起戦法

4. 今後の可能性

私は、地域に大学生として受け入れてもらった後、地域へ入り、今は静岡大学のフィールドワークをしたり、後輩たちの受け入れをしているのですが、両方の面を持つことができていると思い、私なりに考えてみました。

まず、課題は幾つもあるのですが、地域だけではまちづくりというジャンルの事業において、さまざまな策がないとなかなか課題を解決できません。担い手がないという問題や、他にもしなければならないことがあるというなかで、多角的に策を打って課題を解決するのは難しいのではないかと感じました。そこに学生たちが入ることの意義は、地域の人たちがやっていることに乗っかることも大事ですが、よそ者ならではのアイデアや考えを課題に対してどんどん

ぶつけていけるような、自主性みたいなものが求められると思っています。学生の強みは、受け入れ先の人が誰かしら責任を取ってくれるところだと思っています。自由さを忘れないでいただければ、きっと楽しい地域での活動になるのではないかとと思っています。

学生に求められるものは、自由でいることや楽しむことではないかと思っています。その中で当事者意識やチャレンジ精神、失敗も体験したら自分事になってくると考えます。それから、いい意味で空気を読まないような活動になってくるといいのではないかと思います。

また、私は学生時代に地元の人たちと話をした記憶がすごく残っていて、地域の人と学生との対話はとても大事だと思っています。地域として求められるのは、学生たちの提案に寛大であることや、時には厳しく怒るような面も必要だと考えています。あとは、意図的に失敗させることができると、学生たちも本気になるのではないかと思います。学生たちはみんな違うことを考えて、いろいろ一生懸命やっていると思うので、対話を通して学生の個性を知ること大事になってくるとと思っています。

学生の立場から

増田彩香（地域創造学環 学生）

荒武さんの下でフィールドワークをしている地域創造学環の1年生です。先ほど荒武さんが「自由に」「寛容に」と言っていましたが、私たちは本当に自由にフィールドワークをさせてもらっています。過去2回、東伊豆に行きましたが、やりたいことができてしまったというのが私たちの感想です。私たちがやりたかったのは、「人が行き交う稲取」です。現在、東伊豆町の稲取地域を中心にフィールドワークをしているのですが、私たちはそういう姿を稲取で見てみたいと思いました。そこで今日は「ハートプロジェクトin東伊豆」の企画についてお話しします。

私たちは、稲取で最初に町歩きをしました。例えば、稲取地域の景観が大好きで、「つるしびな」のイベントもとても楽しみです。また、おいしい食べ物も本当にたくさんあります。私が過去2回のフィールドワークで一番印象に残っているのは、私たちが普通に町歩きをしていたら声を掛けてきて、干し柿をくれた女性です。それも1人3個ぐらいの量をくれて、みんなでそれを食べながら町歩きをするという、入り口から楽しい経験をしました。

私たちが歩いた感想は、「稲取めっちゃええやん」でした。今まで知らなかったけど、こんなにすてきな町があるということに気が付きました。これを自分たちが知っているだけではもったいないと思ったのです。特に、私たちの世代の学生に知ってほしいと思いました。それなら、東伊豆町民のために魅力を発信する仕掛けをつくればいいのではないかと考えています。これはまだ結論ではありませんが、過程としてはこういうものがいいのではないかと考えています。

例えばInstagramは、魅力を発信する仕掛けとして既にツールになっているのではないかと考えています。ターゲットを大学生にして、手法としては魅力発信のためのフォトコンテストと、町を歩いてもらうためのスタンプラリーを考えました。私たちは、女子大生を主なターゲットにしています。女子大生が友達や恋人を連れて稲取の町を歩き、そこでまず稲取のファンになってほしいのです。「ファンがサポーターになって、サポーターからプレーヤーが発生する」というのは、NPO法人atamista（アタミスタ）の市来広一郎さんが言われた言葉です。とてもいいなと思って、使わせてもらっています。町歩き自体はただのツールで、そこから「また来たい」と思ってもらえることが大事だと思います。すぐに移住者を増やしたいわけではありません。子育てが終わったら東伊豆でのんびり暮らすというイメージができるような、充実

度の高い町歩きができたらいと思っています。

今年（2017年）はさすがに、ゼロから開催するのは無理なので、プレ開催をしてみようという話になりました。そこで、実際見てくれた方もいると思うのですが、FacebookとTwitterでイベントを立ち上げています。皆さん、お手元のスマホを出して、TwitterとFacebookで検索してみてください。日時は2018年1月20日11時からで、8時ごろに静大発で3カ所ぐらいお迎えにあがるので、時間のある方はぜひいらしてください。参加条件が幾つかありますが、そこはページを参照してください。参加方法は、Facebookで参加ボタンを押すか、Twitterでダイレクトメッセージを送ってください。締め切りは明日です。準備がぎりぎりなので、参加される方は今のうちに押して下さると嬉しいです。今回は参加費をいただきません。稲取まで行くのも、皆さん無料で行けるのです。本来は6000円かかります。来年（2018年）以降は送迎はしないので、無料で稲取へ行ける機会は今回最後です。ぜひ皆さんよろしくお願いします。

報告 2

フューチャーセンター×地域 松崎町・菊川市・島田市における取組み事例から

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター准教授）
増田彩香（静大フューチャーセンター運営学生）

（宇賀田）

今日の発表は、フューチャーセンターを通じた地域連携の事例報告で、教育と研究の可能性についても触れたいと思っています。学生の皆さんにとっては、地域連携の中でどう学んでいったらいいのか、地域の皆さんにとっては、教育機会としての地域連携をどう考えていったらいいのかという問題提起としてお聞きいただければと思います。

1. フューチャーセンターについて

（増田）

私から、フューチャーセンターとはどういう場所なのかについてお話しします。静大フューチャーセンターという場所をあえて言葉で表すとしたら、「課題を持った人の周りに多様な人が集まって、『ありたい未来』を対話によって考える場」であるといえます。私たちが大切にしていることは、多様性、ありたい未来、対話の3点です。



図1 立場の異なる人が集まるフューチャーセッション

多様性については、フューチャーセンターという場所にはいろいろな世代や職業の方が集まっています（図1）。IT関連企業の社長がいたり、大学の先生がいたり、大学生がいたり、高校生が来てくれる回もありました。こうしたいろいろな背景を持った人たちの違いを、私たちは歓迎しています。

また、私たちは、「ありたい未来」からセッションを進めることを大切にしています。通常のディスカッションや会議では、過去の事例から話を進めがちですが、フューチャーセンターでは未来の姿を考えて、私たちは今、何ができるのかを考えることを意識しています。未来にこうありたいと考えてから、実現のためにできることを考えていきたいと思っています。

私自身が対話する中で大切にしていることは、受け止め合うことです。その人が持っている背景や思いなどがあってその意見が出ているので、意見という表面的なものを見るだけでなく、なぜこの人はこんなふうに考えたのだろうと意識しながら対話しています。

次に、運営についてです。フューチャーセンターの開催までの流れは、まず私たち学生ディレクターと、テーマを持って来てくださるテーマオーナーとで直接話し合います。ここでも対話を進めながら、この人はなぜこのテーマを持ってきたのか、フューチャーセンターに対してどんなものを期待しているのか、場に集まる皆さんでどういう話をしていこうかということをお話し合っていきます。その後、宇賀田先生や佐藤先生と連絡を取りながら、部屋や日時など、いわゆるハードの話を進めていきます。そして、Facebook ページや口頭で告知しながら、人を集めます。

私は、人が集まって初めてセッションが成り立つと思っています。人が集まった場所であれば、どこでもフューチャーセッションができると考えています。そこで未来について対話しながら進めていくことをフューチャーセンターと呼んでいます。私たちディレクターは運営だけするのですが、当日は私も一参加者であり、テーマオーナーの一番のファンでいたいと思っています。セッション後のケアまでしていきたいと考えています。

私も今年（2017年）8月に行われた南伊豆のフォーラムに参加したので、そのことについて少し話します。南伊豆のフォーラムの翌日、フューチャーセンターを行いました。そこでは、南伊豆の20年後の未来の姿を考えようというテーマでセッションを行いました。その場では、出会って間もないのに、不満や変えたいこと、いい未来にするために自分が直したいことを、南伊豆の方がたくさん話してくれたのです。ですから、伊豆の方たちは不満をたくさん持っているのかなと思ったら、フィールドワークで東伊豆に行くと良い話をたくさんしてくれるのです。そのときに気付いたのは、外から来た学生に初対面の人がいきなり町の嫌いなことは話さなくて、最初は好きなことを若者に教えてくれるということです。

では、なぜ南伊豆の人が、最初に不満を言ってくれたのかというと、フューチャーセンターという場だったからではないか。これは私個人の考えですが、フューチャーセンターという場所だったから、地元の未来を語るために今の不満を語ることが許されている。そういう場が自然にできていたのだと思っています。私もこれから東伊豆に入っていくときには、もっと地元の人と仲良くなって、暗い話も聞けるようになりたいと思っています。

（宇賀田）

静大フューチャーセンターは、ちょうど5年目になりました。普段は、私の研究室のある共通教育C棟で行っています。人数が多くなりそうだと、共通教育L棟などを予約して行うときもあります。ほとんどの回が入り切らないので、廊下で行うグループもあります。多様な人たちが集まっていて、番外といってキャンパスを離れて行うこともあります。遠くは神戸市まで呼んでいただいたこともありました。

2. 活動事例

静大フューチャーセンターの大きな転機になったのは、番外編で2015年3月に松崎町に行かせていただいたときです。2月に松崎町で公開シンポジウムが行われたとき、フューチャーセンターの取り組みについて学生と一緒に発表し、松崎町役場の深澤さんはもちろん、住民からぜひフューチャーセンターを見てみたいという話をいただき、3月に学生4人と一緒に行ったのです。初日は住民の方と、翌日は中高生の皆さんとフューチャーセンターを行いました。地域連携や地域課題といわれるもので私たちが勘違いしてはいけないのは、私たちが何かを解決するのだと思って乗り込むのではないということです。解決の主体はあくまでも地域の方です。ただ、荒武さんの発表にもありましたが、内側だからこそ見えないものもあると思いますし、内側の人間だからこそ、なかなか手が出せないものもあります。そのときに、よそ者という要素が入ることによって前に進むこともあるだろうと思いました。

私たちは、課題解決というよりも、初日は「松崎町のいいところを教えてください」というセッションから始めました。参加したのは住民ですが、観光協会、猟友会、婦人会、農業委員などいろいろな立場の方が集まっていました。それぞれの立場で、この地域をどうするべきか、あるいはこういうところを何とかしたいという思いはあるのですが、私たちが行ったことによって、学生が大人同士をくっつけていたと感じました。これを私は「^{かすがいい}銚機能」と名付けました（図2）。

大人はそれぞれ自分の立場で物事を考えます。ただ、それを公に口に出す場はかなり限られているだろうと思います。そこに学生が入ると、隣の学生に「うちはこのなんだ」「もっとこういうふうにしたいのだ」、あるいは少しマイナスな話もしてくれました。学生を介して、町のさまざまなことが共有できるようになりました。このようなことがフューチャーセンターの価値としてできるということを初めて知ったのが、この松崎町の回でした。

それまで私自身、フューチャーセンターは学生の皆さんのキャリア支援の一つとして考えていて、地域や社会人ともっと触れ合う機会を1、2年生のときから持つてほしいと思っていたのです。しかし、課題の解決だけでなく、学生が入ることによって、地域課題の一つの手助けができるのではないかと考えるようになりました。

もう一つの転機になったのは、昨年（2016年）9月の菊川市市民協働センターとの連携によるフューチャーセッションでした。市民の方と静大フューチャーセンターのメンバー、フューチャーセンター卒業生のメンバーが集まって行い、お茶を中心に地域活性に取り組んでいる皆さんのイベントを、みんなでブラッシュアップしていきました。

その後、このイベントについてみんなで話をしたら、農学部4年生の学生ディレクターはこのセッションの価値について、「テーマオーナーが実現したい未来のために何ができるのかを、多様な参加者が自分事として考えることによって、仲間やファンができること」とまとめました。それが彼女の一つの気付きでした。また、こういうイベントをしたいというテーマオーナーが、やはりこれでいいのだという思いを新たにしてもらう回になったのではないかと考えました。

これから取り組もうとしているのが島田市との連携で、来年（2018年）1月8日にセッションを行います。チラシも学生の皆さんに配布していますが、お茶を活用した観光商品化というテーマをいただいたので、これにフューチャーセンターを絡めて何かできないか検討しています。「手づくりムービーが生む新しい観光」という名前のセッションを午前中にした後、高校生、大学生が実際に地域に出て、スマホで動画を撮って、最終的には市役所のホームページ等でも紹介することで、今まで気付かなかった観光資源を掘り起こせるといいと思っています。これがうまくいけば、伊豆地域でも同じようなことができないかと思っています。

深澤さんの発表の中でも、松崎町の代表的な構成資源が三つありました。ただ、私も松崎町に何度か足を運んでいますが、この三つで語れるほど松崎町は小さな町ではありません。もっとたくさん魅力があります。その魅力は、町の皆さんではなく、よそ者だからこそ見つけられるものがあるのではないかと。そういうものに取り組んでいきたいと思っています。

3. 地域課題と学生の学び

最後に、学生の皆さんにとって地域連携における学びをどう考えていけばいいか、地域の皆さんにとっては教育機会としての地域連携をどう考えていけばいいか、私案を申し上げます。

佐々木毅さんの言葉によれば、学びは4段階あるといわれています（図3）。「知る」「理解する」「疑う」「超える」だそうです。「知る」と「理解する」は同じように使われることがあり、フィールドワークに取り組んでいる地域創造学環の皆さんも、地域を知ること、理解することが第1段階だと教わっていると思います。しかし、地域を知ることと理解することは違うことだと佐々木さんは言っています。これは、私と佐藤先生がフューチャーセンターを通して、あるいはキャ

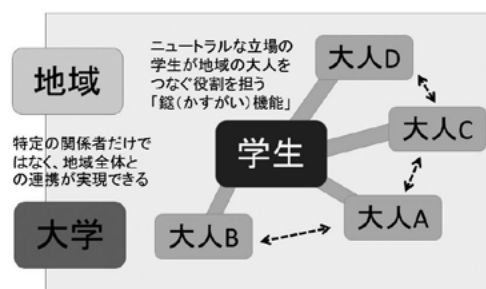


図2 松崎町での気づき「鋭機能」

リア教育の中で考えている「事実・解釈・主張」という三段論法とまったく一致していると考えています。

つまり、「知る」ことは事実をきちんと確認すること、「理解する」ことはそれを超えて因果関係や背景を理解することです。先ほど増田さんが、どうしてこの人はこう考えるの

だろうと言っていました、まさにそれが知ることでなく理解することです。想像しなければいけません。あるいは、いろいろな人の話を聞かなければいけません。

実際、地域課題は、ある人は賛成でも、ある人は反対ということが出てきます。例えば松崎町には観光の問題もありますが、防災の問題もあります。場合によっては、防災と観光は相反することです。一方では、防災は大事です。では、津波のために壁を大きくすることが観光にとっていいのかという議論もあるはず。そういうことにも私たちは触れていきたい。実際、町の姿を理解することは容易ではありません。ただし、いろいろな人のいろいろな考えに触れて、当事者となる学生の皆さんが実際にどう考えるかを深掘りしなければなりません。

そこで、次が「疑う」ことです。町の人はこう言っているが、本当にそうなのか。先ほど、荒武さんの説明にあったステップは、ちょうどこのステップが入っているのだろうとも思います。

そして、それを「超える」のは、主張すること、あるいは課題の提案です。地域課題は課題を提案することだと考えている方がいますが、課題の提案が先にあるわけではないと思います。また、フューチャーセンターは課題を解決するところではないと思っています。まずはみんなをよく知ること、そして理解することがフューチャーセンターでは見事にセッションの中に組み込まれています。そして、疑うこともできます。

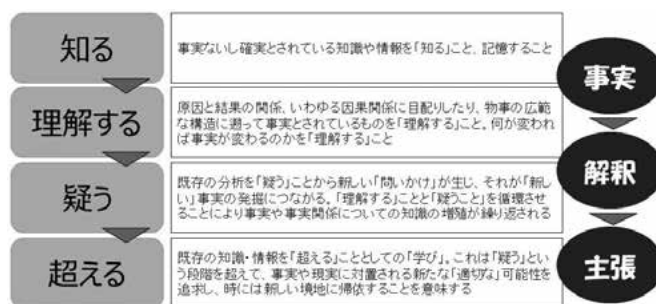


図3 学びの4段階
(出所) 佐々木毅『学ぶとはどういうことか』2012年

4. 大学での学びと地域課題解決

今日参加している学生の皆さんは1、2年生が多いと思います。卒業論文はかなり遠い存在になるかと思いますが、なぜ大学では卒業論文があるのか。日本のほとんどの大学はドイツの大学をモデルにして、研究をベースに教育していくことに取り組んでいます。なぜ研究を通して教育するかというと、私なりに捉えれば、研究を通して学びの論理的な考えを吸収するから、そして問題解決の手法を、研究を通して手に入れるからだと思います。

卒業論文の手順は、問い、仮説、調査実証、検証まとめ、論文ですが、研究の主体はまさに学生自身です。荒武さんの発表にも「当事者意識」という言葉が何度も出てきましたが、実は主体的に考えることが当事者意識を生む一つでもあります（図4）。フューチャーセンターに取り組む中でも、2～3時間の短いセッションでも、この当事者意識を持つことができます。

私が松崎町に興味を持ったのも、このセッションでした。恐らくシンポジウムだけ行ったのであれば、松崎町への思い

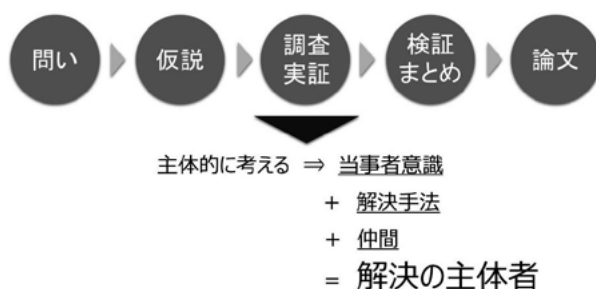


図4 大学での教育

はそれほど高くなかっただろうと思います。ただ、セッションをしながら住民の方の声などをいろいろ聞く中で、自分だったらどう考えるかということを随分考えました。そのことによって、私なりにも当事者意識はありましたし、私以上に当時の学生は当事者意識が芽生えたようです。今の4年生や卒業生は2015年3月以降、松崎町を何度も訪れて、自分たちがやりたいことをやって帰ってきます。場合によっては深澤さんをお願いして、また他の場合には地域おこし協力隊をお願いして、そのようにネットワークをつくっていったり、そういう当事者意識が生まれていったりするの、フューチャーセンターが起点になったのだろうと思っています。

問題解決をするには、恐らく次の三つが必要だろうと思っています。一つは当事者意識です。これがないと、問題解決の主体にはなれないと思います。人ごとである限り、最後は覚悟がないのだろうと思っています。自分ならどうするかという思いを持つことが、私は大条件だと思っています。二つ目に、解決手法を手に入れることです。協議会をつくって取り組むのも解決の手法ですし、問題を論理的に考えることも解決の手法です。そういうことを手に入れることも大事です。そして、三つ目に仲間です。やはり一人ですることには限界があります。町の課題は非常に複雑多様化しています。その中で、一人でできるスーパーマンはそういないと思います。そうした場合、仲間をつくっていく作業も非常に大事だと思います。そして、ようやくこれで課題解決の主体者になれるのではないかと。

この三つを一度に手に入れられるのがフューチャーセンターだと、この5年間やっている中で感じています。2〜3時間の中ですが、そのテーマに対する当事者意識、そして論理的に解決手段を考えていくセッションの手法、そして何よりも仲間です。菊川の事例でこのことを実証できたと思っています。

静大フューチャーセンターは、Facebookでもイベントページを立てています。事前にテーマが発表されるので、一緒に考えたいテーマが見つかったら、ぜひ学生の皆さんにも来てほしいと思います。私としては、今年（2017年）8月に南伊豆でフューチャーセッションを行いました。南伊豆の山口さんにも「ぜひ次に行かせてください」と無理なお願いをしています。伊豆でフューチャーセッションと一緒にやりたい方は、ぜひ声を掛けていただければ、一緒に行きたいと思っています。

私の話が、学生の皆さんにとってどう学びを高めていってもらえるかということと、地域の皆さんにとっては教育機会としての地域連携の学びを考えていくきっかけになればと思います。

報告 3

菊川地域でのプロジェクト ～茶夢来の取り組み事例から～

前島國治（プロジェクト・コーディネーター）

（編集者注）

報告3「菊川地域でのプロジェクト～茶夢来の取り組み事例から」には菊川市若手お茶生産者グループ「茶夢来」代表 土井宏道さんと前島さんをお呼びしていましたが、土井さんがインフルエンザで欠席されたため、プロジェクト・コーディネーターの前島さんに報告していただきました。

はじめに

私は前島企画という会社を興して、企画開発の仕事をしています。民間のいろいろな課題に対してアドバイスをしたり、商品開発のお手伝いをしたり、地域開発に携わる仕事をしています。民間にせよ、行政にせよ、私のところには課題のないところから仕事は来ません。課題があって初めて、私はフィールドを持てます。私にとって民間であれ、行政であれ、課題は資源です。課題を資源として捉えることができたときに、いろいろな未来が開けてくるのではないかと、もしくは課題を資源として捉えて克服したときに、地域もしくは民間事業者にとって革新性が生まれてくるのではないかと。そういう意味では、課題は本当に貴重な資源だと思っています。

今日の発表で、松崎町、菊川市、さらにはフューチャーセンターという言葉が出てきました。私はこの三者からたくさんの方の話を教えていただいています。今日はこの三つの取り組みを皆さんの前で話せるという、本当に夢のように幸せな時間です。

1. 茶夢来の創設

まず、土井さんに代わって、土井さんが進めてきた茶夢来の事例を紹介します。土井さんは茶農家に生まれましたが、茶農家が大嫌いだったそうです。それで、菊川を出て大阪に行き、整体師や鍼灸の勉強をしながら、その道で自分は立っていかうとしたらしいのですが、大阪に行ってお茶が茶色かったことにまず驚いたそうです。向こうではほうじ茶をよく飲むらしく、そのときに自分が普段飲み慣れている緑茶は特別なものだったんだという感覚を持ったそうです。さらに、大阪の方と話をする中で、「茶畑の風景は非常に素晴らしい光景だ」という声をたくさん聞いたそうです。自分たちには当たり前の光景だったのですが、外に出ることによってお茶の魅力を再確認した経験を持ったそうです。そういうものが土井さんの中に芽生えたことで、大阪から菊川に帰ってきたら茶農家を継ごうということになったそうです。

菊川に帰ってくると、若手の茶農家の集まりに参加しました。すると、自分と同じように、菊川を一度出てから、帰ってきて茶業を継いでいる若手の茶農家が非常に多いことに気が付いたそうです。やはり外に出て見えてくるものがあるのでしょう。そういう仲間と一緒に、今度は当事者として地域もしくはお茶に向き合ったときに、昔は作れば売れる時代だったけれども、今は食生活や食文化が変わって、なかなか昔のように売れなくなっているから、私たちお茶の生産者も変わっていかなければならないと気付いたそうです。

その中で、まずはしっかりお茶の訴求をして、お茶の魅力を発信していく活動をするために、

お茶に夢を抱き、未来をつくる「茶夢来」というグループを立ち上げたそうです。茶夢来は今まで、いろいろな目標を持って活動してきました。菊川では、茶フェスというイベントを毎年開催しています。それから、茶夢来カフェといって、古民家などを活用して、地域住民の方や外から来た方といろいろな意見交換をして楽しむようなことをしました。それから、静岡大学のフューチャーセンターが菊川に来てくれて、菊川フューチャーセンターの立ち上げをフォローしてもらいました。第1回は茶夢来の方々のアジェンダ（agenda）が話し合われました。今までミラノ万博でのPRなど、いろいろなPR活動を主にやってきました。

その中で、壁に当たりました。PR活動をしているけれども、実際に自分たちが思い描いた未来はなかなか実現していないのではないかと考えたのです。ただ作っただけでは売れないという中で、訴求はしたけれども、実際の経済基盤をしっかりと作り上げるところまではなかなかできていなかったのです。土井さんたちはその中で販路改革や流通をしっかりと創造していくことによって、地域の農業もしくは茶農家、茶振興という形で貢献していきたいと考えるようになったと聞いています。

2. 菊川地域での地産地消

なぜ私が菊川と関わりを持ったかという、先ほどの静大フューチャーセンターの宇賀田先生に、菊川市での農業の若手リーダーを紹介してもらい、その方と話した中で、「ぜひ菊川市の若手農家の会合に出席してほしい」と言われ、参加したことがきっかけでした。そこは、菊川市と足並みをそろえて連携しながら農業を活性化していくための話し合いの場でした。その中に土井さんもいて、私は土井さんと知り合いました。土井さんはその会の代表を務めていました。

それから、お茶以外の枝豆、芽キャベツ、オリーブなどいろいろな生産に関わっている若手農業者の集まりが、菊川市農林課と話をするという会に同席しました。そのとき、菊川市では、農業を中心とするライフプランの提案をしたいと言っていました。それに対して、若手生産者グループの意見として、農業を中心とする地域活性化を提案してきました。それが受理されて、今では総合戦略の中で取り組むところまで来ています。

提案内容は、農業を中心とする地域活性化とはどういう状態なのかというところに端を発し、農業を中心とする地域活性化とは地産地消の推進であるというところに落ち着きました。今はどこも地産地消をうたっていますが、本当にそれが地域で食べられる状況にあるのかどうかを調査しました。実際に役場周辺の農協と大手スーパーの4店舗で、地域のどんなものが売られているかをリサーチしました（表1）。

農協のミナクルには地域のものが集まるだろうと思っていましたが、実際にたくさんのものが集まっていました。さすが農協です。しかし、その他のスーパーでは、菊川市内で生産されたものがほとんど販売されていませんでした。これらのスーパーは結構大型で、非常に集客力のある店ですが、菊川のお茶や米が置いてあるところは非常に少ないのです。その他の生産物については一応、地場産品コーナーという名前は付いているのですが、よく見ると大井川農協や掛川農協であり、菊川市内で作られた生産物はほとんど手に入らない状況でした。これではそのスーパーを利用する皆さんが、菊川の地場産品を手にする機会が非常に少なくなってしまう。米に至っては、地元のものを食べる機会が非常に少ないのではないかと想像できました。そこで、地域活性という名前の下に地産地消を進めていくためには、どんなエリアでも手軽に地域のものが手に入る状況をつくる必要があるのではないかと考えました。

しかし、先ほどのスーパーに地域のものをぜひ扱ってくださいとお願いすれば、1回ぐらい

表1 地産地消の地域リサーチ（農協・大手スーパーの売り場調査結果）

店舗	農協ミナクル	スーパー・ラック	しずてつストア	遠鉄ストア
お茶	複数の品ぞろえ	なし	なし	菊川の茶
売り場	コーナー化	***	***	2種類
米	複数の品ぞろえ	小笠の米	なし	なし
売り場	コーナー化	1種類のみ	***	***
野菜、果物	ほうれん草、春菊、トマト、小松菜、アスパラ、水菜、山東菜、ジャガイモ、キャベツ、薩摩芋、里芋（海老芋）、玉葱、ブロッコリー、わさび菜、カリフラワー、小株、茄子、芽キャベツ、プチベール（非結球キャベツ）、胡瓜、フリルレタス、リーフレタス、レタス、白菜、根深ねぎ、葉ねぎ、黒大豆、青大豆、大豆、アロエ、生姜、銀杏、ローリエ、唐辛子、自然薯、八朔、清見、甘夏、伊予柑、蜜柑、金柑、檸檬、クチナシ、大根、苺	芽キャベツ	胡瓜	セロリ、葉ねぎ、レタス、ほうれん草、菜の花、金柑、水菜
食肉	なし	なし	なし	なし
	***	***	***	***
鶏卵	なし	なし	なし	なし
	***	***	***	***

は扱ってくれるかもしれませんが、結果として売れなければ売り場には残りません。それは民間事業として当たり前のことです。売れないものをずっとそこで売り続けることはできません。地産地消で、どこでも手軽に地域のものが手に入る場所をつくるためには、それが売れなければなりません。では、売れるためには何が必要かという、消費意欲を喚起することが重要であるという考えにつながっていきました。

では、それをどう起こしていくのか。菊川市では、学校給食の中で菊川産のものを使った給食が年に10日間食べられていました。とてもいい取り組みだと思っていたのですが、学校給食では食べるけれども、家庭では特にその日に菊川のものを食べることはなかったそうです。そこで、せっかく学校給食で菊川の地場産品を10日間も食べる機会があるなら、その日は家庭でも地域のを食べる日にしたらどうかということで、「菊川の日」を提案しました。学校給食で菊川のものを食べて、家庭に帰っても菊川のものを食べるという形で消費を喚起していけないかという取り組みを目指しています。

3. 地産地消のための手立て

菊川には13カ所の地区センターがあります。ここで各地域のいろいろなイベントや催し物が盛んに行われていて、私が思っていた以上に、コミュニティとしてしっかり形成されています。この13の地区センターは、市内にある小学校や中学校をすべて網羅しているので、地区センターを通じて小学校や中学校にアクセ

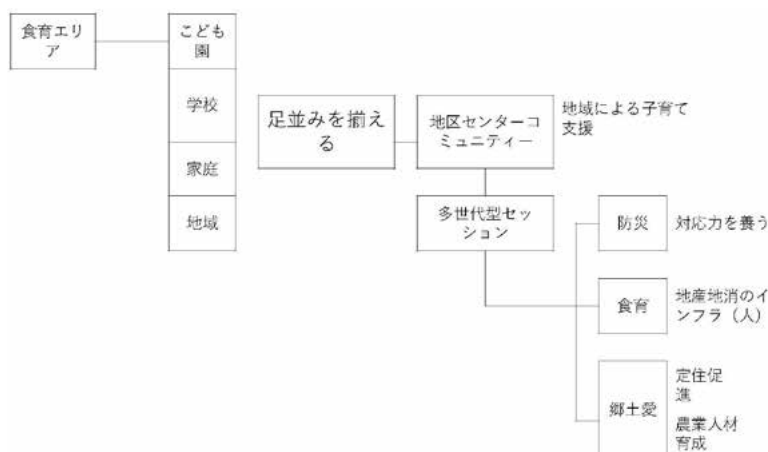


図1 食育の推進を通じて「人のインフラ」を整備する

スできることが分かってきました。地区センターを通じて、皆さんに地産地消につながるようなことを話し合ったり、調べたりする機会をつくってほしいと考えています。

現在、インフラの整備という形で次のような提案をしています。ハード面では、地域のどこでも地場産品を手にするができるようにします。そのためには、人のインフラが必要です。郷土愛などにつながるものだと思うのですが、地域のものを食べたいという人のインフラをつくっていくために、食育を推進していきます。それも端的に行うのではなく、生産者、行政、家庭も含めて、さまざまなところが足並みをそろえることによって、食育を推進しようと提案しています（図1）。

次に、ネット環境の整備です。例えば実際に皆さんが「菊川の日」に地域のものを食べたときに、「うちではこんなものを食べた」「こんな料理にして食べた」というコミュニケーションを、13地区センターのホームページでできないかと考えています。地区センターのプラットフォームに行くと各地の活動が見られたり、食育の推進をさらにバージョンアップするため、情報の共有化ができるネット環境がくれたらいいと思っています。

また、これらの事象が地域活性に至っているのかどうかを検証していくときに、アンケートという意見が出てきたのですが、アンケートはいいことしか書かなかったり、「○×」にすると○が付きやすかったりするので、それは冷静な判断にならないのではないかと。むしろ地域活性された状況では、ネット上のアクセス、例えば菊川市のホームページの中にプロジェクトのコーナーがあって、そこへ市内からどれぐらいアクセスが来ているか、もっと言えば地区センターのホームページにその地区からどれぐらいアクセスがあるかという形で数値目標を立てて、地域活性の状況を推し量りながら、それを増大させる計画を立てていくことを現在進めています。

4. 菊川フューチャーセンター

その一番の入り口として、まずは地域の子どもたちとセッションしてみたいということで進めたのが菊川フューチャーセンターです。先ほど宇賀田先生が報告されたフューチャーセンターは、茶夢来を通じて一般の人も混じえて行ったフューチャーセンターです。それを翌年（2017年）1月に、市民協働センターの主催で茶夢来のアジェンダで開催していただきました。参加者として菊川西中と常葉菊川高校の生徒30人ぐらい来てくれて、菊川フューチャーセンターを行いました。静大フューチャーセンターが来て行ってくれたものを、今度は自分たちで実際に開催できるようにしていこうという取り組みだと認識しています。

その中で、菊川フューチャーセンターではまず、菊川の魅力についてブレインストーミングしました。そのとき、「お茶」というキーワードが出てくるといいと期待しながら、できるだけ先入観を与えずに、子どもたちのプレストを見守りました。そうすると、参加した子どもたちから「お茶」というキーワードがたくさん出てきました。それは茶夢来の皆さんもとても喜んでいました。その後、「お茶の印象」についてプレストしたとき、「お茶は健康にいい」「茶畑がとても美しい」など、お茶に関するイメージもたくさん出てきました。中には、「コンビニで売っているお茶はお茶ではない」など、お茶に対する価値観みたいなものが見えてきました。

食育がどんなふうに子どもたちに伝わっているのかを見るには、菊川フューチャーセンターの子どもたちを対象に声を拾った活動は、とても有意義なものだったと思っています。この活動を1カ所だけでなく、13カ所で開催することによって、たくさんの子どもたちと地域住民の方々の声を拾っていく取り組みが、菊川の中で目標として計画されています。地域活性に対しては、やはりいろいろな人の声を拾う仕組みを持つことが大事ではないかと思いました。菊川にかか

ならず、いろいろなところで子どもたちの声は意外と拾えていなくて、なかなか反映されていないという印象を持っていたので、まずどんなふうにみんなが思っているのか、声を拾っていかうと考えました。

例えば、フューチャーセンターでセッションを開くと、そこに参加してくれた方の声は非常に拾いやすいです。しかし、そこには参加しないけれど、当たり前のように愛着や郷土愛を感じている方は地域にたくさんいて、そのような人たちの声はなかなか拾えていないという現状を、三保でも松崎でも菊川でも見てきました。そのためには、セッションを開くだけでなく、自分たちが地域に出て行って、そういう人たちの声を拾う活動をぜひ推進していこうと考えています。

5. 今後の活動

松崎町で常葉大学の山本先生が、石部の棚田の保全に入ってくださっていますが、山本先生は聞き書きという取り組みをしています。聞き書きとは、まずは学生たちが棚田の保全のために汗をかき、地域の要望に応じていって、その次に、学生たちの学びの場としてもぜひ地域を提供してくださいということで、その学生たちが地域に行って、地域住民の声をインタビュー形式で拾ってくるのです。そういう活動が現在5年目になります。「聞き書き」という冊子が毎年できていて、石部、松崎、岩地、雲見の4冊が既にできています。住民の生の声が反映されている冊子で、郷土史のように本当に面白いので、機会があればぜひご覧ください。

それと同じように、積極的に住民の声や子どもたちの声を拾っていくことは、とても大事だと思います。では、誰がそれを一番上手にできるかというと、小学生の声は中学生、中学生の声は高校生というふうに、その少し上の世代が行うといいのではないかと思います。

では、一般の人たちの声は誰が拾うのがいいかというと、おじいちゃんやおばあちゃんが拾った方がいいわけではなくて、そのときに私のような外から来たおじさんが「すみません、こういうことを調べているので、ぜひインタビューに答えてください」と言うのと、学生たちが行って「今こういうことを勉強しているのです。ぜひ地域のことを教えてください」と言ったのでは、どちらが声を拾いやすいかというところが明確です。

静大は、非常にたくさんの方々方が伊豆地域に入ってフィールドワークをしていると思いますが、実は今、菊川市と松崎町では、交流しようという形でプロジェクトが立ち上がっています。そのプロジェクトは、民間ベースで交流を促せないかということで取り組み始めたところです。来年（2018年）には、子どもたちの体験交流も計画しています。このように松崎と菊川は、距離が離れているのに交流が起こってくるのです。これを静岡県のマーケティング課に話したら、「なぜ菊川は松崎なのですか」と言われました。そう言われたことに私はまず驚きましたが、松崎と菊川には共通点と違いがあるから、こんなに交流しやすいところはないと説明しました。共通点と違いの中身は、ぜひ皆さんで想像してみてください。

そのような形で、伊豆と菊川は非常に近い関係性を築こうとしています。その中に、私たちはぜひ、住民の声、子どもたちの声を拾っていきたいと思っています。もし、学生たちの中で興味を持った方がいたらぜひ菊川にも足を運んでください。

パネルディスカッション

阿部——かなり短い時間で中身の濃い発表をしていただいて、この時間ではとても足りないというところがたくさんあると思います。補足と、他の提案者、報告者への質問や確認も含めて、深澤さんから順にお願いします。

深澤——先ほどは地域の課題解決から入り、学環とフィールドワークの受け入れ、そしてフューチャーセッションの効果の話をしていなかったので話します。実はあの後、学生にかすがいになっていただいたおかげで、各団体がうまくつながる機会を提供できました。もっとあのような場や時間をつくることを、僕たち行政がしなければならないと感じています。

ただ、行政で主導していろいろなことをすると、地域の人が構えてしまったり、依存する形になりがちです。ですから、地元住民から自発的に活発な意見を吸い上げることがフューチャーセンターでできたと思っていて、可能性を強く感じています。翌日の中高生については、皆さんのような世代が本当にゼロなので、これまでそういう方々と話をする機会は、身内とか、近所の人が里帰りしたときぐらいしかなかったのです。そういう人たちと地域の課題や自分の将来、自分の疑問を話す機会はとても貴重だったと思っています。可能性がとても広がった2日間で、フューチャーセッションをやったことは松崎町にとって素晴らしいことだったと感じています。

阿部——南伊豆町の山口さんには、学生が行って活動したのが8月ごろですので、その点も含めてお話しいただければと思います。

山口——学生の皆さんは、なぜ大学進学の道を選んだのですか。私自身は高校を卒業して、町の就職試験を受けて採用していただいたので、高卒で南伊豆町に入りました。出身も南伊豆町だったので、外に出ることなくずっと南伊豆町で暮らしています。多分、皆さんはそれぞれ将来の夢ややりたいことを持って大学に入ったり、それを見つけようとして大学に入ったり、いろいろな方がいらっしゃると思います。

私は就職した後、やはり大学に行っておいた方がよかったと考えて、通信で少し学びました。でも、大学は通信で学ぶところではないなと思いました。同じような意志を持った学ぶ人たちが集まって研究や勉強をするところが大学の良さではないかと思い、これは違うなと思って途中で断念しました。そういうこともあって、皆さんが静岡大学に集まって仲間と一緒に勉強している環境は、非常に素晴らしいと思っています。皆さんは意志を持って静岡大学を選択して、4年間ここで学んでいこうとそれぞれの考え方に基づいて集まっているのではないかと思います。

今回、南伊豆町に静岡大学の学生にお越しいただいて、本当に短い間ではありましたが、南伊豆を学んだりいろいろ見ていただいたりした中で、フューチャーセッションには地域の大人たちも参加してくれて、和気あいあいとグループに分かれて話をさせていただきました。学生の熱意やパワーを非常に感じましたし、意見を引き出す能力も、これは慣れもあるかもしれませんが、若い学生がいることで大人たちも非常に話しやすい場ができたのではないかと感じています。これはやはり地域の中にいない人材が、地域に入って活動する一つの素晴らしさではないかと感じています。

阿部——荒武さんはだいぶ濃い1年になったと思いますが、いかがでしょうか。

荒武——だいぶ濃い1年がたちました。去年（2016年）の今日は、大学生からそのときに至るまでの話をさせてもらい、基本的にダイロクキッチンのお話をしたと思いますが、今年（2017年）はそのフィールドをもう少し地域に広げて、その中で課題を見つけていきました。ダイロクキッ

チンでの実感を基に、いろいろ疑問に思ったことをアクションに起こしていった一年なのかなと考えています。

私と同年代の仲間たちと一緒にNPOを立ち上げた話ですが、自分以外には松崎町の地域おこし協力隊の寺田君もメンバーに入ってくれていて、他の空き家改修プロジェクトのメンバーは基本的に東京の大きな企業に就職しましたが、社会人になっても東伊豆町に関わり続けたいという気持ちを持って一緒に活動しています。しかし、社会人2年目になり、転勤が決まった人間がちらほらいて、札幌に行ってしまったたり、福岡に行ってしまったたりして、どうしても社会人になるタイミングで東伊豆町に来る頻度も減りました。また、自分の仕事に集中したいという気持ちも出てくるようで、NPOに関われなくなっている人も若干います。

NPOのメンバーで、小田原で酒蔵の事業を始めようとしている人間がいるのですが、その人が昨日、東伊豆に来てくれて、温泉に入りながらいろいろ話をしました。私の後輩たちの空き家改修プロジェクトの受け入れも続けているのですが、後輩たちを見ていると、静岡大学のフィールドワークに来ている子たちの熱意のような感じではなくて、どこか最初に東伊豆に入ってきたときの自分たちを見ているようで、「地域に俺らが来てやったぜ」みたいな感じがしています。先ほどたくさん失敗をさせたいという話をしましたが、静大の学生たちだけでなく、自分たちの後輩に特に失敗をさせて、痛い目を見させてやりたいと思っています。

宇賀田——私は最後の方で「事実・解釈・主張」と申し上げましたが、実は町の状況を知ったり、事実を拾い上げたりすることは結構難しいのではないかと思います。情報を集めているといっても、情報は人の手を介したものがほとんどで、人の解釈が加わったものです。これは良いとか、これはすごいとか、これは駄目だとかいうのは情報ではなく、恐らく事実ではありません。事実を集めるのは結構難しいのです。

それから、学生と授業等をやっている中で、解釈を加えることの怖さを学生から感じます。人と違う意味付けをすることは、なかなか勇気が要ることです。でも、研究はそれがなければ論文になりません。新しい視点を持ったり、新しい価値を見つけたりするのは難しいし、怖いのですが、怖いからこそ「そうだよ」と言ってくれる仲間がいれば結構自信になるのです。解釈を加えるのは一人ではなかなか難しいので、仲間がいると非常に心強いのではないかと思います。事実と解釈は地域連携の中では難しく、自分が足で稼いで、自分が感じて、そして自分で理解を加えていくということです。

例えば、先ほど松崎町のことで話した「銚機能」というのは私の解釈です。私がそう思ったのです。なぜそう思ったかという説明は、私はできます。菊川市でのフューチャーセンターでオーナーを何か後押しできたのではないかというのは、私ではなくて当日ファシリテーターを務めた農学部4年生の学生が感じた解釈です。これを加えられる力が、地域に入っていくため、あるいは大学で勉強していくためにも必要な力ではないかと思います。

事実をつかむことは難しいけれども、少し手間暇をかけるとその事実をつかめるし、解釈を加えることは難しいし怖いけれども、一歩乗り越えれば自分だけの自信や誇りになることも出てきます。だから、こういうところが地域連携の中で出てきてくれたら、恐らく自分の卒業論文や他の授業にもいろいろな価値を見いだせるようになるのではないかと思います。

阿部——増田さんは、東伊豆町のフィールドワークに受け入れていただいているという立場もありますし、フューチャーセンターでも活躍されている立場でもあると思います。

増田——先ほどの山口さんのお話を聞いていて、そういえば自分はなぜ大学に入ったのかと考えていたのです。それは阿部先生の話にもつながるのですが、私は高校時代にフューチャーセンターのテーマオーナーとして関わっていて、ちょっとイレギュラーな関わり方をしていたけ

れども、そこでフューチャーセンターの存在を知ったというのが一つあります。そのとき私は、応援してもらう側だったのです。高校生の研究を三保のフューチャーセンターに持っていくと、大人たちが「めっちゃ面白いじゃん。これは商売になるよ」というところまで話を広げてくれて、それがすごく自信につながったのです。平たくいえば、「これは楽しいな」と味をしめて、三保での研究をもっと続けたい、もっと三保地域に深く関わりたい、この人たちとあわよくばお友達になりたいと思って、大学進学を決めたのです。三保からそれほど遠くなくて、地域の勉強ができて、自分が3年間やっていた農業の勉強ができる大学は静大しかないと思ったのです。これが、山口さんに対するお答えです。

東伊豆町にフィールドワークを決めたのも、元々第一志望が東伊豆で、倍率は3.5倍ぐらいだったらしいですが見事突破して、今はとても楽しくフィールドワークをしています。選んだ理由も、三保地域と違う環境を見たいと思ったからというのが一つと、私は中部に住んでいるので東部はなかなか自分の力では行けない場所だからです。しかも、できれば先輩のいないフィールドワークでやりたかったというのが正直なところではあります。

前島——今日は、普段関係している方々とこの場にいられてとてもうれしいです。私は松崎町に7年ぐらい通っています。三保の松原には4年くらい、菊川には2年弱です。昨日、自分でいろいろ計算してみたのですが、今年（2017年）は松崎に30泊、65回通っています。松崎まで片道120km、約3時間かかります。三保の松原は私の家から30分くらいの距離で、そこには28回、菊川は60kmぐらい離れていて、そこも同じ28回でした。足を運ぶ回数は、その土地に関わりながらそこで過ごした時間に比例して関係性が広がってくることを感じさせます。

今、私はしがた個人事業主ですが、会社員時代にそういう活動をしたときは、目先の利益や営業の数字などがあるので、それを達成しながらでなければ通えない状況でした。しかし、個人事業主になると、給料はなくなります。時間の縛りがなくなり、自分が過ごしたいときに自由に時間を配分できるようになりました。その中で、松崎は7年通っているのですが、実際に仕事として関わられるようになったのはここ2年くらいです。5年くらいはずっと一ファンとして通っていました。

その5年間で何が変わったかという点、それまではずっと私が求めて地域に入っていたのが、逆に町の人から求めてくださるようになり、そこで過ごす時間が非常に増えていったことです。三保や菊川も、同じように地域の自主性が芽生えてきてくれると、私も非常に足を運びやすくなると感じています。その関係性をつくるためには、かけるべき時間はかけた方がいいというのが持論です。あまり性急に物事の結果を求めてというよりは、何か分からないけど足が向いてしまおうとか、感覚的なことも含めて関係性が重要なのだと思います。実際の距離が問題ではなく、距離感が地域を分けてしまっている気がします。

阿部——去年（2016年）の同じ時期にもこのシンポジウムを開きましたが、大きく変わったのは、地域創造学環の学生の皆さんが、シンポジストである深澤さんや荒武さんのところ、松崎町、東伊豆町にフィールドワークに入っていることです。松崎町の場合は1、2年生が行っています。学生から、フィールドワークを受け入れてもらっている立場で発言していただきたいと思います。

学生・和泉——松崎はかれこれ8回ぐらい、深澤さんにお世話になりました。日本のニュースでたびたび人口減少の話が出ていますが、それが具体的にどういうことかというイメージがない中で、初めて松崎町に足を踏み入れました。すると、僕はずっと東京で生きてきたので、シャッター商店街など、初めて見るような地方の残念な状況を見せつけられました。このような経験をしたことが一番大きいところです。

われわれがこの先もお世話になっていく中で、地域の担い手が必要だとよく議論されていると思いますが、実際のところ、松崎町にはより良くしようと考えている人たちがたくさんいて、いろいろな地域で実は地域の担い手がその中にちゃんといると思うのです。だから、地域の担い手をつくりだすために大学があるのではなくて、地域の担い手と一緒に新しい場所を考えるのが大学だと思います。われわれは学びの場という意識を持ちながら、今後も活動したいと思っています。

その中で、われわれ学生からすれば、大学はまず学習するところであると思います。地域連携でも話が合ったと思いますが、地域がどういう人を求めているかというときに、やる気がある人、そこに残ってくれる人を大学に求めていると思うのですが、大学は成績も付くし、実力主義でやっている中で、そういう感情論で押し流されたら、大学生側も恐らくたまらないだろうと思います。揚げ句の果てには、こうして真面目に向き合っている中で、質も上げていただきたいというか、それも求めて当然だろうと思っています。例えばフィールドワークもどう成績が付けられているか知りませんが、基本的にわれわれがどんな活動してもレポートでしか評価されないという残念な感じがあって、実際に現場を見てもいい委員会の人たちが、点数に横やりを入れたという話も聞いたことがあります。

そういった中で、われわれが活動することは成績以上に便益効果をより生み出すと思うし、深澤さんも以前、「学生が松崎町に泊まるとそれ以上の効果があるから、学生をゲストハウスや空き家にただ泊めるのだ」という話をしていたらいました。こうして学生が活動している中で、大学側も実際にどのような取り組みが学生によって行われているか、内部までよく見ていただいて、点数だけでどうこう言う前に、もっと寄り添った議論をして、学生と地域をつなぐ役割も果たしているというような、誰もが可視化できるような仕組みをつくっていく必要があると思います。

地域創造学環はできて間もないという理由で、われわれの意見がないがしろにされがちな部分がまだまだあると思いますが、もうその理由はおしまいという気がしています。せっかくマイクをもらったし、偉い人もたくさんいると思うので、この場を借りて半分文句みたいな感じですが、学校側にはぜひ頑張ってください。深澤さんには今後ともいろいろ松崎で学ばせていただくとともに、ぜひ松崎がより良くなっていくような、若者たちがより帰ってきて、かつての松崎のにぎわいを見せられるような地域づくりを松崎の皆さんと一緒にできるように、一生懸命考えていきたいと思っています。われわれは、できることは一生懸命やっていこうと思うので、今後ともよろしくお願いします。

学生・小山——私たち東伊豆フィールドワークは11月から始まったばかりで、2回、合計4日ほどお世話になりました。第1回のフィールドワークのときは、荒武さんたちと一緒に町歩きをさせていただきました。メンバー4人のうち東部出身は私だけで、私もあまり東伊豆町に行ったことがなく、メンバー全員ほとんど知らない所を歩いている感覚でした。

そんな中、干し柿をいただいて食べたり、面白い写真を撮ったり、階段を駆け上がっていたり、町の人たちの温かさにも触れることができました。しかし、たった2回のフィールドワークでは東伊豆町のすべてを知ることもしないし、きれいなところしか見ていません。実際に東伊豆町が抱えている課題は、私たちにはまだ見えていないので、今回第3回のフィールドワークで告知したプロジェクトをやらせていただきます。今回のプロジェクトをきっかけにして、東伊豆町の抱えている問題の本質や、これからどう寄り添っていけばいいのかを見ていけたらと思います。

阿部——深澤さんと荒武さん、一言ずつお願いします。

深澤——いろいろな意味で学ぶということが出ていましたが、大学の授業の中で評価があるのは当然です。その評価以上のものを与えられるのが地域の現場ではないかと思っています。成績も大事ですが、成績以上のものを僕らが与えることができるのではないかと思います。社会人になって少なからず生きているわけですし、課題の豊富な地域でその課題に向き合っている時間、費やしている時間が長い分、皆さんに何かを与えられると考えています。成績の付け方は全然分かりませんが、そこに固執してしまうと、もっと大切なものが見えなくなってしまうのではないかと思っています。実際にいろいろな可能性があって、今もこうして松崎町とつながっていることが事実としてあるので、後でいろいろ参加している方々には話してもらいたいと思います。

静岡大学とライブでつながってこのような機会を持てることで、さまざまなことが広がっていくと考えています。そういう意味でも、学環の皆さんがいらっしゃってフィールドワークを受け入れることにより、可能性はいろいろな方面に広がります。また、フィールドワークに関わってくれたみんなには、これから長い人生の中で松崎町とこれからも関わる厚さがあると思うのです。荒武君も、仲間が仕事をするようになって疎遠になっていると言っていたけれども、つながっていれば疎遠になっていてもいいのです。そういう思いで地方を見てもらっていると、僕らもありがたいという感じがします。

荒武——私も東伊豆町に入って4年目になります。よそ者はよそ者であって、地域の課題になってしまうという話もあるのですが、正直まだ全部を把握できていないと思っています。たった4年ごときだと思っていて、両サイドには伊豆の大先輩の二人がいらっしゃって、それでようやくこういう動きがあって、静大でこういうお話をしていただけるのも本当にすごいと思っています。自分ができる範囲ですべてを見ようとしても、きっと分からなくなると思います。いったんアクションを起こしてみた中で、フィードバックがいろいろあると思うので、そこから自分たちなりに課題を見つけていければいいと思っています。

阿部——地域創造学環は1、2、3年生と基本的には同じフィールドを継続して、先輩から後輩に受け渡して行って、それが正規の授業にもなっているのですが、芝浦工大で東伊豆に入ったときは授業ではありません。学長プロジェクトになったこともあったかもしれませんが、そうではなくて、入ってきて地域の方々とつながっていく経験がありますし、フューチャーセンターも授業ではありません。それでもいろいろな形でつながって、時間は短いですが、非常に濃密な交流の時間をつくることができます。それが松崎町でもいろいろ印象に残っているのは素晴らしいと思います。

学環の皆さんもいますし、それ以外の学生もいますし、地域づくり副専攻という形で地域創造学環以外の人文社会科学部、教育学部、情報学部の学生たちもフィールドワーク的なことができるのですが、個人的にはフィールドワークだけではなく、フィールドワークを離れていろいろな活動を体験してほしいと思います。観光でも結構です。フューチャーセンターのメンバーがその後も松崎町に行きたくなるような雰囲気だったこともあり、私も土日に仕事をしていることが多いので、振替休日には自動的に伊豆に車を走らせているという悪い病気にかかっていますが、毎回楽しいです。地域創造学環の場合、フィールドワークという独特の形で関わっていますが、それ以外の関わり方もぜひ体験してほしいと思います。実際にそうしている方もたくさんいると思います。

ここで、フロアから質問をいただきたいと思います。

フロア1——山口さんにお聞きしたいのですが、高校当時、大学に行こうとは思わなかったのですか。

山口——思っていました。実際に受験もしました。ただ、就職試験の結果が出る方が早かったので、大学は受験しただけです。行こうとも思いましたが、結果的に成績もフィールドワークも自分の選択肢をどこに持っていかだと思うのです。最終的に選択肢はそれほど多くないのです。私は今の仕事を選択したわけですが、自分が選択するときにどれだけ選択肢の幅を広げられるかが、成績であり、フィールドワークであり、自分の今まで行ってきた行動だと思うのです。評価は他の人がするものなので、選択するときにどういう評価をされるかによって、自分が思い描いている選択肢ができるかどうかにつながっていくのではないかと思います。その選択肢を得たいのであれば評価を上げる方に集中すればいいし、逆にフィールドワークで地域とつながって、そちらで自分を生かす道を見つけないのであれば、そちらに向かっていけばいいと思っています。

先ほど自治体の人口の話をしたのですが、これも評価につながると思います。小規模の自治体、特に南伊豆や松崎はそうなのですが、私が小規模の自治体で問題だと思っているのは、首長がかなりの確率で代わることです。賀茂地域はここ数年で、下田市を含めて6市町で5人の首長が代わりました。首長が代わると、政策も当然変わります。行政職員は人数が少ないので、これまでやってきた政策を貫いていくことがなかなか難しい状況です。そうすると、地域の基盤がぐらぐらします。それは地域住民にとって非常によくないと思っています。

特に7000～8000人の町では有権者数が大体6000人です。投票率は高い方ですが、それでも70%程度で、例えば首長選挙に立候補者が3人いたとすると、親戚が多ければ当選してしまいます。首長選挙はそれほど大差が付かないので、よほど良い政策をすれば別ですが、少しでも批判があると反対意見の勢力がだんだん強くなり、すぐにひっくり返るのです。そうすると、手のひらを返したように政策が変わってくるという怖い状況になります。ですから、一貫した政策を貫けるようなアドバイスができる人たちが、行政職員なり外部から入ってきて、首長が変わってもしっかりと政策を貫いていけるようなシステムをつくらなければならないと思っています。これも評価の一つだと思います。

フロア2——フューチャーセンターのように、大学内で生まれた活動が地域貢献につながることをすごく感じたのですが、大学内で生まれた団体が地域に関わっていくにはどうしたらいいでしょうか。

宇賀田——難しいです。私も悩んでいるところです。先ほど和泉君から担い手の問題提起がありましたが、私自身も担い手そのものになることが正解ではないと思っています。大学教育の一環としてやっているというのは、逃げているわけではなく、地域の担い手になるということは単に大学生が労働力になることではないからです。そういう意味では、学生や大学の関わり方はかなり未知の部分が多いと思っています。ですから、いろいろな関わり方があっていいはずで、学生が直接乗り込んでいき、荒武君の失敗のようにそこで撃沈してしまうこともあります。そこに仲介に入る人がいたらうまくいったかもしれないこともあります。失敗しないようにという意味ではなく、本質的なところに届くためには、一つの解ではなく、いろいろな攻め方があるはずです。そういう攻め方のバリエーションを大学も持たなければならないと思っています。

学生の皆さんの問題とすると、私は佐々木毅さんの学びの4段階を丁寧に紡いでいくことがとても大事だと思っています。特に、知る、理解するという段階です。何か解決の手段や乗り越えることを考える前に、まずは事実をきちんと知っていく活動をする。その次に理解する。つまり、背景を考えてみる。そのように丁寧にやっていく学習のプロセスを身に付けていくだけでもいいと思っています。地域課題に対して一足飛びに担い手になったり、何を期待されて

いるかというところまで行かなくても、まずは知ること、そして理解すること。私の言葉でいえば、解釈を加えることを特に1、2年生で丁寧にやってほしいと思います。

斎藤——松崎町企画観光課の斎藤といいます。深澤の部下です。今日はいろいろな話を聞かせていただいて大変勉強になりました。増田さんが東伊豆町を「めっちゃいい」と言っていて、とてもうらやましくて、それがすべてではないかと思いました。学生に来てもらって、それが地域のためになるというのは地域としての目的ですが、その地域を好きになってもらうのはとてもいいことだと思います。好きになってもらった上で、学生に楽しんで学んでもらい、地域が元気になるのがいい形ではないかと感じました。

松崎町としてもそのために、空き家になった施設を学生が泊まれるように整備しているところ。学生側もいろいろな要望を伝えていただいて、すべてできるわけではないですが、より松崎に来たいと思わせるようにやっていきたいと思っています。

飯田——賀茂振興局の飯田と申します。8月の南伊豆のフォーラム以来の参加です。1市5町の賀茂地域には高等教育機関がないので、大学生の皆さんが来てくださること自体が大きな刺激であり、価値だと考えています。

皆さんがこれから手に職を付けて、どういうところでどのように活躍していきたいかを考えたときに、伊豆での接点を設けていただき、その中にマッチングがあって、荒武さんのように地域で活躍していただけるような人材が出てきたり、元々地域に住んでいる方にも刺激を与えたりしています。地域の大人がもっと輝いて、自分の楽しんでいる姿を子どもに見せて、その子どもたちがやはりここがいいと感じて、いったんは進学で外へ出るけれども、また戻ってきてこちらで生活したいと思ってくれるような種まきになることを、市町の皆さんと連携して県もいろいろやろうと考えていますので、引き続きご支援をお願いしたいと思っています。

阿部——松崎町の寺田さんは、松崎町地域おこし協力隊として入っていて、ローカルデザインネットワークのつながりで東伊豆のダイロクキッチンにも現れるし、いい形で連携があります。フィールドワークを受け入れる場合、1～2人はとても大変なので、そういったネットワークを組んでいただくと、賀茂地区全体でフィールドワークを受け入れる形が可能になると思いますので、よろしくお願いします。

寺田——東伊豆町の荒武さんとは建築学科だったというつながりだけでいろいろ話をし、活動にも参加させてもらい、学ぶことがすごくありました。今回の話も、東伊豆町、松崎町に共通しているものは多いと日々感じています。学生の皆さんも一つの地域に入ることが大前提になっていると思うのでその地域に入るのですが、他の地域は何をしているだろうという関心を常に持ってもらいたいと思います。私たちもこれからそういう形で取り組んでいきたいと思っています。こういう機会があればぜひ、浜松、静岡を問わず、松崎とつなげてもらいたいと思っています。これからもよろしくお願いします。

阿部——単独でこちらから松崎、稲取、南伊豆に行こうとすると、その往復の時間だけでも結構ありますが、いったん行ってしまつて1～2泊すると1市5町は非常に近いです。1時間かかる所はありません。共通の課題があったり、それぞれに特色があったりするので、ぜひフィールドワーク以外の形でもいろいろ訪ねていただければと思います。そういう地域は伊豆だけではなく、浜松市の北部や菊川市にもたくさんあると思います。それぞれに地域課題を掘り下げてあって、大学としても何らかの関わり方ができるのではないかと思います。

平岡（地域創造学環長）——先ほど評価のことが出てきたので、マイクを取りました。和泉君が言うように、すべてのことを評価できるわけではありません。これは正論だろうと思います。ただ、フィールドワークに関して、どういう観点から評価しているのかについては、学生の皆

さんに紙を配布して公表しています。そして、それを最初に付けるのは、そのフィールドの担当教員です。その後で相対評価ですから、すべてのフィールドを同じ基準で評価せざるを得ませんので、こちらで取りまとめています。それは介入ではありません。若干甘めに付ける教員もいれば、辛めに付ける教員もいます。相対評価として全体をならさざるを得ないので、そういうことをやっていることはご理解いただきたいと思います。

実はその中に入っている重要な部分は、宇賀田先生がご指摘されたことですが、事実から解釈へということです。このフィールドのことについて、あなたはどれだけのことをきちんと理解して自分の活動に取り組んでいるかというのが一番のポイントなのです。そこをなぜレポートで表現するかというと、自分のやっていることをきちんと自分で表現できているか、つまりそれを外にきちんと出せなかったり、自分の中の思いだけでは大学教育としては駄目なわけです。大学生としては、それをきちんとレポートにして出せるかどうか、決定的に重要になります。そこはやはり教育機関として揺るがすことができないところです。それをきちんとやってほしいのです。だから、フィードバック記録という形のレポートを出してもらっています。また、担当教員が実際に活動を見ています。そういうものを合わせてきちんと評価させてもらっているつもりです。

そして、学生がフィールドワークに行って、何に気付き、何をデータとして集め、そこからどういうことを解釈として組み立てていくかというときに、地域創造学環や地域づくり副専攻のカリキュラムを取っている皆さん方は、それについて素人として見てもらっては困るわけです。大学の中でさまざまな科目を学ぶということ、その科目でどういうところに着目して地域のことを見たらいいかということは、その科目の授業の中で記されているはずですが、それを自分のフィールドにきちんと適用していくことができるようになってもらうために、必要な科目群をそろえているのです。そのための授業をこちら側は提供しようとしているわけです。ですから、皆さん方はフィールドと行き来するだけでなく、大学に戻ってきて、自分が地域で得た情報をどう見ていけばいいのか、そのためにはさらに何を学ばなければならないのかをきちんとやって、またフィールドに出ていく。それらをきちんとやらなければ絶対に駄目です。

それから、先ほどから担い手という言葉が出てきましたが、学生は今の段階では絶対に担い手ではありません。お手伝いか、むしろ足を引っ張っているのではないかとハラハラしているのがこちらの立場でもあります。つまり、学環や地域づくり副専攻は、将来皆さん方が担い手になってもらう、ないしは地域のサポーターになってもらうための教育をしています。今、即戦力として担い手になってもらおうとは全然考えていません。むしろ、そういうつもりになってもらっては困ります。それだけの力が皆さんにありますか。われわれ教員もあるとはいえません。学生の皆さんは、担い手になるための勉強をしているのです。それをフィールドの方々にお手伝いをしてもらっているのです。そのことをきちんと理解していただきたい。

皆さん方は、何かができると思ってフィールドに入ったら、失敗も身に付かないと思います。高みからではなく、自分は学ばせてもらっているのであって、どこをどう失敗したのだろうと必死にもがくことがとても大切です。自分は何ができて何ができなかったのだろう、なぜこうなったのだろうということを、大学で学んだことを生かしながら深めていく活動を、松崎なり、東伊豆なりいろいろな所でお世話になりながらやっているとう理解してもらえればありがたいと思います。

それから、こういう形で地域の皆さん方にお世話になっていますが、今のところ関係は点と点を結んだ線になっている感じなので、できれば賀茂地域に関しては、面の広がりになるよう

な関係がくれたらとてもありがたいと思います。その場合、フィールドワークをしていて感じていることは、現地で学生を受け入れて、こちら側と一緒にフィールドワークを共にしてくださる方が賀茂にもどんどん増えてほしいということです。それに対して静岡大学としてお手伝いできないかと考えて、県教育委員会や賀茂振興局の方とも話をしています。つまり、県と1市5町の中で、地域の人たちも関わるができる場を、賀茂でつukれないかということです。そのためには人やお金が必要なので、お金についても県と話をしています。そういうことを深澤さんや山口さんなどとも一緒にやっていければと考えています。

学生の皆さんにとって、フィールドで接している深澤さんや荒武さんは将来の皆さんのロールモデルのような存在ですから、自分がどういう形で近づけるかというふうに見ていただけるといいと思います。

阿部——地域創造教育センターも立ち上がったばかりで、いろいろな課題を抱えていますが、できるだけ地域と良い関係をつくりながら大学が関わって、学生も教職員も地域に出なければ生まれなかった学びや経験ができるようにしたいと思います。最後に一言ずつ思いましたが、時間が来てしまいましたので、これでパネルディスカッションを閉じたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況

伊豆半島南部（松崎町・東伊豆町・南伊豆町）における取り組み

地域課題解決支援プロジェクトの42課題のうち、松崎町、東伊豆町、南伊豆町など賀茂地域（伊豆半島南部）の課題は18件に及び、この地域が大学に対し大きな期待を寄せていることがわかる。その期待はまた、過疎や少子化、経済の縮減等が伊豆半島南部において進行し、地域が危機感を抱いていることの表れでもあるだろう。

こうした大学への期待・要望にこたえるため、教職員・学生が課題提案のあった地域を訪問し、ヒアリングや街歩きをしながら地域の現状を学び、また大学がもつ資源やこれまでの取り組みを紹介し、意見交換を行う機会が設けられた。松崎町では、公開シンポジウム「地域課題と学習ネットワーク」（2015年2月）を開催し、翌月には「静大フューチャーセンターin松崎」を実施した（報告書第1号参照）。また東伊豆町でも、公開シンポジウム「地域課題から地方創生へ」（2016年2月）を開催し、その中で同年4月に開設された地域創造学環の紹介を行った（第2号参照）。さらに南伊豆町では、研究フォーラム「伊豆半島の学習・交流・協働拠点づくりを考える」（2017年8月）を開催するとともに、地域活性化イベント「トコリンピック」に参加し、また「フューチャーセッションin南伊豆町」を実施した（第3号参照）。

シンポジウムやフォーラムの開催だけでなく、学生・教職員対象のガイドツアーの実施やイベント・ボランティアとしての参加等の取り組みもされてきたが、学生の継続的受け入れが条件となった第2期公募（2016年度）ならびに地域創造学環の開設（2016年4月）を機に、課題提案のあった地域への地域創造学環のフィールドワークが開始された^{*}。課題提案地域がフィールドワーク受け入れ地となったことは、課題解決支援者の多様性および取り組みの継続性という点で、地域課題解決支援プロジェクトにとっても大きな転機となった。また、フィールドワークとしてではないが、南伊豆町にも継続的に学生・教職員が入って活動することとなり、同じ伊豆半島南部に属し、かつそれぞれ特徴をもった松崎町・東伊豆町・南伊豆町と大学との面としてのつながりが生まれることとなった。

本稿ではこの3地域を取り上げ、プロジェクトの進捗状況を報告する。

^{*} 地域創造学環は、2016年度に開設された静岡大学の全学学士課程横断型教育プログラムである。全ての学部 of 授業を履修可能で、積極的に地域で学んでいくことが特徴となっており、より魅力的な地域社会の創造に取り組むことができる人材を育成することを目的としている。

地域課題を解決する能力を育むため、学生は県内各地のフィールド（現在13か所）を選び、1年生後学期から3年まで学年を跨いでフィールドワークを行い、同じフィールドを選んだ学生は3学年一緒に地域課題に取り組む。

○松崎町におけるプロジェクトの進捗状況

松崎町は、地域課題解決支援プロジェクトにおいて最も早くから組織的に関わった地域であるが、2016年からは地域創造学環フィールドワークの受け入れ地となった。フィールドワーク実施に先立ち、2016年前期には教職員による現地視察、学生による現地見学が実施され、同年度後期から「商店街のにぎわいの創出」「観光と防災の両立」の2テーマでフィールドワークが

立ち上がり、現在は1年から3年までの学生16名の体制で実施されている。

松崎町フィールドワークは遠隔地であるため、原則1泊2日を年6回というスケジュールで行われるが、秋祭り等イベントの準備のため2泊3日等になることもある。これまで実施されたフィールドワークの日程は以下の通りである（観光・防災グループは下記日程以外にも何回か松崎町を訪問した）。

- ・2016年度
10月8～9日、11月12～13日、12月17～18日
 - ・2017年度
6月3～4日、8月5～6日、8月10～11日、10月28～29日、11月3～4日、2月13～14日
 - ・2018年度
5月26～27日、6月16～17日、8月30～31日、11月2～4日、1月26～27日、2月12～13日
- また、下記のようにフィールドワークから派生した取り組みも行った。
- ・10月21日 田んぼをつかった花畑「種を蒔く人プロジェクト」への参加（学生・教員有志）
 - ・11月29日 松崎中との交流会（フィールドワーク生有志）
 - ・12月15～16日 静大野球部員による松崎町スポーツ少年団への野球教室（野球部有志）



静岡新聞2018年12月18日掲載



松崎中との交流会

○参加学生による紹介

私たち地域創造学環生は静岡県の各フィールドで地域の課題解決を地域の方と考えるフィールドワークを行っています。私は、静岡県の東部に位置する伊豆半島の西側、松崎町をフィールドとし、活動しています。

今年度の活動としては、地域の方と一緒に地域の運動会に参加したり、棚田のライトアップの準備をお手伝いしたり、松崎高校の文化祭に参加したりしましたが、今回は松崎中学校で行った「将来について考えよう～松崎中学校×地域創造学環ワークショップ～」について紹介したいと思います。

まず、なぜ松崎中学校でワークショップを行うことになったか、その理由は2つあります。1つ目は、昨年度開催した松崎高校での「松崎町の将来を考えるワークショップ」が好評だったため中学校でも行おうとなったこと、2つ目は、松崎町は大学がないため、大学進学というものがあまり身近ではなく、また松崎町はせまいコミュニティのため、生徒同士に競争心がないと教育長からお話を伺い、大学生が中学生の勉強意欲を引き出すために行うことになりました。

私たちは少しでも「大学」について知ってもらい、中学生自身の将来の選択肢を増やしてほしいと思ったため、大学生自身の今までのライフコースを語りました。例えば、なぜ静岡大学の地域創造学環に入学したか、大学で何を学んでいるか、留学で何を学んだか、将来自分は何をしたいかなどです。参加してくれた中学生に最後アンケートに答えてもらったところ、「大学に進学する選択肢が増えた、興味を持った」「留学してみたくなった」「もっと色々なことを知りたいと思うようになった」「大学生と話せて楽しかった」等の感想をもらい、満足度が高いワークショップになりました。

私たち大学生は、今まで中学生とは関わってこなかったため、若者の生の意見を聞いたことはとても大きな一歩でした。また、今後松崎町をどうしていきたいかなども休み時間で話すこ

2018/11/29

静岡大学 地域創造学環生と
将来について考えよう
(松崎中学校×地域創造学環ワークショップ)

静岡大学は静岡県立大学で、地域創造学環は静岡大学の教育プログラムの1つです。学環は様々な学部・院の授業を受けられる他、地域に飛び出して地域の課題を地域の方と一緒に向き合い解決策を考える「フィールドワーク」を行っています。

今日はそのフィールドワークの一環で、松崎町を中心に活動しているメンバー6人が自分のライフコースについて話します。大学というものについて、知ってもらいながら、将来について考えるきっかけにもしてほしいです。どんな質問でも大丈夫です！気になること、相談したいことがあったらいつでも声をかけてください。また、松崎町については中学生の皆さんの方が先輩です。いろんなことを教えてください。

＊メンバー紹介＊

和泉直人 (3年) 坊主頭が特徴的なため通称は「おにぎり」。人を引きつけるトーク力と止まらないおにぎり節！ トーク内容：「人生は冒険だ！」	本田圭美 (3年) YouTubeを愛する女。通称は「よっちゃん」。聴きえれば動画と音楽を楽しんでいる。たまにテニス。 トーク内容：「大学のことと伊豆で果たしたい夢の話」
遠藤有紗 (3年) かの有名な静岡大学吹奏楽団に所属。通称は「えんど」。ユーフォニアムを吹くよ！思い立ったらすぐ行動タイプ。 トーク内容：「将来の夢」は決まらない	長田結衣 (2年) 富士市の将来を担う存在。通称「くっちゃん」。高校で身につけたプレゼン力、教育に対する熱い思いはすごい一言。かわいい。 トーク内容：「様々な選択で悩む経緯こそ自分を磨きあげている」
影山舞 (3年) 漫画大好き、ゲーム大好き、歌い手大好き！通称は「まいまい」。手先も器用で、卓球もうまい！でも実は部活サークル無所属。 トーク内容：「中学・高校・大学の違い 今までの体験談」	望月南緒 (2年) 邦ロックベース女子。通称は「なお」。サークルでバンドを組みながら、サッカーもやっつけてる。髪インナーカラーが毎回違う（気がする） トーク内容：「学環を選んだ理由は松崎町 LGBT研究で置に1人で海外へ」

松崎中学ワークショップ資料

とができ、今後の活動に活かしていきたいと思いました。今は中学、高校生向けに静岡大学体験ツアーを行い、実際に大学生とふれあってもらって、より将来について考える機会を提供するのはどうかという話もあがっています。

今回の活動から、もっと中学生や高校生とコラボし、松崎町の将来を考えた活動を行って、少しでも多くの若者が松崎町のことを好きになってほしい、そこに大人も巻き込んで松崎町を盛り上げてほしいと思います。地域を盛り上げるのはその地域に住んでいる住民たちです。私たちの役目は、その方たちが動きやすい環境をつくり、やる気を引き出し、協力すること。松崎町の方があつたらいいなと思うことのお手伝いがこれからもできるように、私たちは活動していきます。

(文責：地域創造学環 地域経営コース3年 本田圭美)

○東伊豆町

東伊豆町における取り組みは、地域課題解決支援プロジェクト（第1期公募）への応募、同地を会場とした公開シンポジウム、東伊豆ガイドツアー等の実施を経て、2017年度後期から「新しい観光スタイルの発掘・創出」をテーマとしたフィールドワーク受け入れへとつながった（報告書第3号参照）。

当初は地域創造学環1年生4名のみ参加だったが、2018年度後期からは新1年生を加え、計7名の学生が東伊豆フィールドワークを実施中である。東伊豆町の場合も遠隔地であるため、各回1泊2日、年6回を原則としているが、学生企画のイベント準備等のため早目に現地入りすることがあった。これまで実施されたフィールドワークの日程は以下の通りである。

- ・2017年度

- 11月11～12日、12月2～3日、1月19～21日

- ・2018年度

- 4月14～15日、6月9～10日、7月7～8日、10月6～7日、12月15～16日、1月19～21日、2月28日～3月3日

また、下記のようにフィールドワークから派生した取り組みも行った。

- ・6月2日 伊豆半島地域活性化イベント「アジロック&サバソニ」ボランティアスタッフ参加(学生有志)
- ・8月15～17日 伊豆稲取空き店舗調査WORKSHOPへの参加（学生有志）
- ・9月8日 空き店舗活用イベント・雛フェス説明会への参加・協力（フィールドワーク生＋静大FC運営学生）



雛フェス実行委員会との会議



ライブペイント

稲取で探す「インスタ映え」

静岡大生らコンテスト

静岡大と東伊豆町のNPO法人「カラーデザインネットワーク」は20日、同町稲取地区で大学生による写真コンテストを開いた。県内の大学生18人が写真共有アプリ「インスタグラム」に投稿し、伊豆半島東海岸の港町の魅力を発信した。

（下田支局・杉山 穂）

少子化と人口減少に直面する町に注目を呼び込むべく、つなげようと、「地域づくり」をテーマに町内でフィールドワークに取り組み、静岡大の1年生4人が企画。参加した学生はカメラ

港町の魅力投稿

やスマートフォンを主に、風光明媚（めいび）な稲取地区を散策した。写真のテーマは「ハート型」。ハートの模様に見える

るマンホールやタイル、ハートをデザインしたコピーの看板などを撮影し、組み合わせて撮影した。稲取地区では同日から雛（ひな）

のつるし飾りまつりが開催し、スタンブリーにも参加した。静岡大の4人は2018年度以降もフィールドワークを続けるという。池田橋平さん19は「若い人向けのイベントを充実させたい」と抱負を話した。



港町を散策し、インスタグラムに投稿する写真を撮影する大学生＝東伊豆町

静岡新聞2018年1月21日朝刊掲載

○参加学生による紹介

その町は人口1万3千人の小さな港町です。漁港で獲れるキンメダイはお祝い事の席に必ず出されるほど町に浸透している名産品で、吊るしびな発祥の地であるこの町では2月末から3月末にかけて雛の吊るし飾り祭りがおこなわれています。私たちはそんな東伊豆町・稲取でFWを行っています。

FWを始めることに際し私たちは、私たちが見たい稲取の未来の姿をFWの活動目的にすることとしました。私達が見たいと感じたのは「人が行きかう稲取」。特別な日でなくとも稲取を好きになった人が町を訪れている。そんな姿を目指すことを活動指針にしました。

「人が行きかう稲取」には「私たち大学生だけ」ではなく多くの人の力が必要です。そこで私たちの「人が行きかう稲取」という目的を実現する為、FWの目標を「“UCHIRA”を増やす」こととしました。「UCHIRA」とはイベントに関わった／これから関わる稲取を好きな人たちのつながりを、私たちはそう表現しています。以下はその活動指針をもとに起こした活動の報告です。

フィールドワークの一年目はターゲットを学生に設定し、インスタグラムを用いたフォトコンテストと街歩きを計画しました。日時は雛の吊るし飾り祭りの初日である1月20日。ダイロクキッチンを本部としました。参加者は静岡県内大学に通う学生を試験開催ということで無料誘致し、大学からバスを出して稲取まで来てもらいました。

このイベントの狙いは、大学生に「稲取のファン」になってもらう事。市来氏の「ファンがサポーターになり、サポーターからプレイヤーが発生する」という言葉からヒントをいただきました。2つ目の狙いは、街歩きをツールとして「また来たい」と思わせることです。

二年目は「駅前商店街の空き店舗を活用したい」という思いを持つ荒武さん（地域おこし協力隊）をはじめとする東伊豆町商工会議所青年部と、「『UCHIRA』を増やす」ことを目指す私たち大学生で「雛フェス」を企画しました。開催は2019年3月2日、3日で、通りの空き店舗に



静岡大の学生と南伊豆町伊浜の住民20人余りが、地域の魅力を詰め込んだかるた114枚を作った。
伊浜山村活性化支援センターでかるた取り大会を行った。

伊豆新聞2018年12月16日朝刊掲載

地域人材育成研修会 ご当地カルタを作ろう

皆田 潔（地域創造教育センター准教授）

1. 要約

地域運営の担い手育成を目的として、行政職員やNPO関係者や地域おこし協力隊を対象とした研修会を南伊豆町で開催し、「まちあるき」を利用した地域資源活用方法や地域活動への住民参加を働きかける方法についてOJT（On-the-Job Training）形式で学ぶ機会を造成した。

2. 研究の目的

今日、地域運営の担い手育成を目的としたリーダー育成や地域資源の活用をテーマにした講座が開催されているが、いざ自らの地域に持ち帰って実践しようとしても、仲間や賛同者の不足や経験のなさから、なかなか実行に移せない。そこで、本事業では、実際に地域運営を支援する行政職員や地域活動団体、地域おこし協力隊などの実践者を対象とした地域資源の調査、検討、活用を学ぶ研修の機会を設定し、住民参加型の研修プログラムの開催を試みた。

3. 研究の内容

このOJT形式による地域人材育成研修会は、地元学の手法を手本とした。地元学は、風土や暮らしに着目し、普段過ごしていると気付かない日常を地域に暮らす人（土の人）と外から訪れた人（風の人）と一緒に地域を調べ、地域住民に足下の資源への着目を促そうとするものである。

今回の研修会の構成は、受講者が、研修開催地の住民と一緒にまちあるきを行い、気になるスポットの謂れや暮らし方についてのエピソードを尋ね、情報を蓄積し、その情報の活用を検討するプログラムである（図1）。ポイントは、調べた情報の活用を「風の人」のみで考えるのではなく、そこに暮らす人々を交えるところにある。土の人と風の人が共に考えることで、より現実的な活用案が生まれ、地域住民の機運を上げることができるからである。



図1 地元学の構成

今回は研修開催地域として単に場所を借りるのではなく、地域住民にも参加してもらい地域にもメリットが得られるように設計し、研修会后、地域で活用してもらえることを想定した「ご当地カルタ」づくりを研修の柱とした。研修会はまちあるきでカルタの題材を取材し、カルタの絵札、読み札を作成し、最後にカルタ大会を開催し、すべての行程にその地で生活する住民が関わるように工夫した。

地域づくりに関する研修会の多くは、受講者と講師の実践者間で行われるケースが多いが、この住民参加型の研修プログラムは、住民を介在させることで緊張感を持たせ、情報を聞き出す能力、聞いた情報を正しくまとめる能力、そして、整理した情報を地域に還元する手法を体得することができる。また、地域づくりに関心のない層に対して、その機運を醸成する働きかけにも有効である。

4. 研究の成果

(1)当初の計画

上述の実施目的により、研修会は12月7、8日の2日間にわたる開催を計画した。開催地は静岡大学が賀茂地域との地域連携関連事業を推進する中で関係がある南伊豆町伊浜区を選定した（図2）。

伊浜区の概要は、人口は265人（平成27年国勢調査）、98世帯で小学生はゼロ人、かつては海水浴や釣りで賑わい、民宿が20軒あまりあったが、近年ではそうした観光客もまばらで民宿は4軒にまで減っている。景勝地で有名な波勝崎は伊浜区が管理を請負い、伊浜区の集会所を兼ねる伊浜山村活性化センターには南伊豆町で唯一、常勤職員が配置されている点も特徴として挙げられる。地区の主産業はイセエビ漁を中心とした業漁と、昭和6年に千葉県から生産技術が伝わり、かつては日本一の生産量を誇ったマーガレットの栽培である。それは、伊浜区の主たる産業となり、地区内にはビニールハウスが軒を連ね、首都圏をはじめ、中京圏、関西圏に出荷されている。しかし、農業従事者の高齢化に伴い、マーガレットを栽培していた農地は、徐々に家庭菜園、あるいは耕作放棄地に姿を変えつつある（図3）。働き世代の多くは地区外に他出し、地区在住者は高齢者に偏っている傾向にある地域である。



図2 南伊豆町伊浜区の位置



図3 伊浜区の景観

(2)実際の内容

伊浜区では平成25年から、地区の有志により伊浜の暮らしや風土についてインタビューして記録に残す活動が行われてきた。そしてその成果は聞き書き「知ってんけえ」のタイトルで編集され、これまでに5巻が自費で出版されている。作成に関わった方の話では、これにより伊

浜の風土の記録はまとめることができたが、発行部数が限られた上、多くの住民が文献に目に通すまでには至っておらず、住民に伊浜のことをもっと知ってもらい、地域への誇りや愛着を深めたいという希望を聞いた。

そこで、「知ってんけえ」を参考にしながら、さらに外部の視点を加えて、楽しみながら地域資源に着目できる「ご当地カルタづくり」を伊浜区に提案し、地域運営の担い手育成に携わる行政職員等を対象とした研修会「静岡大学地域人材育成研修会 ご当地カルタを作ろう」を開催するに至った。

研修会の実施を自治会に打診してから開催までの間、打合せでの訪問の他、特産のところでんの長さの世界記録に挑戦する「トコリンピック」イベントや、地区の伝統行事の秋祭りには教職員のほか学生も参加し、伊浜区民との交流を深めてきたことも付け加えておきたい。

研修会は、図4に示した5段階で構成し1泊2日のプログラムを検討した。事前に伊浜区の役員からはまちあるきのコースが検討され、各役員が自慢したい伊浜のスポットに立ち寄るプランが準備されるなど、研修会を受入れていただく体制はとても素晴らしかった。

カルタは高齢者も楽しめるようにB5サイズの厚紙を使い、絵札はまちあるきの際に撮影した画像を印刷して貼り付け、読み札は手書きとした（図5、図6）。

手づくりのカルタとした理由は、最初に手の込んだものを作ると継続を困難にしてしまう。カルタづくりの目的は、地域資源への着目と誇りの底上げであり、まずは子供から高齢者までが簡単に作れて、楽しめるようであればならない。そのため、今回は通常カルタで使われる、五・七調で読み札を作成するルールもやめ、各々が好きな言葉で伊浜を表現することにした。

次に、カルタには書き込めない、着目した理由やエピソードをひとりひとりが発表する時間を設けた（図7）。伊浜区のみなさんは自慢したい素材、外部からの参加者は面白いと感じたものやひと、それぞれ異なる視点が合わさり、地元にも気付きと発見をもたらすことができるよう配慮した。そして、作ったカルタを実際に楽しむ時間（図8）、最後には、カルタの活用方法を話し合うワークショップを行い（図9）、住民から継続を期待する意見が確認でき、具体的な計画を地域と大学が連携して検討することとなった。

(3)実績・成果と課題

受講者は静岡市、焼津市のほか、賀茂郡内の自治体や県庁から、地域おこし協力隊を含む7名と南伊豆町の一般参加者4名、学生を含めた本学関係者等8名のほか、伊浜区の住民14名の

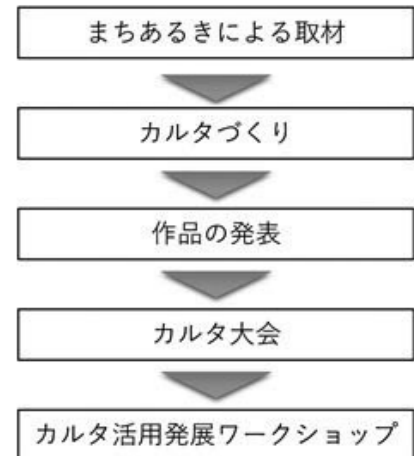


図4 研修会の手順



図5 まちあるきの様子



図6 カルタづくりの様子



図7 カルタに込めた想いを発表

協力や参加があり、合わせて33名であった。伊浜区内においては、事前に回覧で参加を促す周知がなされ、7名の参加があった。

1泊2日のプログラムのなかで若者から年配の方、伊浜の住民と外部の参加者が混じり、情報交換も活発に行われた。またカルタ大会では、当初はグループ単位で進めることを想定していたが、すべてのカルタを合わせて全員参加の大カルタ大会となった。2日間で作られたカルタは144組であった。

カルタ大会後には、カルタの活用ワークショップを振り返りとして実施した。カルタ大会のみに参加された住民も加わり、「秋祭りの余興にカルタ大会をしよう」、「定期的にまちあるきをして四季のカルタを作ろう」、「次は五・七調に挑戦しよう」、「伊浜のモノだけでなく、人が題材になっているところが面白かった」、など、積極的な意見をたくさん集めることができた。

地域づくりに携わる受講者にとっても、住民参加の働きかけ方のヒントとなる場面であったと思われ、OJT形式の研修会が地域の活性化に貢献する側面もあることを感じ取ってもらえたものと推察する。

一方で、受講者は周知が不十分で、主たる参加対象の中部中枢都市圏域の自治体からは2名の参加に留まったことは反省し、周知や参加者を募るための工夫を講じたい。



図8 144枚の大カルタ大会



図9 住民と一緒にワークショップ

(4) 今後の改善点や対策

地域を舞台にしたOJT形式の研修会の欠点は、座学やセミナーのような大人数による開催が難しく、少人数開催にせざるを得ない点である。少人数であるが故に費用対効果でいえば、必ずしも大きな効果があるとはいえないかもしれないが、手間も費用もかかる実践型の研修会は地域貢献が使命にある大学だからこそできる研修として、継続して提供する予定である。今後は、今回の受講者が実際に業務に関わる地区で本学が協力する形で開催するなど、受講者のフォローアップにも力を注ぎたい。

また、研修会後には伊浜区と振り返りの機会を持った。区役員からは「伊浜のマイナスを笑いに変えるカルタが楽しかった。」など、好評であった。そして、今回の研修会が契機となり、地区行事として四季の風景を撮り貯め、カルタを製作し、伊浜区の秋祭りでカルタ大会を行う企画が挙がった。それに応える形で本学も定期的に伊浜区を訪問することを約束し、引き続き、地域資源の棚卸し作業と調べたことをみんなで楽しみながら活用できるよう検討を行い、伊浜のよさを地元に住む人々が実感するという地域づくりの目標に向けて協働を進めていきたい。

(付記)

この研修会は「しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業」の一部助成により開催しました。また、本稿は「しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業」報告書に加筆修正し再掲したものです。

COC+ 地域課題解決支援プロジェクト

研究フォーラム

伊豆半島をフィールドにした 学習・交流・協働を考える

日 時：2018年9月15日（土）13:00～16:30

会 場：松崎町 旧依田邸

プログラム：

報告1「フューチャーセンター×地域～対話と協働の取り組み事例から」

報告者：宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター）

小田しずく（静大FC学生ディレクター）

報告2「地域創造学環フィールドワークの取り組み」

報告者：静岡大学地域創造学環伊豆地域フィールドワーク担当学生

和泉直人、本田圭美、影山 舞（松崎町商店街グループ）

鈴木麻央、森本和花（伊豆半島ジオパーク・教育班）

報告3「域学連携による地域づくり～「とこは伊豆プロジェクト」の取り組み」

報告者：糸川大河（常葉大学プロジェクトリーダー）

報告4「東伊豆空き家再生プロジェクトの取り組み」

報告者：小川航輝、杉沢優太、河野祐輝（芝浦工業大学プロジェクト参加学生）

パネルディスカッション

パネリスト：報告者、課題提案者（松崎町 深澤準弥、南伊豆町 山口一実、
東伊豆町 荒武優希）

コーディネーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター）

（阿部）

静岡大学では、2013年度（平成25年度）から地域課題解決支援プロジェクトを始めました。それまでも大学は各地域と連携して、授業や研究で様々な取り組みをしていましたが、大学が普段あまりコンタクトを取れていない地域もたくさんあります。そうした県内各地域には課題や大学への提案があるのではないかということで地域課題解決支援プロジェクトを始めたところ、1期と2期を合わせて42件の課題が提案されました。そのうち20課題近くが実は伊豆半島からのものでした。松崎町から1期・2期合わせて11件ほど、南伊豆町からは3件、東伊豆町も2件、伊豆半島ジオパーク推進協議会からも提案をいただきました。

教員だけでなく学生も、地域課題を手掛かりに、一緒に地域に入れたらいいなと考えていたところ、2016年度から地域創造学環という教育プログラムができました。その大きな特徴はフィールドワークであり、松崎町と東伊豆町に受け入れていただくことになりました。

しかし、既に常葉大学さんは松崎町に15年前から入って、石部という地域の棚田の石組みを作り直すところから始め、棚田の再生に貢献しましたし、各地域の聞き取りをした冊子もできています。松崎町と15年間取り組みを進めてきた蓄積があるわけです。

それから、東伊豆町でも芝浦工業大学の学生が空き家改修プロジェクトを進めていて、その1期生に当たる荒武さんが地域おこし協力隊として東伊豆町に滞在し、静岡大学のフィールド

ワークの受け入れをしていただいています。

そうした形で伊豆半島の特に賀茂地区には、いろいろな形で既に大学や学生が関わっています。だとしたら、お互いがどんなことをしているのかを紹介し合う機会がもっとあってもいいし、地域の方に知っていただくことは必須ではないかと考え、今回の研究フォーラムを開催することになりました。

西伊豆町では立教大学さんが入っていたり、同じ芝浦工大の皆さんで南伊豆町に行っているサークルもありますので、すべてが一堂に会する足掛かりになればいいと思っています。

さて、静岡大学は約70年前（1949年）に開設されたとき、ここ伊豆半島の各市町村からも支援をいただいています。当時の文部省が各都道府県に国立大学を一つつくることを決めたのですが、予算は各都道府県で用意することになっていました。静岡県の場合、大学設置がきまっていない県があと数県しかないという時点でも、なかなか準備ができていませんでした。河津町役場に保存されていたお手元の資料によると、各市町村に人口や経済規模に応じて寄付金を募っており、集め方を見ると、寄付金というよりも強制金に近かったようです。私たちの大学も、成り立ちの時点で各地域から大きな支援をいただいていることを忘れてはならないと思います。そのようなことから、こちらに貢献するというよりも、いただいた支援に少しでも応えなければということで、今回のような機会を設けました。

報告 1

フューチャーセンター×地域 ～対話と協働の取り組み事例から～

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター准教授）

小田しずく（静大FC学生ディレクター）

1. 地域への学生参画

（宇賀田）

阿部先生からも話がありましたが、学生と地域の接点が、特にこの3年ぐらいで急激に増えたように思います。学生がいろいろな地域に入って、地域の方々と一緒に取り組んだり、地域で学習を深めたりしています。私は大学で就職支援やインターンシップなどに取り組んでいるので、インターンシップで地域の方と関わったり、フィールドワークやプロジェクト学習で関わったり、あるいはフューチャーセンターというところで住民の方と関わったりすることがあります。

私は、実は9月10～12日も伊豆におりまして、特に11日は「若旅IN伊豆」という企画で松崎、南伊豆にいました。これはアイザワ証券、静岡新聞社との共同企画で、県内外の大学生に伊豆地域の魅力や課題を体感・体験してもらって、伊豆への提言をまとめてもらうプロジェクトです。今年（2018年）は24名の大学生が参加してくれました。静岡大学からも参加しましたが、県外に出ている伊豆地域出身の大学生も参加してくれました。

宿泊施設を入れると12カ所ぐらいを回っているのですが、新聞に載ったものも二つあります。伊豆に関しては、私はこういう形で接点を非常に多く持たせていただいています。

私の報告の中心テーマは、対話と協働です。対話と協働は最近いろいろなところでよく聞かれるようになりましたし、私の取り組みからも非常に重要だと思いますので、対話と協働で何に気を付けなければならないのか、何をお互いに理解しなければならないのか、フューチャーセンターを運営する中で少し考えが整理できたことを、最後に私からお話ししていこうと思います。

では、フューチャーセンターについて、小田から説明します。

2. フューチャーセンターとは

（小田）

フューチャーセンターのことを知らない方がほとんどだと思うのですが、フューチャーセンターは多様性、対話、未来志向の三つの柱を基本としています。

まず多様性というのは、性別や年齢、社会人の方なら職業や職種、学生なら学校や学部が異なる人たちが集まる場所であるということです。

対話というのは議論や討論ではなく、お互いに受け止め合うものです。否定的な意見も一つの意見として受け止め合う場となっています。

最後の未来志向が一番聞きなじみがないと思うのですが、実現したい未来を初めに設定して、その未来を実現するために自分ができることは何かを考えることです。バックキャスティング（backcasting）ともいいます。フォアキャスティング（forecasting）という言葉を知っている方は多いと思うのですが、フォアキャスティングは現状を生かして改善を積み重ねることです。バックキャスティングはその反対で、未来を先に設定して今の自分にできることを探すことになり

ます。フューチャーセンターは、そういう考え方を大切にしています。

県内には11のフューチャーセンターがあります。宇賀田先生、全国だとどれくらいあるのですか。

(宇賀田)

静岡は47都道府県の中でも圧倒的に多いといわれていて、全国では恐らく100も200もないのではないかと思います。

(小田)

多いそうです。フューチャーセンターはとても楽しい場であり、話を聞くだけでは分からないと思うので、明日(9月16日)の午後、南伊豆町の「きよりや」でフューチャーセンターを行うので、興味のある方はぜひ来てください。

3. 静大フューチャーセンターの取り組み事例

(宇賀田)

静大フューチャーセンターの体制としては、私が顧問のような形でいて、ファシリテーターを兼任している学生ディレクターが中心となって運営してくれています。毎回テーマオーナーを迎えて、そのオーナーが抱える課題や悩みを扱いながら、おおよそ3時間ぐらいで行っています。

私たちが心掛けているのは、コミュニティではなくプラットフォーム(platform)であるということです。コミュニティというのは、私たちの考えでいえば限られた人たちのための心地いい空間だと思うのですが、プラットフォームはむしろ外に開いて、その場その場で実際にはコミュニティ形成をせずに、むしろどんな人でも歓迎するものと考えています。

開催までの流れとしては、テーマオーナーから連絡をいただいたら、「ぜひこういうテーマでみんなの意見を聞きたい」などと連絡を取り合い、日時を決定して、Facebookで告知し、参加者へ連絡して開催します。

静大フューチャーセンターは、5年前から始まりました。8月でちょうど5周年を迎え、5周年記念イベントを10月に企画してくれています。普段は私の大学の研究室で行い、今年(2018年)は月2回開催する定例のフューチャーセンター(FC)と、外部に出掛けて行う出張のFCがあります。今日(9月15日)現在、定例が69回、番外編が27回になります。今週も、私は参加できていませんが、小田が12日に菊川市で市民や高校生を交えて、菊川市役所からいただいた課題であるコミュニティバスの運営方法について、フューチャーセンターの下でトークセッションを行いました。研究室が非常に狭いので、過去最多の30人弱が集まったときは、入り切らずに廊下でグループワークをしたこともありました。

地域課題解決支援プロジェクトについては、2015年2月に初回のシンポジウムが松崎町で行われ、当時の学生ディレクターと一緒に発表しました。実は、フューチャーセンターについて外に向けて発表するのは、そのときが最初でした。その話をしたところ、フューチャーセンターをぜひ松崎町でも行ってもらえないかという話が当日あり、翌3月に松崎町の施設を借りて「静大フューチャーセンターin松崎町」を開催しました(図1)。



図1 「静大フューチャーセンターin松崎町」の様子

フューチャーセンターを5年間行っていますが、この松崎町でのフューチャーセンターは、私や当時の学生にとって非常に大きな気付きがあり、それがフューチャーセンターの意義や運

営方法を考えるきっかけになりました。2日間のうち、初日は住民と話をし、2日目は松崎高校の生徒と話をしました。中学生もいました。

初日に町のことを話し始めたとき、最初は割と否定的な意見が多く、人口減少や若者流出の問題、商店街のお店が閉まってしまい、なかなか買い物に難しいといった問題もありましたが、そのうち肯定的な意見が広がってきて、いろいろ活発に意見を言うようになってきました。翌日は松崎中学校と松崎高校の生徒とも話をしたのですが、彼らは非常に肯定的に未来を明るく考えていました。現状の課題はたくさん持っていました、将来松崎に帰って何かやりたいということを、多くの生徒が話をしてくれました。

そのときに私たちが気付いたことがあります。大人はそれぞれ地域にいて、それぞれのコミュニティでそれぞれの活動をしています。実は大人同士の連携は、うまくいっているものもあればうまくいっていないものもあるし、薄いもの、濃いものがあります。このフューチャーセンターで学生が入っていろいろ話し合いをしたところ、大人同士の話し合いは盛んにはできないのですが、大人が学生に向けていろいろな本音を話してくれるようになりました。それを見て私は、学生が地域の大人をつなぐ^{かすがい}銚機能を持っているのではないかとということに気付きました。

このことが地域の大人たちの結び付きをむしろ強め、地域の力になるのではないかと考えました。特定の関係者が一部の動きだけでやっても、なかなか大きなうねりにはなりません。地域の大人がきちんと連携できれば、地域の大きな力になるのではないかと考えました。これを私は後に「地力発掘^{じりき}」と命名しました。地力とは元々備わっている力、本来の力という意味があります。松崎でフューチャーセンターを行う中でも、学生がファシリテートすることが、地域にとっても意義があるのではないかとということをもとに考え始めて、いろいろな地域に出掛けるようになったり、呼んでもらえたりするようになりました。

もう一つの事例として、今年（2018年）1月8日に、島田市役所の会議室を借りて、フューチャーセンターのコラボセッションを行いました。テーマは「手づくりムービーが生む新しい観光—地域資源にヒカリをあてよう—」です。島田市から元々いただいていた課題について、フューチャーセンターが解決の糸口を何か見つけたいと思い、島田市と連携して行いました。この日はセッションだけでなく、セッションを受けて実際にアクションに結び付けていこうという初めての取り組みでした。午前中にフューチャーセッションをグループごとに行いました（図2）。



図2 島田市でのフューチャーセッションの様子

島田市は、お茶を産業のシンボルとしてもっと前面に出したいのですが、お茶の浸透がまだまだ図れないので、もっと可能性はないかを話し合いました。私たちがフューチャーセッションの中で目を付けたのは、お茶は確かに地域特有の産業ではあるのですが、地域にとってお茶は日常生活そのものであるということです。日常生活をもっと外の人に向けると、例えば海外の人たちにとっても、決められた観光地を回るのではなく、日常生活や日常体験ができるのは非常に魅力があると聞いていたので、外の人に向けて島田市の日常を紹介できるような動画を作れたらいいのではないかと、フューチャーセッションの中で話しました。

そして、三つのグループに分かれて、どんな日常生活があるのかを一緒に話していきました。ここのお団子屋さんがおいしいとか、あそこのトンカツ屋さんのチキンカツがおいしいという話が出てきて、実際に自分たちで行って、写真や動画を撮っていきました（図3）。それを最終

的には、県立島田商業高校の生徒たちが運営している島田フューチャーセンターのメンバーが編集してくれました。実はそのとき、小田が島田商業高校の3年生としてこのセッションに参加していました。

そのとき作ったものを島田市の動画コンテストに島田商業から応募したところ、「バカっいいい賞」を受賞しました。検索してもらえば、今でも見ることができます。かっいいいCMに仕上げてくれて、島田市を紹介しているというよりも、何か興味を持ってもらえるような動画を作ってくれました。



図3 まちの日常を撮影

4. 対話と協働

このような事例から、対話と協働についてお話しします。議論と対話は何が違うかというと、ある本の引用ですが、対話とは違いや差異を認識することで新しい選択肢を探し出す、あるいは問題に気付いたり共有することです。一方、議論とは原因や解決策の選択肢について論を戦わせ、どれが正しいかを決めていく、問題への対処を決めていくことです。こういう定義付けをすると、対話と議論がまったく違う目的で使われていることが分かります。

フューチャーセンターの一つの価値として、この対話に中心を据えています。議論の中で何か一つに決めるわけではありません。新しい選択肢や違う意見を歓迎しながら、新しい可能性、あるいは自分たちにとって一番いい未来を考えていきます。そうしてフューチャーセンターでは、絵空事ではあるのですが、各テーマに対して2〜3時間の中で一生懸命考えることで、当事者意識（自分事である意識）が醸成されていくのではないかと思います。

まさに今、地域でいろいろな活動が行われていると思いますし、そういう中で、学生が入ることによって地域の困り事を解決していくのですが、実は解決の主体は学生ではなく、地域にあると思います。そうでないと本当は持続的な解決策にならないのではないかと思いますし、学生が新しいものを考えるのではなく、対話の中から地域にとって一番いいものを、みんなで考えていくということが重要です。

地域には、人口減少を一つの起点としてさまざまな問題がありますが、そこに自分が少しでも何か関わることによって地域は変わっていきます。それが対話の重要性と価値なのだろうと思います。

一方、「きょうどう」には主に「共同」「協同」「協働」の三つがあると思いますが、私はこの三つに何となく違う意味付けをしています。「共同」は、複数の人や組織があらかじめ決められた立場や条件の下で関わり合っていくことだと思います。「協同」は、複数の人や組織が同じ目的や利益を達成するために物事を行うことだと思います。

そして「協働」は、昨今自治体でも市民協働などという言葉が使われるようになりましたが、「共同」や「協同」とどこが違うかというと、複数の人や組織が同じ目的を共有した上で、自分ができることを持ち寄って力を合わせて物事を行うことではないかと思っています。

つまり、誰かが決めた役割にみんな従うわけではありません。誰かが指示者で、誰かが指示を受けるという上下関係もありません。自分ができることを持ち寄るので、自分が役割を探していきます。当初の役割が途中で変わったりもします。それも自分で考えたり、人が言ってくれたりするのが協働ではないでしょうか。そして、力を合わせて物事を行うからこそ、同じでない方が力が大きいのです。同じ発想でない人が来た方が、違うピースがはまるのです。

フューチャーセンターをやりながら、同じ風景を見ていても違う視点の写真を撮っています。

それがむしろ、その場所ごとの価値を新しい視点から見ることになるのではないかと思います。

最後に問いかけたいのですが、協働の反対語は何だと思いますか。多分、「対立」と出ると思うのですが、私は無関心だと思っています。これはもちろん正式な定義でも何でもありません。フューチャーセンターをやりながら、協働作業は必ずしも多くはないのですが、関心を持つ人を一人でも増やしているのではないかと思うのです。

地域と学生が関わる中で、何か課題を解決したり、目標を達成したりすることはとても大切ですが、まずは自分ができることをやってみて、少なくとも関心を持つことです。自分だったらどうするかから始まるのではないかと思うし、地域の方々も、学生一人一人に対して関心を持つことも協働の出発点ではないかと最近感じています。

報告 2

地域創造学環フィールドワークの取り組み

松崎町商店街グループ

和泉直人、本田圭美、影山 舞（松崎町商店街グループ）

1. 自己紹介

（和泉）

まず、われわれと地域創造学環というユニークな教育プログラムについて、自己紹介させていただきます。

私は、取材では「おにぎり」というニックネームで通しています。いろいろな地域に出掛けていくことが大好きで、大学のうちにまずは47都道府県をコンプリートし、できれば海外も15カ所は行ってみたいということで頑張っています。一応今のところ都道府県は43ぐらい行っていて、今年（2018年）中に残り4県に行くことが目標です。

（影山）

私は、「まいまい」というあだ名で呼ばれています、中高ですと卓球をやっていたので、卓球に興味があります。おにぎりとは真逆でインドアなので、家で漫画などを読んでいることが多いです。よろしくお願いします。

（本田）

同じく地域創造学環地域経営コース3年の「よっちゃん」です。私は1年の後期から松崎町の商店街の活性に向けて活動してきて、早2年がたとうとしています。さまざまな方と出会い、話し合い、交流するうちに、松崎町のことがどんどん大好きになって、もっと松崎町の方と一緒に活動したい、もっと多くの方に松崎町を知ってほしいという思いが強くなりました。今ではフィールドワーク活動以外にも、ワーキングホリデーに参加したりして、自分は松崎町で何ができるのか、伊豆全体で何ができるのかを探っている途中です。

私は伊豆の国市出身ということもあり、このたび伊豆地域で活動する皆さんの発表を聞けることを楽しみにしていました。本日はよろしくお願いします。

2. これまでの取り組み

（影山）

まず、取り組みの1年目について話します。地域創造学環は私たちの代に初めてできた教育プログラムで、松崎町に入るのも私たちが初めてでした。なので、私たちがまず取り組んだことは、松崎町を知ることでした。それとともに、松崎町の魅力を発見するところからフィールドワークがスタートしました。ジオガイドによる散策ツアーに参加し、松崎町の偉人や施設などについて学びました。それから、桜葉の収穫体験などもしました。

でも、体験活動だけではなくて、実際に地域の人たちと話す場をつくることも大切だと思いました。例えばヒアリング調査として、私たちが商店街に足を踏み入れて店主に話を聞いたり、松崎町役場に勤めている人たちを呼んでもらって、一緒に松崎について話すこともしました。そういう感じで1年目は松崎町を知ることに取り組みました。

(本田)

続いて、取り組みの2年目について発表します。2年目は新たに1年生を迎え、2年生5人、1年生3人の8人で活動しました。もっと多くの方に活動を知ってもらえるよう、私たちが松崎で行っている活動を紹介した「松崎通信」を作成して回覧板で配布したり、地域清掃活動や3世代交流スポーツ大会など、さまざまな活動に参加したりしました。そしてこの2年のフィールドワーク活動で特に取り上げたいことが2つあります。

1つ目は、秋祭りの準備への参加です。今まで調査やインタビュー、散策が多かった中で、このように地元住民の方と深く関わる機会をもらえたことは、私たちにとって活動の大きな一歩となりました。松崎町で商店街の活性のために活動していたのに、私たちの活動を知っていただけているのは、ほぼ商店や行政の方だけでした。そのような中、松崎町の一大イベントである秋祭りは、私たち学生と松崎町民の方をつないでくれて、新たな発見に導いてくれました。商店街が活気にあふれ、みんなが楽しそうに騒いでいる祭りを、これから先も継承していったほしいと思いました。

2つ目は、松崎高校でのワークショップです。それまで私たちより年上の方たちと一緒に活動をすることが多く、高校生に話を聞いて何を思っているかを探りたいという意見が多くあったので、今年（2018年）2月にワークショップを行いました。生徒会など有志20名ほどが集まり、「松崎町のなまこ壁を外国人に知ってもらうには」「松崎町の魅力を静岡市にどうやって発信するか」といったテーマについて、3～4人のグループに分かれて、大学生と一緒に考えました。

1つ目のテーマでは、松崎町にきた外国人になまこ壁ケーキを紹介したり、漆喰体験ができればいいという意見が出ました。2つ目のテーマでは、静岡のテレビで映される市町対抗駅伝に出店する店に特産品を出したり、マウンテンバイクコースを紹介してはどうかという意見が出て、有意義なワークショップを行うことができました。

最後には大学生活の紹介や進路相談も行うことができ、将来について深く考えるきっかけをつくれたと思います。さらに、佐藤教育長さんとお話しした際、「このようなワークショップを開催したことで、高校生の将来に対する考えや勉強への意欲が向上したので、中学生にも行ってほしい」というお話がありました。この件については、2年という活動期間の集大成として、私たち3年生は最後に何ができるのかを考えて活動していければと思います。

3. これからの取り組み**(和泉)**

では、これからの取り組みについてお話しします。松崎町が直面するさまざまな課題に私たちも触れてきました。ただ、私たちが一つ大事にしたいと思っているのが、「つながり」というものです。地域の問題上、松崎町はわれわれのような大学生の年代に空白があります。2010年の人口ピラミッドを見ると、総人口が約7700人いたそうですが、そのうち20～24歳は男女合わせて133人しかいないのです。大学生はどこか遠隔地に行くとき、住民票を移さないままの人も多いため、恐らく本当にレアな存在です。私たちはこの点に目を付けました。具体的には学生年代（小学生、中学生、高校生）と、私たちよりも上の世代とのつなぎ役が必要ではないかと考えています。

では、何をしていくかという、われわれ空白年代として、つながりをこれからも築き上げていきたいと思っています。その一つとして、継続的に地域行事に参加しながら、さまざまな年代の方々と顔見知りになって、いろいろ話をするような交流を深めていきたいと考えています。もう一つは、私たちがさまざまな声をつなげる媒体でありたいとも考えています。これは、

高校生とワークショップをしたときから考えていることで、高校生に続き小学生、中学生とも交流を持ちたいと考えています。

内容としてはさまざまあるのですが、松崎町はみんな同じ小学校、中学校、高校に行くというふうに、ほとんど決まったような進路を歩んでいくので、競争心がないというか、お互い刺激し合うようなきっかけがなかなか見つからない面があります。そこで、進路につながるような刺激を与えられるようなきっかけをつくれたらと考えています。中学生は進路を決めていく中で肝心なところになると思うので、そこに刺激を与えるようなワークショップを、われわれの目線から検討していきたいと考えています。

高校生向けには、引き続きコラボレーションしていく中で、この地域には大学生がいないところに目を付けて、ぜひ静大に来ていただいて、大学はこんなところだということを、われわれから説明できるようなイベントを開催できたらと考えています。

こんな感じでさまざまな人たちと今までつくり上げてきたつながりを大事にしながら、また新しいつながりを大事にしながら、こういったつながりを温めていくような活動を続けていきたいと考えています。

伊豆半島ジオパーク・教育班

鈴木麻央、森本和花（伊豆半島ジオパーク・教育班）

1. 地域創造学環とは

（森本）

私たちの所属する地域創造学環とは、学部の枠組みを超えていろいろな授業を受けられる新しい形の教育プログラムで、2016年4月にできました。特色の一つがフィールドワークであり、現地に赴いて幅広い教養と専門知識を生かして、地域が抱える問題を解決していく活動をしています。

私たちは現在2年生です。去年（2017年）、1年生の後期からフィールドに赴いて活動しています。現在13のフィールドに分かれて活動していて、私たちはその中の一つである伊豆半島ジオパークというフィールドで活動しています。その中で環境班と防災班、教育班の三つに分かれていて、私たちは教育に着目して活動しています。

2. ジオパークとは

ジオパーク（Geopark）とは、大地の遺産を保全し、教育や観光活動に結び付けながら、地域と地球の持続可能な発展（開発）や、地域を元気にすることを目指しているユネスコのプログラムです。ジオパークは世界にもたくさんあるのですが、日本には現在43地域あり、その中の一つが伊豆半島ジオパークです（図1）。国内にジオパークができて以来10年間、増え続けているのですが、その理由としては、地域活性化のために取り組んでいる自治体が多いことが考えられます。

ジオパークの主な活動は、地域遺産の保全とそれを絡めた教育、さらにはそれを観光にまでつなげるという一連の流れがあり、持続可能な発展にもつながっています。私たちは環境保全、ジオパークを通じた教育、ジオツーリズム（Geotourism）、さらには地域振興、SDGs（持続可能な開発目標）などに幅広く触れながら活動しています。SDGsはSustainable Development Goalsの略称で、2015年9月の国連サミットで、2030年までの目標として世界すべての国に向けて出

よるジオツアーの形で行い、普段どんなふうにガイドしているのかを学びました。加えて、ガイドさん8人とワークショップも行い、伊豆半島ジオパークの未来について話し合いました（図3）。

第4回は、「大学SDGs ACTION! AWARDS」に参加しました。SDGsに取り組んでいる他大学や先進企業の方々と意見を交わし、知識を深めることができました（図4）。

第5回は、「みしまっ子体験塾」のスタッフを務めました。2日間あったのですが、1日目に私たちがスタッフとして下見を行い、2日目はチョコレートやカルメ焼きによる料理実験を行い、子どもたちにジオパークがどのようなものなのかを説明しました。

第6回は、伊豆半島東部のジオサイトを見学しました。大室山や城ヶ崎海岸などを巡りました。国際地理オリンピック研修会のスタッフも務め、三島市街地の楽寿園で、ジオ・エコ・ひとの要素の関係性がどうやって成り立っているのかを学びました。

第7回は、ジオカフェに参加しました。「ブラタモリ」の「天城越え」の回で天城を取り上げていただいたので、ディレクターさんや解説員の方々の講演を聞きました。加えて、私たちの初めてのプロジェクトになるのですが、食品開発を始めました。伊豆名産のワサビ、鹿肉、シイタケを使ったのですが、難航しています。



図3 ジオガイドの皆さんとワークショップを行う



図4 「大学SDGs ACTION! AWARDS」に参加し意見交換をする

4. 課題に対して

最初に挙げた課題に対してですが、伊豆半島ジオパークの認知度が低いことについては、世界ジオパークに認定されて徐々に高くなってきているように感じています。加えて、私たちが活動していく中で認知度を上げられたらと思っています。

関心喚起が難しいことについては、「ジオ菓子」や先ほどの料理実験など、子どもへの教育や、「エコ」「ひと」の要素を強化していく中で、「ジオ」以外の切り口を用意することにより、最終的にジオパークへの関心喚起につながればと思っています。

地域差については、ジオリア周辺は活動が非常に活発で、看板も立っていたり、ジオツアーも活発に行われているのですが、伊豆中部から離れた所には看板が設置されていないジオサイトがあったり、なかなかうまくいっていない面があるので、離れた場所でのジオツアーなど、活動強化と整備が必要だと考えています。

ジオ要素が強い点については、関心喚起と同様に「エコ」「ひと」の活動を強化することで切り口を用意できていると思っています。

課題は、焦点を合わせた活動をすることです。私たちは教育からSDGsまで本当に多くのことを取り扱っています。加えて、伊豆半島ジオパークは15市町からなります。地域差など多くの問題があり、私たちもすべてを負うことが非常に難しいのですが、何から取り組んでいくかという焦点を合わせた活動をしていきたいと思っています。

加えて、活動の強化が課題です。松崎町のグループは現在2年目ですが、私たちは1年しか活動していないので、現状把握に終始しており、プロジェクトもようやく始まった段階です。これからいろいろ活動を強化していったら、新しいプロジェクトも始めていけたらと思っています。

それから、もっと地元の人たちと接し、地元で利益を生むことが課題だと考えています。私たちは今のところ、推進協議会やガイドさんとお話する機会が多いのですが、地元の人となかなか接することができていません。これから地元の人と接する中で、どうしたら伊豆半島ジオパークに興味を持っていただけるかという活動をしていきたいと思っています。

報告 3

域学連携による地域づくり ～「とこは伊豆プロジェクト」の取り組み～

糸川大河（常葉大学プロジェクトリーダー）

1. 活動の紹介

私は大学1年の頃から、「とこは伊豆プロジェクト」に参加しています。現在の担当は、全体のリーダーと棚田保全活動のリーダーです。今日（9月15日）は来られなかったのですが、大石かおりさんという女性も今年(2018年)からこのプロジェクトに参加し、いっぷく亭とマルシェのリーダーをしてもらっています。

とこは伊豆プロジェクトには、主に三つの活動内容があります。一つ目は農業でつながる「石部棚田保全活動」、二つ目と三つ目は同じ目標なのですが、地域のさまざまな人とつながる「マルシェ」「いっぷく亭」です。

このプロジェクトは2003年から始まり、当初は石部棚田保全活動のみを行っていましたが、2012年からマルシェの活動を始め、2013年にいっぷく亭の活動も始めました。なぜその二つが棚田保全活動に含まれているかというと、棚田保全活動をするに当たって、地域の人のみならず、他の場所から来た都市住民の方とも交流が必要だと考えたからです。

活動の流れとしては、まず参加学生を募集します。方法はいろいろあって、学校にポスターを掲示したり、LINEで勧誘したり、個別に知っている人に連絡を取ったりします。次に、地域の人に連絡を取り、当日の行動を大体確定して計画を作成し、スケジュールを発表して活動に移していきます。

1-1. 棚田保全活動

棚田保全活動は、三浦地区で長らく耕作活動を中止していた棚田を復興のシンボルとして使うため、1996年に始まりました。1999年から委員会を設置し、復元活動が始まりました。2000年からは、静岡県が設立した「しずおか棚田・里地くらぶ」というボランティア団体と合同で、棚田保全活動を行っています。さらに2002年から、都市住民を対象にした棚田オーナー制度が開始され、さらに保全の勢いをつけるために棚田保存会が設置されました。2003年からはわれわれ常葉大学も参加して、2012年からはオーナーとして、一画ですが棚田を持っています。

年間スケジュールとしては、2月の田起こしから始まり、10月の稲刈りまで続きます（表1）。今年（2018年）の稲刈りは、9月29、30の土日曜に行うことになっています。

2月の田起こしでは、鍬を使って田んぼを耕します。3月は畔切りで、私はここから参加しました。畔切りとは、棚田の保水力を高めるために昨年（2017年）付けた畔を鍬で切り崩し、モグラやカニが作った穴などを石や粘土で埋めていく作業です。全体で1.4haあるので、学生と棚田保存会の方々の力を合わせて、協働してすべてやります。すべて手作業なので、とて

表1 棚田作業の年間スケジュール

月	活動内容
1月	
2月	田起こし
3月	畔切り
4月	畔塗り
5月	田植え
6月	
7月	草取り
8月	草取り
9月	
10月	稲刈り
11月	
12月	

も労力がかかる仕事です。

続いて4月は、畔を再び泥などで補強する畔塗りの作業になります。少ない水で多くの田んぼを潤すために使う技法の一つです。

5月は田植えです。これも手作業で行うので労力がかかりますが、楽しい作業です。

7～8月で草取りをします。棚田の中の水回りを良くするために、浮いている草や藻を取り除きます。

最後に、稲刈りをします。稲を刈り取って干す作業をします。

1-2. マルシェ

マルシェでは地元の製品の販売を中心に行っています（図1）。2012年から年に2回、石部棚田などで開催しています。地域の人との交流が主な目的となっています。自分たちでテントなども張って、机などもすべて手作りです。上の代から受け継いで使っています。

企画運営は、「こらっしゃい会」の女将さんたちと協力してやっています。こらっしゃい会の代表者は高橋さんで、会員は地元の民宿の女将さん7人です。地域住民と学生が連携して運営しており、果物や海産加工物などを売っています。



図1 マルシェの風景

1-3. いっぱく亭

いっぱい亭では、特産品を使ってわれわれが調理したものを販売しています。2013年5月に活動をスタートし、今年（2018年）で5年目になります。こちらでも交流を目的としていて、マルシェは地域住民が主な交流相手だったのですが、いっぱい亭では地域住民、都市住民、学生と幅広く交流することを目指しています。

活動の流れとしては、メニューを提案し、地場産品を購入します。そこから女将さんたちと協力して料理を作ります。今まで出したメニューは豚汁、おにぎりなどで、いまだに作り続けているのは寒天ゼリーなどです。新しく販売したものに牛乳寒天もあります。



図2 いっぱく亭の作業風景

2. 活動からの気付き

私自身は棚田保全活動を長い間してきたわけではないのですが、自分の家が農家ではなく、作業がすべて初めてだったので、面白さや大変さを身に染みて感じました。それから、農業に関わる人が高齢化しています。それは石部棚田でも同様です。今まではあまり関わることもないので、人ごとで済ませていた面がありましたが、自分が協力して棚田の保全活動をするに当たり、保存会の人たちはほとんど高齢者で、次の代がいるのか？というぐらいなので、高齢化が進んでいることが身に染みて分かりました。

それから、棚田があるのとないのとでは、まったく環境が違うということです。作業をしていると分かるのですが、田んぼに水を張ればカエルやカニ、アメンボやトンボなどいろいろな

生物が寄ってきます、生態系に棚田が深く関わっていると強く思いました。

さらに、学生が棚田保全活動に参加することによって、今後の農業への可能性が期待されている面があります。例えばこうやって学生が関わることにより、学生自身が後継者となる可能性もあります。関わった学生たちが棚田に来て、こういう体験をしてよかったと感じ、それをソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）に投稿すれば、棚田はこんな所なのだというのをよく分かってもらえると思います。

また、自分たちが作業をしている間にも、お子さん連れの観光の方が時々いらっしゃったりしました。そういうことをより多くできれば、地域の観光客が増えて活性化に貢献できるのではないかと考えています。

ただ、運営上の問題もあります。それは参加学生の人数が増えたときです。通常は20人ぐらい来ているのですが、多いときは30～40人ぐらい来ます。そういうときのスケジュール管理は、基本的にリーダーである自分1人、もしくはサブを付けて2人で行っているのですが、少し大変かなと思うことがありました。そして、後輩への引き継ぎも課題です。自分は2年生なのですが、上の代のリーダーは4年生です。つまり3年生がおらず、そのまま2年生が引き継いだので、引き継ぎの工程に少し問題があると考えています。

マルシェの活動では、お客さんにこの商品を買ってほしいとなったときに、その商品をどこに置かかという配置が重要であることを学びました。それから、お客さんの目に付く場所に店を構えて、地域の方々との交流も踏まえて来てもらわなければならないので、集客も大変でした。ただ、マルシェを楽しみにしてくれている方も多くいます。もう何年もやっている活動ですので、マルシェを楽しみにしてくれている方がいるのは、個人的にもうれしく思います。

一方で、内容のマンネリ化の問題もあります。基本的に地元のものを販売するので、農作物などでは同じものしか提供できないし、商品が品薄になったり逆に多かったり、天候に左右されやすい点もあるので、その辺は少し課題だと思っています。

いっぽく亭の活動では、計画・運営の楽しさと大変さを学べるのがやはり大きかったと思っています。臨機応変に対応することの大切さも大きいものがあると感じています。自分たちが計画・運営し、レシピも含めて自分たちで作っているものなので、アイデアを取り入れつつ、新たに決めてやり直すのも大切だということを学んでいます。

この活動には、裏で動いている人がいます。先ほど言ったように、女将さんたちも協力してくれますし、私たち学生側にも裏方がいます。先輩方が特にそうです。表を自分たちに譲ってくれて、裏の作業をしてくれます。やはり裏で動いている人がいて初めて、こういう計画等が成り立つということを、改めて感じられる機会になっています。

また、さまざまな人と関わることができました。これは活動するに当たっての目標なので、達成できていることはうれしいです。

課題は、作ったメニュー・レシピを残していくことです。好評だったから後でもう一回作ろうとなったときに、レシピが無いと困るので、代々受け継いでいくべきものだと思います。さまざまな人と関わることができたと言いましたが、地元のことをもっとよく知るためにも、多くの人と関わることは、これからも課題にしていくべきだと思っています。

3. 棚田保全に多くの学生を参画させるには

最後に、棚田保全活動に多くの学生を参加させるにはどうしたらいいかということを考えています。参加したきっかけとしては、誘われたという人が多いです。自分もそうなのですが、自分が所属している部活の後輩を9月の稲刈りに勧誘しました。誘うときのうたい文句として

は、「参加費1000円ぐらいで民宿のおいしい料理が食べられるよ」と言って参加してもらっています。「こういう作業があるよ」と言う場合もあるのですが、どちらかという、料理で誘う方が多く来てくれます。学内にポスターなどが貼ってあるので、ポスターを見て面白そうだと思って参加してくれる人もいます。

部活などには入っていないけれども、交流の場を広げたいということで活動に参加してくれる学生もいます。部活やサークルではないため強制力がないので、参加しやすい面もあります。友達も呼びやすいので参加しやすいと思います。

活動が続ける理由は、やはり楽しいからというのが多いです。人との交流もそうなのですが、「作業が楽しい」と言ってくれる学生も多くいます。それから、作業によってやりがいや達成感を得られます。自分が最初に参加したのが畔切りだったからかもしれないのですが、2泊3日で1.4haの畔を切ったときは、確か38人で作業したのですが、2日間もかからず、15年間のうちで最速で終わりました。そのときは今までにない達成感を得られたと感じ、いまだに続けています。そうした達成感が得られるのはいい機会だと思います。

部活やサークルのような固さありません。ボランティア活動なので、やりたい人はどうぞという参加の仕方です。

居心地がいいのは、非常にありがたいことです。グループであれば、居心地が良ければ良いほどいろいろな人が来てくれるし、そのまま残ってくれたりするので、やはりいいことだと思います。

おいしいご飯が食べられるはそのとおりで、おいしいご飯を食べられることを目標にして作業や交流を頑張ってくれる人もいますので、それはうれしい限りです。

学生にとっての棚田保全活動とは何かというと、成長できる場、楽しめる活動という2点が大きいと思います。やはり人と関わることによって成長し、それによって楽しめる活動だと思ってくれる学生が多くいるようです。それはうれしいことだと思いますし、こういう活動であることを目標にして、自分たちリーダーや先生方、先輩方も運営してきているので、とてもうれしいです。

では、参加させるにはどうするかというと、まず誰でも気軽に参加できるようにすることです。学生が主体となって運営することによって固さは生まれませんから、参加しやすい形になっています。すると、交流の場が増えることで楽しい場や成長の機会が増えます。そして、棚田に関わる人の意識が変わり、愛着が生まれます。これは棚田に対する愛着でもいいですし、地域に対する愛着でもいいです。愛着の念が生まれてくるとまた参加してくれるので、このサイクルは大切ではないかと思っています。なので、これからも続けていきたいと思っています。

報告 4

東伊豆空き家再生プロジェクトの取り組み

小川航輝、杉沢優太、河野祐輝（芝浦工業大学プロジェクト参加学生）

1. 空き家改修プロジェクトとは
(杉沢)

私たちは、東伊豆町の稲取という地域で空き家改修プロジェクトの活動をしています。空き家改修プロジェクトという名前から、空き家を改修することが目的と間違えられがちなのですが、建築系の学科に所属している人がとても多いので、建物を利用して地域を活性化することを目的としています。日本中で空き家が増えているという社会背景があり、特に地方都市などでは空き家がとても増えているので、そこに着目しました（図1）。

そして、実践の場を求める学生がいます。学校で製図の授業や模型を作る授業はありますが、すべて机の上で収まってしまいます。実際に建物に触れて改修したり、新しいものを作ったりするのは、大学の教育ではなかなかできません。そうしたものを求めている学生がいます。

全国に広がっている空き家問題は、治安悪化などの悪影響があるので、どうにかしたいという地域がたくさんあります。空き家を改修する作業によって、実践の場になる学生と、空き家を活用できる地域の間でウィンウィンの活動が展開されると思っています。

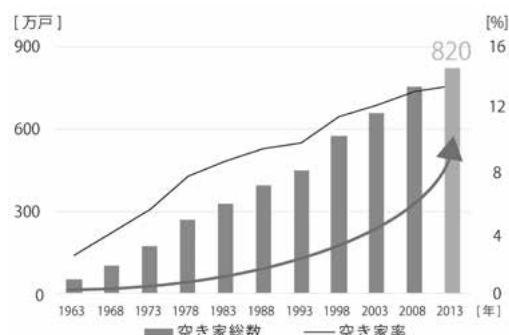


図1 増加する空き家率（国土交通省の資料をもとに報告者が作成）
<http://www.mlit.go.jp/common/001125948.pdf>

2. これまでの活動

しかし、実際に現場に入ると予想外のことがあります。空き家を改修していると、地域の方が面白がってくれて、ただ改修するだけでなく、地域の方が協力してくれるようになりました（図2）。一緒に活動している地元の大工さんが、自分たちの分からないことを教えてくれるのです。こうした方々の協力がなければ成り立たない活動だと、最近身に染みしています。大学で教わることはすごく狭い範囲で、実際の現場ではもっといろいろな知識が展開されています。



図2 地域の方と取り組む改修作業

私たちは学生だけでプロジェクトを進めていて、特に教授などはいないので、それなりの柔軟さがあります。教授がいると、地域の人も警戒心を持つ場合もあるとよく伺うのですが、学生だけで来ているので、地域の人も来やすい感じになっています。

私たちが空き家を改修して竣工するまでのプロセスとしては、空き家は地域のものであるし、地域の方々に使っていただきたいものなので、地域の方々と設計していきます。施工も、地域の方々が私たちに技を教えてくれたりして、一緒に行きます。現地に行ったときには、どういうふうに使っていくかという方針を決める会議を、毎回必ず行っています。愛着を持っていた

だきたいので、住民の方のリアルな意見を聞くためのワークショップも行っています。

空き家改修プロジェクトは5年目の活動ですが、第1期は東伊豆町水下という所で、小さな休憩所を造るプロジェクトから始まりました。それがFacebookなどのSNSで広がり、「うちでもやって」という声上がるようになりました。

第2期は3地域で行いました。私はこの段階から入ったのですが、地域ごとに特色が全然異なります。稲取は地域の人柄というのか、温かい人がとても多いです、徳島県の本沢も高齢者がとても多い所ですが、温かい人たちが多いです。神奈川県は相模原はなかなか難しくて、住宅街なので、フランクに来るというよりは郊外都市という感じです。第3期が群馬県の水戸と、相模原に近い上溝という地域と、稲取の3地域です。第4期は、水戸のまた別の物件で、新たに神奈川県の開成町が増えました。空き家改修プロジェクトでは、特に東伊豆と一番長くお付き合いさせていただいています。

3. 代表的な物件

ここからは代表的な物件の紹介です。相模原市の alterego という施設は、元々個人住宅だったのですが、改修して障害者支援施設を造りました。

小田原市は元々、酒造が有名で、オーナーが酒蔵を使って店を開きたいということもあったので、企業の方と一緒に酒造の店舗を改修しました（図3、図4）。イベントでは地域の方々がたくさん来てくれて、新しい魅力を発見してくれるのです。自分の地元はなかなか魅力を発見しづらい人もいるのですが、こういうふうにより外部から行って魅力をアピールしていくと、総体的に魅力を発見してくれます。

静岡県東伊豆町では、ダイロクキッチン（ダイロクキッチン）を改修しました。地域おこし協力隊の荒武さんが現在こちらで活動をしてきています。ここは元々、消防団の倉庫だったのですが、シェアキッチンにして、食を中心に地域の人がつながる空間にしました。

現在改修しているのがEAST DOCKです。現在もある機関が活用していて、東海汽船の切符売り場になっています。ここをシェアオフィスにしています。

このような活動をしているのですが、東伊豆町ではとても長く活動しているので、将来的なビジョンがあって、東伊豆町を循環するようなサイクルをつくりたいと考えています。ダイロクキッチンとEAST DOCKはとても近

く、ダイロクキッチンは食を中心にした交流スペースで、EAST DOCKはシェアオフィスです。さらに、東京からのアクセスは結構いいのですが、高級ホテルが多くてなかなか泊まりづらいという難点があるので、今度はここにゲストハウスのようなものを造り、



図3 小田原市のケース (Before)



図4 小田原市のケース (After)

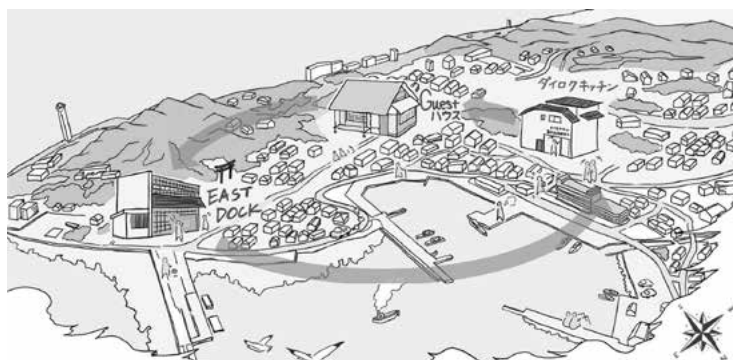


図5 東伊豆町での改修ビジョン

衣食住がそろふことで、人々がそこを循環していくようにしたいと考えています（図5）。建物が少し離れているので町を歩かなければならないのですが、それによって魅力をどんどん発見していくことができます。建物の中に収まっていると、風景は楽しめますが、町歩きをなかなかしないので、衣食住を点在させることによって町の魅力を発見してもらおうという、将来的なビジョンを描いています。

ダイロクキッチンのオープニングイベントには地域の方がたくさん来てくれて、現在も活用されています。イベントでものすごく使われていて、私が聞いた情報では年間100回ぐらいのイベントが行われています。

徳島県の本沢で改修した物件は、大きな母屋で、築150年の古民家をゲストハウスに変換しています。地域の活性化が第1の目標であり、ここのオーナーが元々地域おこし協力隊なので、泊まりながら本沢の魅力を発見してもらおうということで、案内したり、まき割りの体験などをしたりして、地域の魅力を発信していく活動をしています（図6）。



図6 徳島県のケース

4. 目指すもの

私たちが活動していく中で新たな目標がだんだん生まれてきて、次に何をしなければならぬのかというビジョンが見えてきています。

第1の目標としては、空き家の問題は自分たちで解決できないくらい膨大な数があるので、こうした活動を自分たちの大学の中でとどめていると、一部の地域にしか展開できないのですが、全国的に異なるタイプの大学があり、建築以外にも解決方法があると思うので、そういった取り組みがどんどん展開していけば、地域がより活性化されるのではないかと考えています。

第2の目標としては、私たちは今まで5地域9物件で活動してきたのですが、ばらばらに活動していました。それらが私たち学生を媒体としてつながっていけば、より相乗効果が生まれるのではないかと考えています。

一番大事なことは、私たちが入って地域が盛り上がるのではなく、地域が地域を盛り上げていくための起爆剤になることだと思っています。最終的に私たちがずっと入っている状態ではなく、地域自身で盛り上がっていけるところまで関わられたらと思っています。

パネルディスカッション

阿部——地域課題解決支援プロジェクトに関して、先ほど42件のうち20件弱が伊豆半島のものだという話をしましたが、課題提案をしてくれて、受け入れていただく経緯がありますので、最初に課題提案者の方々からそれぞれ質問や意見、感想などをいただければと思います。

山口——南伊豆町では、学生とコラボレーションすることが、本当に最近になって始まりました。若い皆さんのご意見をいただける機会は、われわれ職員にとっても有効ですし、地域の方々にとっては、皆さん方の世代は地域にいない世代なので、すごく新鮮な気持ちになれたのではないかと思います。

積極的に参加される学生の意見はしっかりしていて、自分が何をやりたくて、どうしたら成功に導けるかということを、割と明確に持っている方が多い気がしています。そこがプロジェクトを成功させる秘訣なのだろうと感じています。

伊豆半島にはいろいろなフィールドがありますので、現在取り組んでいるプロジェクトに限らず、人を誘っていただきながら、いろいろなことに挑戦していただければと思います。大学4年間は時間的にそれほど長くはないと思いますが、社会人になっても協力できるような取り組みもあると思うので、いろいろチャレンジしていただければと思います。

深澤——皆さんの活動をいろいろ聞かせていただいて、個人的に一番うれしかったのは、伊豆や松崎を好きになってくれたことです。私たちとしては一番ありがたい話ですし、関わっていただけることが一番ありがたいと思います。学生だけでなく、地域も育つ良いきっかけになっているし、ウィンウィンの話もありましたが、関わる人すべてがウィンという関係性を保てる形にできれば、伊豆もまだまだいけると思っています。

伊豆半島南部の先端の地域は、本当に日本の課題の最先端を走っています。これだけエリアが固まっても最先端になっている所はなかなかないので、エリアごとにいろいろな形を考えなければなりません。新しい視点、新しい考え方、新しい発想で仕事をつくらなければならないし、人の交流を活性化させる必要があると考えています。

国レベルでいろいろやってもなかなか解決策が見いだせない中で、皆さんに来ていただいているいろいろなことを考えていただけると、何かが新しくなると思っています。世界のトップランナーになるチャンスではないかと実は思っています。そういう部分でも一緒に関わって、皆さんのような若い世代のものの見方、考え方を引き継いでいけたらというのが私たちの思いでもあります。

地域課題解決支援プロジェクトには、当町が11個と最も多く課題を出させてもらい、どれだけ課題があるかをアピールする中で、いろいろ関わりを持たせていただいているので、こういう機会をつくって皆さんに来ていただくことは、本当にありがたいと思います。

荒武——私は空き家改修プロジェクトのOBです。東伊豆町で活動する中で、改修した物件を、これからも自分たちが関わりながら地域の人たちと一緒に活用していきたいという思いから、東伊豆町に移住して2年半たちます。静岡大学の学生さんをフィールドワークで受け入れたり、後輩たちの支援をしたり、地域の中で活動しています。

多分、皆さんと同じ視点で伊豆のことが見えている部分があるのではないかと思います。皆さんそれぞれお話しした中で、活動の気づきをたくさん得られたという報告を受けたのが、自分もそうだったのでとてもうれしく思いました。学生時代も今もそうですが、伊豆という土地でいろいろな挑戦をして、いろいろな気づきを得られて、自分の成長につながる経験をたくさんさせてもらっています。

学生の皆さんは、いろいろな形で地域と関わる中で、もっと挑戦して、もっといろいろなことに気付いて、伊豆が好きになった方がたくさんいると思いますが、これから先もどういう形で地域で関わっていただけるのかというところまで、答えをそれぞれ見つけられると思うので、これからも活動を活発にお願いしたいと思います。

阿部——報告者から他の報告者に対する疑問・質問でも結構ですし、フロアからも報告に関してもっと聞きたいことがあると思いますので、ここで質疑応答の時間を取りたいと思います。

宇賀田——ここは伊豆プロジェクトに質問します。開始から既に20年近くたっていて、大学生が関わるようになったのは後だと思うのですが、それでも最初の頃に関わった大学生は既に社会人になっています。そういう方々で棚田をたまに訪れたりする動きやつながりはあるのでしょうか。

糸川——自分が知っている中でですが、OBの方で1人、棚田のオーナー権を持っている方がいらっしゃいます。自分たちが活動するときに来て、教えてくれたりすることもあります。OBになっても関わってくれている方はいらっしゃいます。

宇賀田——ご自身は、卒業したら何か関わりたいと思いますか。

糸川——はい。自分がこうしてリーダーを務めるのは、大学に入ってから初めてなので、そういう面ではこのプロジェクト自体に愛着がありますし、来て面白いと思ったから続けている面があるので、行ける機会があれば行って作業を手伝いたいと思っています。

宇賀田——学生が15年ぐらい関わると、30代後半になります。それぐらいから子どもを持ったりして、子どもが小さい頃だとなかなか動けないかもしれないけど、時間に少し余裕が出てきたら、第2のふるさとではないですけど、そういうつながりが出てくればいいと思います。

学生はどうしても入れ替わりがあって、継続に問題があるといわれるのですが、逆に考えれば、どんどん人が新しくなって、減ることは多分ないと思います。プロジェクトがなくなない限りは、年間1人でも2人でも増えれば、裾野が広がると思います。20年間で、松崎で勉強させてもらった学生が、相当数になると思います。そういう人たちが先ほどの棚田オーナーも含めて帰ってくれるような循環を、われわれは長い目で見なければならぬのではないかと思いますし、われわれはそういうことまでも、ある程度期待してもいいのではないかと考えています。

阿部——今回のフォーラムでも、立場は違えども複数の大学が関わっています。互いに学び合いながら、それぞれ長い時間で次のサイクルをつくりつつ取り組んでいけば、学生は4年間しかいないけれども、もっと違う展開になりそうな気がしました。

糸川さんに質問があったので、私もついでに質問します。棚田のイベントに参加している学生の数を見るととても多くて、50人乗りの大きなバスで来ますよね。だとすると、単位やゼミとかではなく来ていて、おいしい料理だけでは釣り切れないぐらいの人数が来ているような気がするのですが、他に何か秘密があるのですか。

糸川——秘密ということではありませんが、次はこういうことをやりますというのを、その日リーダーを務めていた人がバスの中で最後に言うのです。そうして、「ぜひまた参加してください」と言うことで、興味を持ってくれた人がまた参加してくれたり、広めてくれたりしています。それで増えている面はあると思います。

阿部——おいしいご飯だけではなくて、いろいろな興味関心で誘っているのですね。他にいかがでしょうか。

フロア1——静岡大学の3年生です。東伊豆の空き家プロジェクトについてお聞きしたいのですが、空き家を改修する際のお金はどうなっているのでしょうか。それから、勝手に空き家改

修はできないのではないかと思います。例えば建築法に基づいた認可のようなものがあると思うのですが、そういうものも自分たちでやっているのでしょうか。

杉沢——予算についてですが、空き家改修プロジェクトで9物件を改修しているのですが、お金をどこからつくるかというのは地域ごとに全然違います。東伊豆町の場合は、町から話をいただいて、町の物件を委託していただいています。そのため町から予算が出るのと、サークルでも部活でもなく、学校のプロジェクトとしてやっているの、プレゼンテーションをして賛同が得られれば大学からお金がもらえる仕組みです。その合計で改修資材を購入したり、交通費を賄ったりしています。

法規はとても難しくて、勉強しても学生たちは実務経験がないので、なかなかできません。ですので、町の人や地域の方に教えてもらっています。基本的には、構造体や梁など天井を支えるものはあまりいじらず、内壁を塗ったり、視覚的な印象の違いを出したり、家具作りなどをしていて、建物が倒れるようなことはしないようにしています。

阿部——荒武さんたちが取り組んでいたダイロクキッチン、調理器具などはクラウドファンディング（crowdfunding）で調達しているのですね。

荒武——そうですね。あとは、「お皿や調理器具を譲ってください」という回覧板を回すと、地元の方のお宅には結婚式の引き出物のお皿などが余っているので、家の裏の倉庫に連れていかれてどっさり渡されることもあって、2軒ぐらい回っただけで、食器が山のようにもらえたりすることもありました。

阿部——杉沢さんたちは東伊豆に入って、EAST DOCKの改修をしていらっしゃるんですが、この旧依田邸はどうですか。

杉沢——すごいですよね。

阿部——ここはまだ新しいのですが、別棟はもっと古くて。

深澤——300年です。

阿部——伊豆半島で一番古いのが江川邸で400年ぐらい、そしてここの旧依田邸が300年ぐらい。

深澤——入り口のところが300年で、3棟ある倉は、増築しているので、200年のものと100年ぐらいのものがああります。

杉沢——とても勉強になっていい場だとは思いますが、歴史的なものだと重みがありますね。

阿部——もちろん松崎町でも委員会を立ち上げてやっているのですが、杉沢さんたちも興味を持つのではないかと考えて。

杉沢——徳島県の物件も築150年なので、施工という点ではとても勉強になりました。普通なら実際のものに触れることはないし、歴史的なものはなかなか貴重なので。その辺の仕組みや建築的な視点もそうだし、こういう場に出られることもすごく貴重です。

阿部——東伊豆からなら50分くらいで来られますからね。自分の拠点に帰るよりもこちらの方がすぐ来られますね。

杉沢——そうですね。

阿部——また時々遊びに来てください。

杉沢——ありがとうございます。

深澤——阿部先生、代弁していただいてありがとうございます。

阿部——他にいかがでしょうか。前島さん、何かありますか。

前島（一般）——私も松崎のファンで、深澤さんに受け入れていただいてから8年ぐらい通っているのですが、自分もどんなふうに地域に関わろうかと思ってやっているところです。皆さんの発表の中に、地域活性という言葉が随分たくさん出てきたと思うのですが、地域活性とは

どういう状況なのか、どんなふうにイメージを持っているのか、それぞれ聞かせていただければと思います。

影山——個人的な話になってしまうかもしれないのですが、地域活性と考えるとぼんやりしている感じで、住む人が住みやすく、楽しい所というか、住んでいる人の生活が少しでも豊かになるのが地域活性といえるのではないかと思います。何となくですが、私の考えの一つはそれです。

阿部——ジオパークの場合は、特定の町のある商店街という形ではなくて、また違う視点かもしれないかもしれませんが、感じるものがあれば。

和泉——人がいるかないかというのが一番大きいと思っています。イベントで観光客が来たり、一時的に人が来てお金を落として帰っていったりすることから、最終的にはそこに長く定住することが大事だと思うのですが、ジオパークはそれとはまったく逆というか、若者がそこで学んで、そのまま残って何か地域のために貢献していく形ができることが地域活性ではないかと思っています。

糸川——年間スケジュールの7月に草取りと書いてあるのですが、草取りが終わった後、2日目に地元の祭りに参加する企画があります。そこで活躍するのがマルシェといっぶく亭なのですが、地域の人のみならず、都市住民が対象の出し物でもあるので、地域のものを売っていることを知ってもらえば、またここに来ようかなと思ってもらえると、自分としては思っています。また来ようかなと思って、来る回数が増えていくことが地域活性だと自分は思っています。

杉沢——先ほどのフューチャーセンターの話で、問題解決のポイントは学生ではなく、地域の人にあるというのは本当にそうだなと思うのです。学生が入って活気付けるのは最初的手段であって、地域の人が自分の地域を好きになることがとても大事だと思っています。それがあれば、地域の人たちが課題に直面したときも、問題解決に動き出せると思うし、そういう地域は観光の面でもすごく魅力的な地域に見えると思います。

土地もあるけど、人柄がすごく観光の魅力になると思っています。そうするとリピーターも増えるし、もしかしたら移住者が増えて人口が増え、結果的に経済が回って良い循環が生まれると思うので、地域の人が自分の地域を好きでいることが、最も地域活性化につながると思います。

山口——最終的にどういう状態が地域活性化かというと、行政の力を要しなくなることはないかと思っています。行政の立ち入る隙がなくなるほど、住民自治が成り立っている状況、地域で地域を支え合うことができている状況になることが、地域活性ではないかと思っています。

しかし、伊豆半島の人口が少ない中で、その役割を中心的に担っていく人物をなかなか見つけ出せないのが、伊豆半島全体を見渡せる行政がそういう人を見つけて、何か仕掛けていく方法しかできず、ともすればそれを行政がずっと担ってしまう状況になっています。それはやはり行政側の体質の問題もあって、人事異動などもあるので、だんだん人が替わることによって、考え方が当初とはずれていくことも出てくると思います。深澤さんのように行政を離れて、一住民として地域に関わり、地域に来る人たちと関わっていく取り組みは非常に重要ですが、地域住民から見るとやはり行政の職員なのです。

なので、皆さんが地域に入って活動するときに、この地域で誰とつながって、誰にどういうお願いをして、どういうお付き合いをしていけば自分たちが活動しやすいかというのを見ながら、あるいは最初にきっかけをつくってくれた人に聞きながら、そこを重要視して活動していくと、本当の意味での地域活性につながっていくのではないかという気がします。

深澤——自分としては、地域活性は一言では難しいと思っています。経済的な活性化もあるし、

人的な活性化もあるし、社会的な活性化もあります。

私が大学生に来ていただいて一番思ったのは、入り口は私たち行政が入るとやりやすいかもしれませんが、その後は自分たちでいろいろな人と関わっていきます。荒武君もそうだと思うのですが、地域の人にもいろいろなものを教わって、いろいろなことをやると、教える側も元気になります。

先ほどの松崎班もそうで、3世代交流のイベントに入ってもらったのですが、その後のバーベキューなどで時間を共有することがとても大事だと思っています。個人的に後でおじいちゃん、おばあちゃんたちから、「学生とあんなにしゃべる機会ができてよかった」とすごく感謝されたのです。だから、何かをしてもらったことではなく、時間や空間の共有ができたことが、その人たちを元気にするということをすごく感じたのです。

観光で地域を発展させるといっても、ヨーロッパではお客が来過ぎて観光破壊のようなことが起き、入場制限をする国も出始めていると聞きます。果たして地域の在り方はどうなのか、活性するのが本当にいいのか、その部分をすごく深いところで考えなければならないのですが、先立つものは金ですからね。露骨に言うとながめるのですが、その部分を上手に稼ぐことができれば、持続可能につながっていくと思います。

お金に対する考え方もだいぶ変わってきているとは思いつつ、この間もファンドの関係の方々が、お金の在り方や稼ぎ方や使い道をすごくナーバスに考えているという話を聞いて、ただ稼げばいいわけではないような気もしますし、でも稼がないと食べていけないとも思うので、そういうバランスをうまく取ってできたらいいと思っています。

単独で松崎町だけがというのはなかなか難しいので、南伊豆を元気にするためにいろいろやっているもののおこぼれをもらうとか、東伊豆でやっていることと連携を取って、人をもう少し伊豆の先端まで動かそうということを、私たちも一緒に考えているので、そこに入ってもらって一緒に活動が続けられると、活性化になるのかなと後から振り返ると思います。最後に振り返って、あの町は活性化に頑張っていたなとか、個人的なものは後先にしろ、地域の力を上げることが活性化の一つではないかというのは感じています。

荒武——すごく重いバトンが回ってきたという感じなのですが、本当に深澤さんがおっしゃるとおり、複合的な問題が絡まり合って課題がいろいろ出来上がって、それをどうにかできている状態が、多分活性化した地域ということになるのかなと思います。

この土地に2年半住まわせてもらって、自分なりの視点で伊豆を見たときに、午前中に少しお話をした、ある中学校の先生の話が象徴的でした。その方は教員生活10～20年ぐらいの方なのですが、「教え子たちを見ていると、伊豆から追われるように進学したり就職したりしている。自分たちが住んでいる土地に誇りを持てていなかったり、好きではなかったり、住み続けるとつまらない土地だと考えてしまったりしているのかもしれない」と話していました。

杉沢が話したことにもつながるのですが、私もすごく好きな土地なので、地元の人たちに「うちの町はすごくいい所だろう」と言ってもらったり、伊豆の子どもたちに誇りを持って住んでもらいたいと思っています。それは子どもたちだけではなく、きっと大人たちもそうです。伊豆のことをあまり知らないまま就職で来る方たちともつながりがあるのですが、そういう方たちにもこの土地の魅力を伝えていかなければなりません。

地域活性をうたっている一人としては、子どもたちやよそから来る学生たちに、「あなたたちが住んでいる（関わっている）土地はこんなにすてきな所なのですよ」ということを声を大にして伝えていき、それが心に響いた人たちが来てくれて、周りの人たちにも「伊豆はいい所だよ」という波及効果というのか、関わっている人たちがみんな「いい所だよ」と思えることが、

地域活性につながるのではないかと信じて私は活動しています。

阿部——〈会場の照明が点灯〉最初は重いテーマで動揺した感じでしたが、だんだん明るくなってきた感じがします。自分はどうかというと、実は地域活性自体にそれほど興味がありません。何が活性化なのか、何が活性化でないのかがよく分からないので。松崎や東伊豆や南伊豆は面白いから来る、満足感が高いからまた来ているだけなのです。学生の皆さんの答えやパネリストのお話を聞いて感じるのは、地域を気に入って、好きになることが非常に大事だということです。

学生さんに関しては、今回が4回目という話をしましたが、伊豆に来て行るのが4回目というだけで、地域連携論という授業の中でも関係者の方にキャンパスに来てもらってお話をしてもらっています。そのときにも受講者の皆さんに聞いてもらったのですが、たとえば荒武さんは、地域の空き家の修復や再生で東伊豆に来て、ぼろぼろの家をきれいにすればそれで成功でいいと思うのですが、それをまったく使ってもらえず、悔しくてしょうがないという思いでその後も関わっているのではないですか。

今はどういうわけか、地域おこし協力隊になって、どうやって食べていくのだろうかという話もありますが、食べられるようになるかどうかではなくて、伊豆にとどまってもらいつつ、食べられるようになったらいいなということを心配しているので、それを除けばどこでも食べていけると思うのです。

地域づくりや地域活性化というと、地域づくりが好きなのではなくて、地域づくりをする自分が好きだという人が結構目に付くのです。自分は地域に関心があるといって、あちこちでちょっと盛り上げてさっと帰っていき、次に行っても何も残らないという人がいます。それでも関わっているのだからそれはいいことなのですが、実際に自分たちが関わってつくったものが活用されていないことがあります。それなら、その後もずっと残って、後輩にバトンタッチする形での地域づくりを行い、地域活性化をしている自分だけが好きなのではなく、地域が好きだという活動をしないと、一つの地域に関して長続きしないし、長続きしないともっと悪いことになる可能性もあるような気がします。ですから、荒武さんなどは本当にモデルとなる人ではないかと思います。

私自身はどちらかというとそうではない方なので、いつも反省します。学生の皆さんにはちょっと説教っぽくなりますが、地域づくりが好きな自分もいいし、かつ地域そのものが好きになって、関わって何か残したいという人たちが増えると、自然と住民の方も応えてくれるのではないかという気がしました。他にいかがでしょうか。

菅沼——静岡県賀茂地域局の菅沼です。今日（9月15日）は学生の皆さまの発表を伺って、とても勉強になりました。この地域をとて気に入ってくださることをうれしく思います。

伊豆半島の地元の方々は、特に年配の方が多かったと思うのですが、びっくりしたことがあると思うし、最初は怖いと思ったりしたこともあると思います。何か自分が気になったことなどはありますか。

私は初めて仕事で伊豆半島南部に行ったときに驚いたのは、特に稲取なのですが、言葉が悪いことです。普通に話しかけているのに、けんかを吹っ掛けられているような感じなのです。漁師町にはありがちなのですが。

それとともに、克服できたきっかけがあれば、それも教えていただきたいのですが、いかがでしょうか。

杉沢——最初来たときは、半分以上何を言っているか分からなかったことがあったのですが、会話しながら仲が深まっていくというか、親方だったら一緒に作業しながら、体験を通して仲

良くなっていくようなことが多かったです。

阿部——棟梁との時間は濃密なのですか。時間は結構あるのですか。

杉沢——シャッターを開けて作業しているので、中でどんな作業をしているのかが見えて、気に掛けて教えてくれたりします。言葉遣いは悪いのですが、とても優しい人なのです。心はすごく温かいです。

和泉——本当に雑談なのですが、母親の実家が東伊豆なのです。東伊豆の人は、久しぶりに会ったときにうれしいことを「やだ」と言うのです。東京の人に「やだ」と言ったら、「なぜこの人は嫌だと言っているのかな」と思うでしょう。母親から「稲取は言葉が結構荒っぽいから、そのままよそに行ったら引かれるよ」と言われているので、自分でも言葉を意識して生活しています。

阿部——本田さんも東伊豆に行きましたよね。

本田——夏休みに松崎町でワーキングホリデーを体験したのですが、そこの女将さんたちが結構強烈な方が多くて、女性は強いな、芯が通っているなと思いました。最初は結構きつめと言われたので、怒られているのかなと思ったのですが、それは教えてくれるだけで、怒っているというよりは世話を焼いてくれる、気に掛けてくれていると後で気付いたので、すごく優しくしていただけているのだなと思いました。

阿部——それぞれ地域性がありますから、慣れると面白いし、面白い方が多いような気がします。

つい1週間前、フューチャーセンターのメンバーによるセッションがあったとき、奥さんを喜ばせるカフェみたいなアイデアが出て、みんな奥さんのことを怖がっているのだなと思いました。

糸川——自分たちが関わるのは石部の棚田保存会の人たちぐらいなので、そんなに幅広く関わるわけではないのですが、すごくパワフルだなというのは感じます。ご高齢の方ばかりなのに、普通に鍬を動かしたり、自分たちと同じぐらいの精度と動き方でやっているの、中に若い人が入っているのではないかというぐらい動いています。自分たちは初めての作業だったので、教えてもらわないと分からないから最初は教えてもらうのですが、その後個別に教えてくれるところから何から何まで、大抵のことはパワフルにやっていて、元気がすごいのです。自分の周りの同じぐらいの年の人で、そんなに元気な人はいないので、すごいなと感心しています。

フロア2——保存会の方々はすごく高齢になりましたよね。平均年齢は何歳ぐらいですか。

深澤——70代後半ぐらいです。危機管理を考えれば、あと10年という数字は相当きついで、常葉大の皆さんの関わり方もだいぶ変わる方向になっていくのかなという気もします。その辺の知恵も出していただければ、保存という部分が変わってくると思います。

協力隊OBも一応2人いますが、がつつり関わっているのが1人で、もう1人は石部に住んでいる常葉のOBがいます。その人は、生きていく上で看護師の資格を取って住んでくれています。関わり方としては手薄にはなりますが。答えのないところをみんなでいろいろ探していかなければならない面があるので、その部分では相当考えなければなりません。というのも、棚田だけではなく、地域の存続にも関わってくるので。

宇賀田先生が、協働の反対は無関心と言っていましたが、すべてに共通すると思っています。マザー・テレサは、愛の反対は憎しみではなく無関心だと言いましたが、無関心という重さは何にでも共通すると思っています。例えば、保存会が高齢化していても、無関心になれば当然棚田はなくなってしまいます。そう考えると、無関心は地域の存続において最大の敵だと思います。

阿部——いろいろな無関心の中でも一番響く無関心は高齢者ではなくて、子どもたちの無関心

です。それが一番怖いような気がします。東京の方に行っても全然構いませんが、生まれ故郷にいつか帰ってくるとか、仕事も結婚も故郷ではないかもしれないけど、故郷のことは気にしているという状態が非常に大事だと思います。

フィールドワークやプロジェクトで地域や行政の方と話すときに感じるがあります。授業だけなら年間数日しか来ないので大したことはできないと思うし、学ぶだけで精いっぱいと思うのですが、地元の子どもたちが誇るところもそれほどないと思っている地域に、学生たちがやって来て、調べたり、聞き取りをしたり、フィールドワーク以外でもワーキングホリデーでやって来たりするのを見せることが大事かなと。例えば賀茂地域に住んでいる子どもたちにとっては、「あのお兄さん、お姉さんたちは何をしに来ているのか。何かあるから来ているのだろう」と思うようになって、「もっと来たい」と学生が言えば、それ自体が地域の子どもたちに刺激になるので、気にせず来てくださいという話をしてくれます。

高校生や中学生とコラボしたからといって、それで進路を変えることはあまりないとは思いますが、自分たちの地域に興味関心を持って調べに来てくれて、それ以外でも来ること自体がよい影響というところとちょっと傲慢な感じもしますが、それが手掛かりになって、子どもたちの記憶に残っていればいいのかなというふうに思います。

一方で、常葉大学では、各地の高齢者から話を聞き書きして冊子にしているではないですか。あれは記録として残すことが非常に大事です。中高年以上の人にとっては、その人が生きた証を学生が記録していくことは大事ですし、若い世代に何らかの形で記憶に残るという両方のことが、フィールドワークによってできたらいいと思いました。

他にいかがでしょうか。課題提案者の方々からもっとこういうふうにしてくれなくては困るという話でも構いません。

山口——まず常葉大学のプロジェクトですが、最初の立ち上げから相当長い期間関わっていただいています。そもそものきっかけと、それを代々うまく引き継いでいくための要素はどこにあるのかを教えてください。

糸川——きっかけに関しては詳しく知らなくて、今担当している先生が山本早苗先生なのですが、その一つ前の先生から始まっているらしいということしか聞いたことがないので、詳しく答えられません。

継続については、リーダーをしていた人がこの人なら任せられるのではないかとという人に次のリーダーを任せて、その人に大体の引き継ぎを終えてから、また次にということで、勧誘の方法はそれほど変わっているわけではないので、内容ですかね。いくら存続させたくても人が来てくれないと活動も終わってしまうので、内容に興味を持ってくれることが重要だと思います。

自分がいる社会環境学部は、地域のことについて学ぶ学問が多いので、社会環境学部に来る人自体が地域に興味があります。そういう人たちを対象にして、地域の人と関われる機会を提供しているから来てくれるというのはあると思います。

自分は当初、山本先生のゼミで、半ば強制的に「来てね」と言われて、「はい、分かりました」という感じで参加したのです。でも、保存会の人たちをはじめ、周りにいい人たちがいて、自分は体を動かすことが好きだったので、活動も別に苦ではありませんでした。ですから、活動に参加して自分に得るものがあるから、自分が知らないことを知ることができるから参加する人たちもやはりいると思うのです。活動自体のもの珍しさと、宣伝する相手がそういうものに興味を持っている人たちであることが、一番続く理由だと思っています。

山口——きっかけを聞いたのは、何年も続けていくときっかけを知っている人がだんだん少な

くなって、なぜそこに入ったのか、何をしようとしていたのか、最初の段階で気付かないまま、あまり考えないまま、自分たちの活動をしているのではないかという気がするからです。

結局それは自分がそこに行って楽しむことができて、それに共鳴してくれる人がいることと、受け入れてくれる人がいることが重要であって、そこで何をしなければならないかということとは、それほど深く考えなくてもいいという気がします。目的はどんどん移り変わっていくので、移り変わった目的に合わせていかなければならないですし、それを取り巻く情勢もどんどん変わっていくので、その時々に合わせて目的や取り組み方が出てくるのではないかと思います。

先ほど出たまちづくりや地域活性についても、3年後に同じ状況でいいのかというと、多分そうではないと思います。成功した地域活性も、5年ぐらいたつと当然古いものになって、もしかしたら失敗事例といわれているかもしれません。そういうことも含めて考えると、常に新しく進めていくためには、人が入れ替わって、その人に意志をしっかり引き継いで、その人が楽しく思えて、さらに地域も受け入れ体制ができることが一番いいのではないかと思います。

私も、地域活性や地方創生には絶対的な成功はないのではないかと思います。成功したと思って次の瞬間には失敗になっていたり、次の瞬間には新しくしなければなりません。常に成功し続けることは絶対できないので、その辺も含めて失敗を恐れずにとにかく、失敗するものだという前提で取り組んでいくことが、私たちも含めて、地域づくりを考えていく人間の働き方ではないかという気がします。

深澤——あとはやるかやらないかで、傍観するか、実際そこに入り込むかというだけの話だと思っています。いろいろな知識や情報は自由に取り込めると思うのですが、知っている風だけではなくて、そこに飛び込んで初めて分かるもの、活動してみても分かるものがあるので、やるかやらないかがとても大きなハードルになってくると思っています。

超えなければならないハードルもあるし、いろいろな障害も当然出てくるとは思うけれども、みんなにはもっと活動してもらいたいというか、失敗し続けると最初から決めて言うのだけど、失敗を目指しているのではなくて、失敗してもいいことなのです。やはり失敗してみないと分からない部分もあるし、やってみることはとても大事なかなと思います。

山口——あまり成功を求め過ぎないということです。言い方が悪かったですね。

深澤——身の丈を越えて？

山口——失敗してもいいかな。

深澤——どこで失敗とするかということです。

山口——そうそう。

深澤——ですから、やるかやらないかはすごく大事だと思います。みんなは若いので、チャンスも時間もあるし、就職してからや子どもができてからの関わり方も、いろいろなライフステージがある中で、どういう関わりができるか、どういうことができるかというところへ飛び込んでもらえることは、自分たちとしてはありがたい話ですし、自分たちも飛び込みたくなるような地域づくりを、失敗を恐れずにやるつもりでいます。では、飛び込んでいった実践者にバトンを渡します。

荒武——自分も含めて、何か挑戦して失敗してしまったときに、カバーしてくれる人たちがたくさんいるのです。それはひょっとしたら伊豆だけではないのかもしれないけど、これだけ志を持って入っている方たちがいるのだったら、地元の大人たちの胸を借りて、思いきり自分がいいと思ったことをやってみて、その後のことはまた考えるという気持ちはとても大事だと思います。自分も、地元の大人の方たちの胸を借りて、いろいろな挑戦をさせてもらっています。

そういうエピソードでいうと、稲取のある生活道路を歩行者天国にしてみようというぶっ飛んだ計画をしています。50歳ぐらいの地元の先輩たちが「自分たちが20年前にできなかったことを今、荒武がしようとしてくれている」と言ってくれていて、これは絶対に成功させなければならないと思っています。自分は冗談交じりで言ったことだったのですが、地元の先輩方が本気になって、今は住民の同意を得たり、土木事務所に許可を取りに行ったり、警察にも話を通したり、いろいろな形で動いてくれているので、本当に恵まれた環境だと思っています。

言い方が悪いかもしれませんが、その環境を活用しない手はないというのは本当にそうだなと思っていて、自分が入ったからには良くなってもらいたいし、良くするためには自分一人の力ではなくて、ここにいる皆さんの力を合わせるぐらいの勢いでやっていかなければならないことばかりだと思っています。ですから、こういう機会を静岡大学につくっていただいて、ネットワークができていくことはとても重要だと思っています。

阿部——一つの地域と大学のつながりでできることはあまり多くないと思います。でも、登壇している皆さんは、違う自治体にいるのに同じ部署の先輩後輩のように見えますね。そういう関係があるところに複数の大学、高校や中学も入ってくれるといいと思いますが、それのできることはだいぶ広がるような気がします。

昨年（2017年）8月10日に開いたフォーラムでは、賀茂地域でどんな学びができるかというときに、金沢大学の取り組みがとても面白いので、立ち上げに関わっていた宇野先生をお呼びしてお話を伺いました。金沢大学が能登半島の先端の珠洲市で能登学舎という分校のようなものを作っているという話がありました。観光地で有名な輪島に白米の千枚田があり、その風景は石部と非常によく似ています。そこには観光客もたくさん来るし、金沢大学の拠点もあります。でも、能登学舎を輪島に作ったら、そこまでの往復で終わってしまっ、その先になかなか行かないだろうというのを見越して、最先端の珠洲市に能登学舎を作ったのです。それはとても素晴らしいと思いました。静岡県の場合だと、賀茂振興局が南伊豆の先端にあるようなイメージでしょうか。

それとは別に珠洲市役所にも話を聞きました。それはとても素晴らしい取り組みなのですが、基本的には一自治体対一大学で、それが複数の広がりを持ったらもっといいと思ったので、今年（2018年）3月に、立教大学と岩手大学が陸前高田に作っているグローバルキャンパスへ、シンポジウムの参加を兼ねて視察に行ってきました。そこは「岩手大学×立教大学」と書いてあって、管理運営自体は地元のNPOが行っています。その2大学が運営しているのかと思ったら、発表者自体はお茶の水女子大学など東京から来ていて、とても楽しそうでした。

それを伊豆に置き換えて考えると、珠洲市に当たるような所がもっとあります。松崎もいいし、南伊豆もいいし、東伊豆もいいし、もちろん下田や河津もとてもいいです。そこで、それぞれ広がりのあるキャンパスという形で展開できれば、複数の大学が絡んで分厚いものになるのではないかと思います。ですから、今回は最初の名刺交換のようなもので、私たちもこれから先もっともっと広げなければならないと思うし、東伊豆で活動している皆さんが他の地域にも興味が出てきたりとかあると思うので、ぜひ広げていただければと思います。

ジオパークの方は、特定の市町ではなく伊豆半島全体ですね。そういうことも含めて、質問や意見はありますか。

荒武——われわれの方でも、皆さんと同じ年度からフィールドワークが始まっていて、1年間いろいろな形で、皆さんと同じような形で同級生の子たちにいろいろな体験をしてもらって、地域の課題や自分たちの課題も見えてきているので、同じようなステップなのかなというふうに思っていました。

実際、皆さんは2年後期からどういうふうに課題が見えていて、これからどういう方針で活動していけそうかというところが見えていとお見受けしたのですが、実際これからどういうふうに活動を進めていこうと考えていますか。

鈴木——先ほど食品開発を紹介したのですが、昨日（9月14日）は沼津商業からジオパンの話をしていただき、今日（9月15日）は松崎高校さんとジオスイーツについてお話ししてきて、食品開発の部分もSDGsでやっていきたいと思っています。

教育が本来のメインに当たるので、これから伊豆半島を支えていくであろう子どもたちにもっと地元のことを好きになってもらえるよう、ジオパークの観点から子どもたちに教育して、地元を好きになってもらえるような活動も考えていきたいと思っています。

阿部——例えばジオパークの活動もそうですし、ジオガシ旅行団の鈴木美智子さんはジオ菓子を作る教室も地元の子どもたちにされていますよね。モデルとなるようなものがたくさんあって面白いと思います。それを高校や中学とコラボして進めているので期待しています。

荒武——食をテーマに推進されていくのはとてもいいなと思いました。自分の拠点も食をテーマにしたコミュニティスペースで、高校生などに子ども食堂みたいなことをしてもらっているのです。もし良かったら東伊豆町で絡めることがあるかもしれないので、うちのキッチンを使ってもらえば地元の人たちも呼べるし、そこで何か面白いことができるかもしれないので活用してください。

阿部——こうやってダイロクキッチンの活用率が上がるのですね。

荒武——ちょっと営業みたいになってしまいましたが、いい形でこういう機会につながることができたので、ぜひ活用いただけたらと思います。

阿部——本当にいろいろな世代が関わっていて、地元のおばあちゃんたちは孫だと思っているようですね。

荒武——ありがたい限りです。

阿部——他にもしなければ、パネリストの方々、発表者の方々から一言ずついただいて終わりにしたいと思います。

山口——私は個人的に、今のジオパークの取り組みに若干不安を持っています。私はどちらかというと、文化の部分を重視すべきだと思っているのと、教育につなげるという話でしたが、文化をどう教育につなげるかということで、今の暮らしとジオがどういう関わりを持っているか、これまでどういう暮らしがこの地域で行われてきたのかということ、子どもたちに継承していくことが文化を維持することでもあり、ジオパーク構想の到達点に近づくことでもあると思っています。

それから、地域経済の視点で見ると、ジオガイドたちがボランティアでしていて、これも先ほどの行政が立ち入る隙という話にもつながってくるのですが、ボランティアガイドが頑張ってくれて、それを行政が支える仕組みが割ときれいというか、かっこいい仕組みとして見えてきていると思っています。ジオの推進体制ではそのような形を推奨していると感じているのですが、そこに経済の仕組みが入ってこないと循環しないし、長続きはしないと思うのです。

逆にボランティアガイドを育てることよりも、ジオで稼げる人を行政や民間がしっかり育てていくことで、ボランティアではなく、仕事として活動できる人をつくっていかないと長続きしていかないのではないかと。今のボランティアさんは盛り上がっているからいいけど、一過性で終わって、すぐに淘汰されていくのではないかと一抹の不安を抱えています。ですので、ぜひ経済的、文化的な観点からも取り組んでいただければありがたいと思います。

深澤——結局こうやって関わるのが一番大事かなと思っています。人と会ったり話したりす

ることが次のステップというのが、フューチャーセンターの中でもあったと思うのですが、人間がいる限り、積極的に関わっていくといろいろなものが見えてくると思います。

情報はインターネットなどいろいろなものでいくらでも取りにいけますが、あり過ぎて的確に取りに行くことが難しくなっている気はしています。自分が行動することによって、その行動に関わる人たちが寄ってきたり、意見してくれたり、それこそ荒武がシャッターを開けていたら必要な人が声を掛けてくれるようなことを、生きていく中でやっていけるようになれば伊豆に来た価値があると思いますし、これからも関わっていけるという気がしますので、ぜひお願いしたいと思います。

荒武——自分も思いの丈は結構伝えさせてもらったのですが、呼んでもらいたいという気持ちがすごく湧きました。学生さんたちの活動で、参加者を募るような機会があると思うのですが、そういうときに頭数の1にしかならないかもしれないですけど、みんなの活動も応援したいし、自分が参加させてもらうことで伝えられることもあると思うので、そういうことを地元の先輩たちにもしていただいているので、ここでできたつながりや地域でできているつながりをうまく活用してもらえるといいと思います。これからもよろしくお願いします。

地域連携を通じた人材育成

静岡大学理事（教育担当）／副学長

地域創造教育センター長

丹沢 哲郎

平成25年度に始まった地域課題解決支援プロジェクトも6年目を迎えました。各地で取組が行われ、本号も含めた4冊の成果報告書にみるように、地域の様々な方々との交流を通して、学生も教職員もたくさんの方の事を学んでいます。地域課題の提案をきっかけとして、各地域に関わり、住民の方々と交流し、課題解決をともに考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。

様々な試行とその蓄積のなかで、具体的な地域課題を中心におきながら、教員だけを導き手とするのではなく、学生だけで学ぶのではなく、様々な立場の地域の方々と交流・協働しながら、実践的に学び合うことが、大学にとって不可欠であるとあらためて感じています。

静岡大学では、第1期・2期の公募で寄せられた地域課題の解決支援を進めており、学内外の研究室、静大フューチャーセンターなど、多様な担い手に協力いただいています。平成28年度に開設された学部横断型教育プログラム「地域創造学環」との連携・協働も4年目を迎えようとしています。この間、伊豆賀茂地区からの提案課題との対応をはかりながら、松崎町、東伊豆町には学環学生のフィールドワークを受け入れていただいています。さらには、松崎町、東伊豆町、南伊豆町、菊川市等の課題提案者を報告者としたCOC+地域課題研究フォーラム・公開シンポジウム等を開催し、本学学生・教職員のほか、地域の方々や他大学の学生の皆さんも参加しています。

地域連携・貢献と地域人材育成を推進するため、平成29年10月に開設された「地域創造教育センター」も2年目を迎え、実質的な活動を進めています。地域課題解決支援プロジェクトは、大学が地域づくりの支援者・担い手になろうとする取組ですが、地域からの様々な働きかけ、協力、支援がなければそもそも成立しない試みです。これまで同様、地域の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。



静岡大学
地域課題解決支援プロジェクト成果報告書 第4号

発行日——2019年3月27日

発 行——静岡大学地域創造教育センター

編 集——大谷 悦子

連絡先——静岡大学地域創造教育センター 地域人材育成・プロジェクト部門

〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817 E-mail : kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

ウェブサイト——<http://www.lc.shizuoka.ac.jp/>

印 刷——株式会社三創